

多賀城市文化財調査報告書第92集

小沢原遺跡ほか

小沢原遺跡第 10 次調査
留ヶ谷遺跡第 5 次調査
高崎 遺跡 第 68 次調査
高原 遺跡 第 6 次調査

平成 20 年 3 月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には、国の特別史跡多賀城跡をはじめとする多くの遺跡が所在しております。これまでの発掘調査により、本市が古代から中世にかけて東北地方の政治・経済の中心を担っていたことが明らかになってまいりました。このような貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは、我々の重要な責務であると考えております。そのため、当教育委員会としても、開発事業との円滑な調整を図りつつ、埋蔵文化財を適正に保護し、その活用に努めているところであります。

さて、今回報告いたします4件の調査は、平成19年度に受託事業として実施した発掘調査であります。小沢原遺跡では小範囲の調査ではありましたが、官人層の邸宅の一部と考えられる古代の建物跡を発見しました。留ヶ谷遺跡では、幅5m以上の大規模な堀跡が発見されました。留ヶ谷地区では中世城館を構成する土壘や平場が数箇所で確認されており、今回発見した堀跡もそれら館跡の一部であると考えられます。

今後、これらの成果につきましては、本書はもとより展示等の普及活動を通じて広く一般に公開してまいります。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、御理解と御協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成20年3月

多賀城市教育委員会
教育長 菊地 昭吾

例　　言

- 1 本書は、平成19年度の受託事業で実施した4件の調査成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの連続番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。
- 4 挿図中の高さは標高値を示している。
- 5 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
- 6 金属製品のX線透過撮影は及川規氏（東北歴史博物館）に依頼した。
- 7 近世陶器の年代・産地については、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）のご教示を得た。
- 8 本書の執筆はI・II・Vを武田健市、III・IVを村松稔が担当した。また、遺構・遺物の図版作成及び遺物の写真撮影は担当者が行った。
- 9 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。
SB：建物 SA：柱列 SE：井戸 SD：溝 SK：土壙 Pit (P)：柱穴及び小穴
SX：道路・河川及びその他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』（多賀城市教育委員会 2003）に従った
- 3 瓦の分類は『多賀城跡 政庁跡 図録編』（宮城県多賀城跡調査研究所 1980）、『多賀城跡 政庁跡 本文編』（宮城県多賀城跡調査研究所 1982）の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年（934）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）、『扶桑略記』延喜15年（915）7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考え方（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

調査要項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 櫻井清勝
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 係長 千葉孝弥
研究員 武田健市
技師 村松稔
主事 吉田智治
発掘調査員 鈴木琢郎
- 4 調査協力者 伊藤甚一 小野寺昌美 小幡よしあ 菅野昭市 小西やい 鈴木源志 戸枝武治
戸枝長一 三橋嘉男 毛利新悦 毛利新吉
大東建託株式会社 株式会社サンエイ 中城建設株式会社
- 5 調査従事者 浅野喜久男 内海照夫 大場孝也 岡本典子 小野玉乃 狩野悌 小松まり
今野晃子 塩井一征 清水亮 下山功暁 杉知子 鈴木政義 南城美岐子
橋沼茂二 藤田恵子 松田正樹
- 6 整理従事者 遠藤友美 中村千恵子 松崎祥子 村上和恵 横山佳織

No.	遺跡名・調査次数	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	小沢原遺跡第10次	浮島二丁目97番1の一部 浮島二丁目97番4	平成19年4月6日～5月10日	130m ²	武田・鈴木
2	留ヶ谷遺跡第5次	留ヶ谷一丁目 353-1、359-2、358-2	平成19年5月24日～8月24日	389m ²	村松
3	高崎遺跡第68次	高崎二丁目288外22筆	平成19年8月21日～10月5日	500m ²	村松・鈴木
4	高原遺跡第6次	浮島字高原71番1	平成19年11月13日～11月15日	64m ²	武田

目 次

I	多賀城市的地形と遺跡の位置	1
II	小沢原遺跡第10次調査	2
III	留ヶ谷遺跡第5次調査	25
IV	高崎遺跡第68次調査	51
V	高原遺跡第6次調査	73

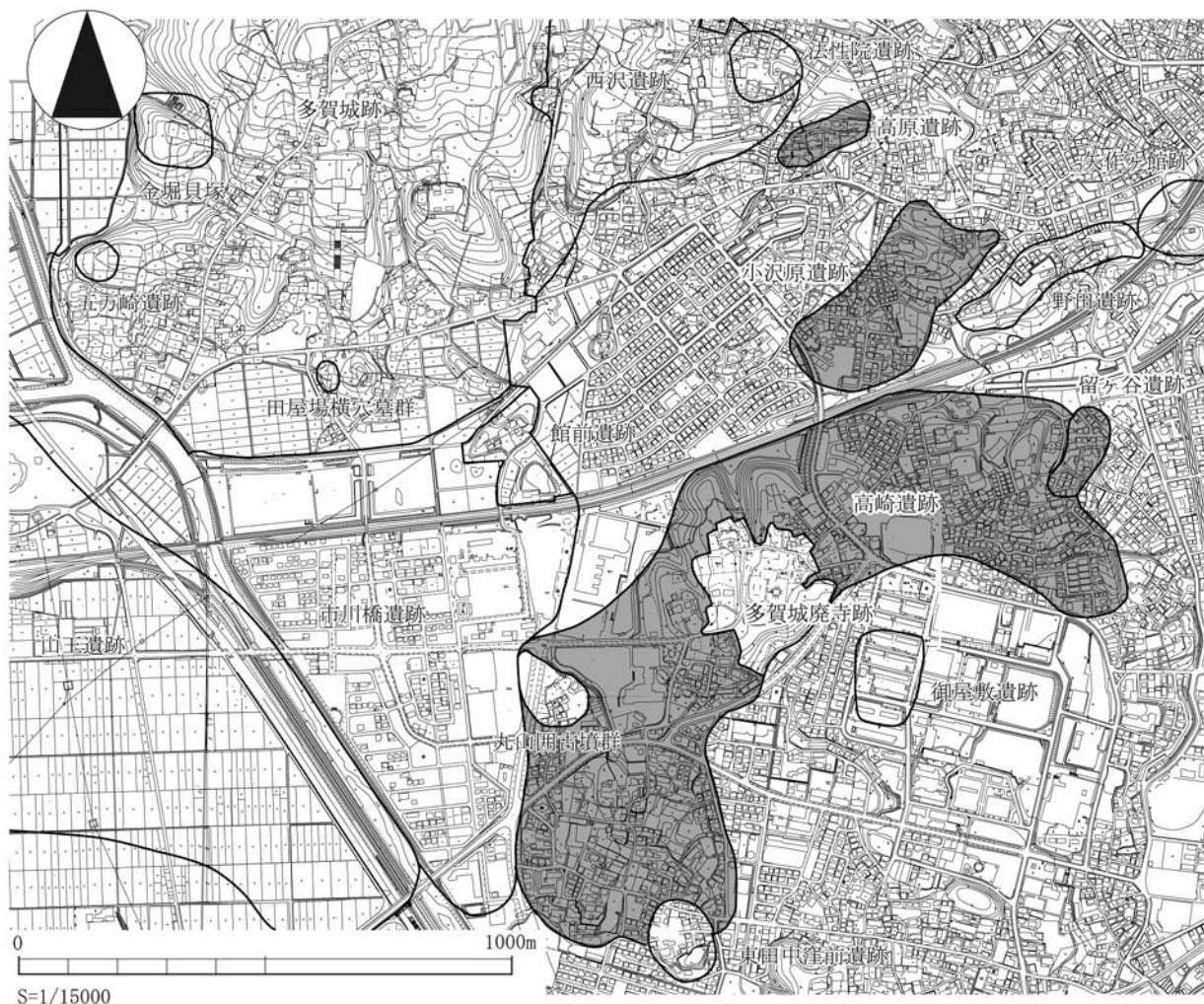
I 多賀城市的地形と遺跡の位置

多賀城市は、宮城県の中央やや北東寄りに位置し、南西側で仙台市、北西側で利府町、北東側で塩竈市、南東側で七ヶ浜町と接している。市内の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は松島・塩釜方面から伸びる標高40~70mの低丘陵であり、標高を減じながら南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相を見せている。沖積地は仙台平野の北東端部に相当する。仙台市岩切方面から多賀城跡にかけての県道泉塩釜線沿いには標高5~6mの微高地が伸びており、その北側には利府町に跨る低湿地が広がっている。

高崎・留ヶ谷・小沢原・高原の各遺跡は多賀城跡の東側から南東側に連なる丘陵西端部に位置している。これらは谷状の地形等によって分断されているものの近接した位置にあり、同様な地理的環境にある遺跡といえよう。



第1図 多賀城市の位置



第2図 調査遺跡と周辺の遺跡群

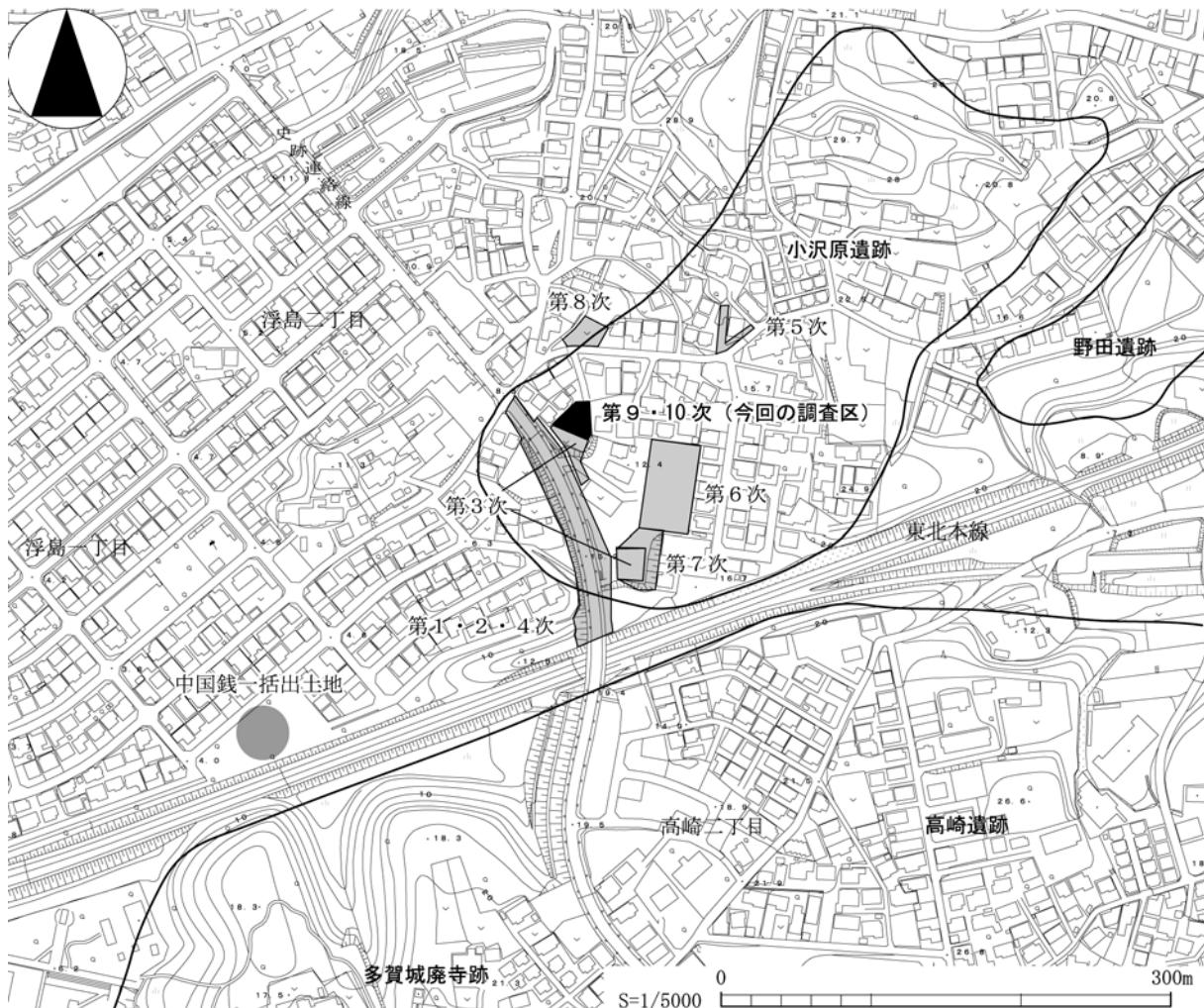
II 小沢原遺跡第10次調査

1 調査区の位置とこれまでの調査成果

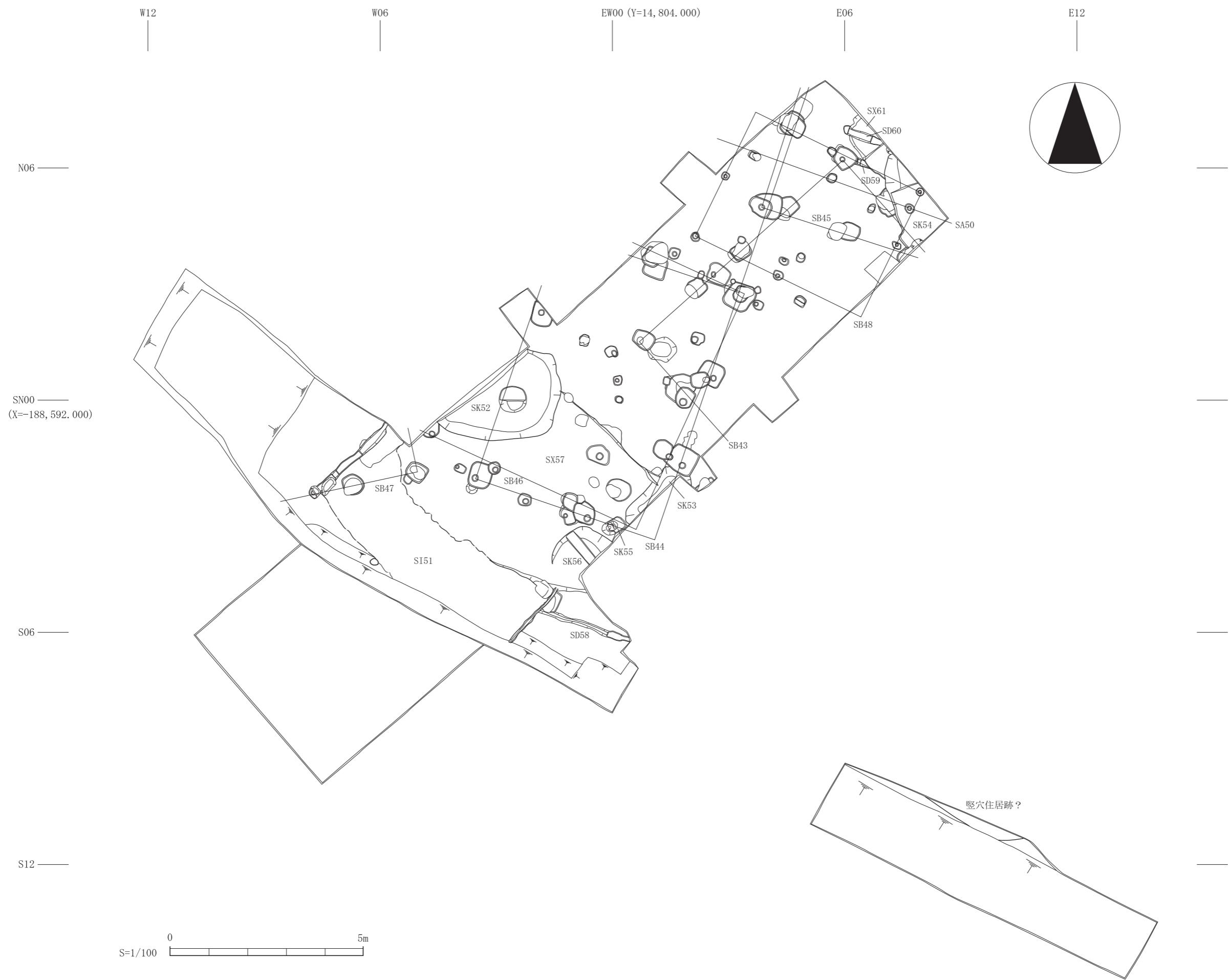
本調査区は小沢原遺跡の西端部に位置しており、現況は宅地や畠地である。南西側に向かって下る緩斜面に位置しており、標高は9.2～9.8mである。これまで本地区周辺では数カ所で発掘調査を実施しており、古代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土器埋設遺構、土壙などが発見されている。その多くは本調査区西側及び南側に隣接する第1～3次調査区で発見されており、特に第1・2次調査区では桁行5間以上、梁行3間の建物跡が確認されるなど官人層の居宅の可能性を窺わせるものである。土器埋設遺構は、北東約100mにある第5次調査で発見されている。一方、昭和27年に本地区より約300m南西側の地点で、大量の古銭が発見されている。大部分が紛失したとされているが、残存する204枚全てが中国銭であることから中世の備蓄銭の可能性も考えられている。

2 調査に至る経緯と経過

本調査は、浮島二丁目地内における宅地造成工事に伴う本発掘調査である。平成18年12月、開発業者より当該区における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、現在借家及び畠地として利用している場所で5区画分の宅地造成を行い、その中央に幅6m、長さ約25m



第1図 第10次調査区と周辺の調査区



第2図 調査区全体図

の道路を建設し西側の市道史跡連絡線に接続するというものであった。また、造成の際には対象区の北側から西側にかけて設置されている既存の擁壁を解体し、新たな擁壁を設置する計画も示されていた。一方、本地区周辺では史跡連絡線建設に伴って行った第1・2・4次調査（平成5・6・9年度）や個人住宅建築に伴い実施した第3次調査（平成8年度）で掘立柱建物跡や竪穴住居跡などを発見していたことから、当該区にも遺構が存在する可能性が高いと考えられた。このため、開発業者と協議を重ねた結果、事前に遺構の状況を把握するための確認調査を実施し、これを踏まえて本発掘調査の期間及び経費を積算することで合意に達した。平成19年3月5日、道路建設部分の確認調査（第9次調査）を実施したところ、現表土下60～70cmで多くの柱穴や土壙が確認されたことから、直ちに本発掘調査に係る期間と費用の積算に取りかかった。3月29日、開発業者と本発掘調査に係る打ち合わせを行い、当方が提示した期間及び費用で概ね合意に達したことから、4月5日に本発掘調査の委託契約を締結した。

調査は4月6日より開始した。はじめに、既存の擁壁の解体に立ち会ったが、南側の一部を除き大部分が擁壁建設時に破壊されていたことが明らかとなった。また、道路建設部分についても擁壁の西側では遺構が発見されなかつことから、安全面を考慮し写真撮影終了後直ちに埋め戻しを行った。4月9日、重機による道路部分の表土除去を開始すると同時に、作業員を導入し調査区の環境整備を行う。4月10日、遺構検出面を精査し、SB44～48掘立柱建物跡、SI51竪穴住居跡、SK52～54土壙、SX57竪穴遺構などを確認した。4月11日、最も新しいSK52土壙の半截を開始すると共に、検出した柱穴の柱痕跡又は柱抜取り穴の有無を確認する。4月12日、実測図作成のための基準点を調査区内に設置し、遺構平面図の作成を行う（～13日）。4月18日、柱穴の半截作業を開始し、終了したものから写真撮影と断面図作成を行う。4月23日、SX57竪穴遺構完掘後、SB44掘立柱建物跡の南妻棟通り下柱穴と南西隅柱穴、SB46南側柱列を検出した。これにより、SB44掘立柱建物跡は桁行5間以上の建物跡であることが明らかとなった。5月1・2日、遺構埋土の土層注記、平面・断面図の内容確認を行い、5月7日調査区の全景写真を撮影した。その後、各遺構の年代決定資料を得るために埋土の完掘作業を行うと共に、建物跡の規模や展開を探るために数カ所で調査区を拡張するなど補足的な調査を実施する。5月10日、これら作業が完了すると共に調査器材の撤収を行い、現地発掘調査の一切を終了した。

3 調査成果

（1）層序

今回の調査では、現代の盛土下が直ちに遺構検出面となっている。北から南に向かって下っており、両端の比高は30cmとなる。

I 1層：現代の表土であり、厚さは15～30cmである。

I 2層：現代の砂利層であり、厚さは10～40cmである。

I 3層：ビニール袋やガラス片が混入する現代の盛土であり、厚さは10～20cmである。

II 層：明黄褐色粘質土であり、厚さは北端部で約30cmである。今回発見した遺構は、全てこの上面で確認している。

(2) 発見遺構と遺物

SB44掘立柱建物跡（第3図）

調査区中央から北部で発見した、桁行5間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。SB43・45・46、SK52・53、SX57と重複し、SB43を除く全ての遺構よりも古い。柱穴は側柱8基と、南より3間目の棟通り下で1基検出している。南西隅柱穴、南妻棟通り下柱穴、東側柱列南より1・2間目柱穴、西側柱列南より2間目柱穴、南より3間目の棟通り下柱穴で柱痕跡を確認した。方向は、東側柱列で測ると北で約18度東に偏している。桁行については東側柱列で11.6m以上であり、柱間は南から1間目の柱穴より2.39m、約2.2m、約2.4m、約2.2mである。梁行については、南妻より2間目の側柱間でみると約4.78mである。柱間は南妻の西から1間分が3.08mであり、棟通り下柱穴は東側に寄っている。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は最も大きい東側柱列南から1間目柱穴で測ると、長辺約80cm、短辺約70cm、深さ約70cmである。埋土はにぶい黄褐色砂質土、灰黄褐色砂質土が主体であり、明黄褐色粘質土、黄褐色粘質土が多量に混入している。柱痕跡は直径15cmの円形であり、埋土は暗褐色または灰黄褐色砂質土である。

遺物は、掘り方から土師器杯・甕（B類）、抜取り穴埋土から土師器杯（B類）の小片が出土している。

SB43掘立柱建物跡（第4図）

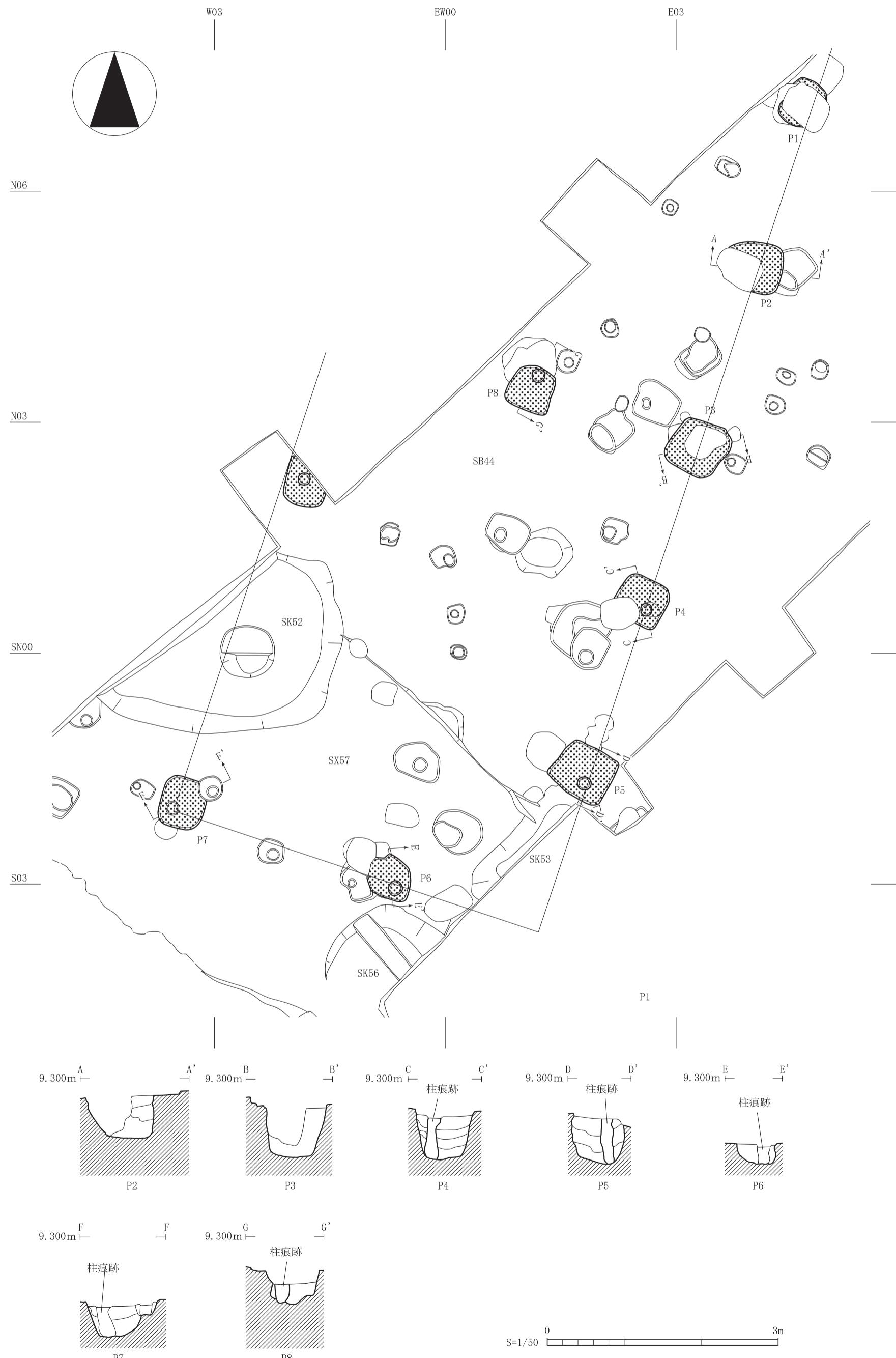
調査区北部で発見した掘立柱建物跡であり、桁行4間、梁行2間以上の東西棟と推測される。SB44・45、SD59、SK54と重複し、それよりも古い。柱穴は7基検出しており、北西隅柱穴、北東隅柱穴、西妻北より1間目柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認した。柱抜取り穴については、東妻北より1間目柱穴を除く全てが柱のあたり痕跡を残すものである。方向は、桁行で測ると東で約42度北に偏している。規模は桁行が7.02m、柱間は西より1.83m、1.65m、1.49m、2.05mである。梁行の柱間は、東妻が約1.7m、西妻が1.94mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は最も大きい東妻北より1間目柱穴で測ると、長辺約70cm、短辺約60cm、深さ約60cmである。埋土はにぶい黄褐色砂質土や灰黄褐色砂質土が主体であり、明黄褐色粘質土がブロック状に多量に混入している。また、北東隅と東妻北より1間目柱穴では、にぶい黄褐色砂質土主体の埋土と明黄褐色粘質土主体の埋土が互層になっているのを確認した（註）。柱痕跡は直径13cmの円形であり、埋土は灰黄褐色砂質土である。柱抜取り穴は明黄褐色砂質土が多く混入する灰黄褐色砂質土であり、掘り方埋土と近似している。

遺物は、掘り方から土師器杯（BV類）の小片が出土している。

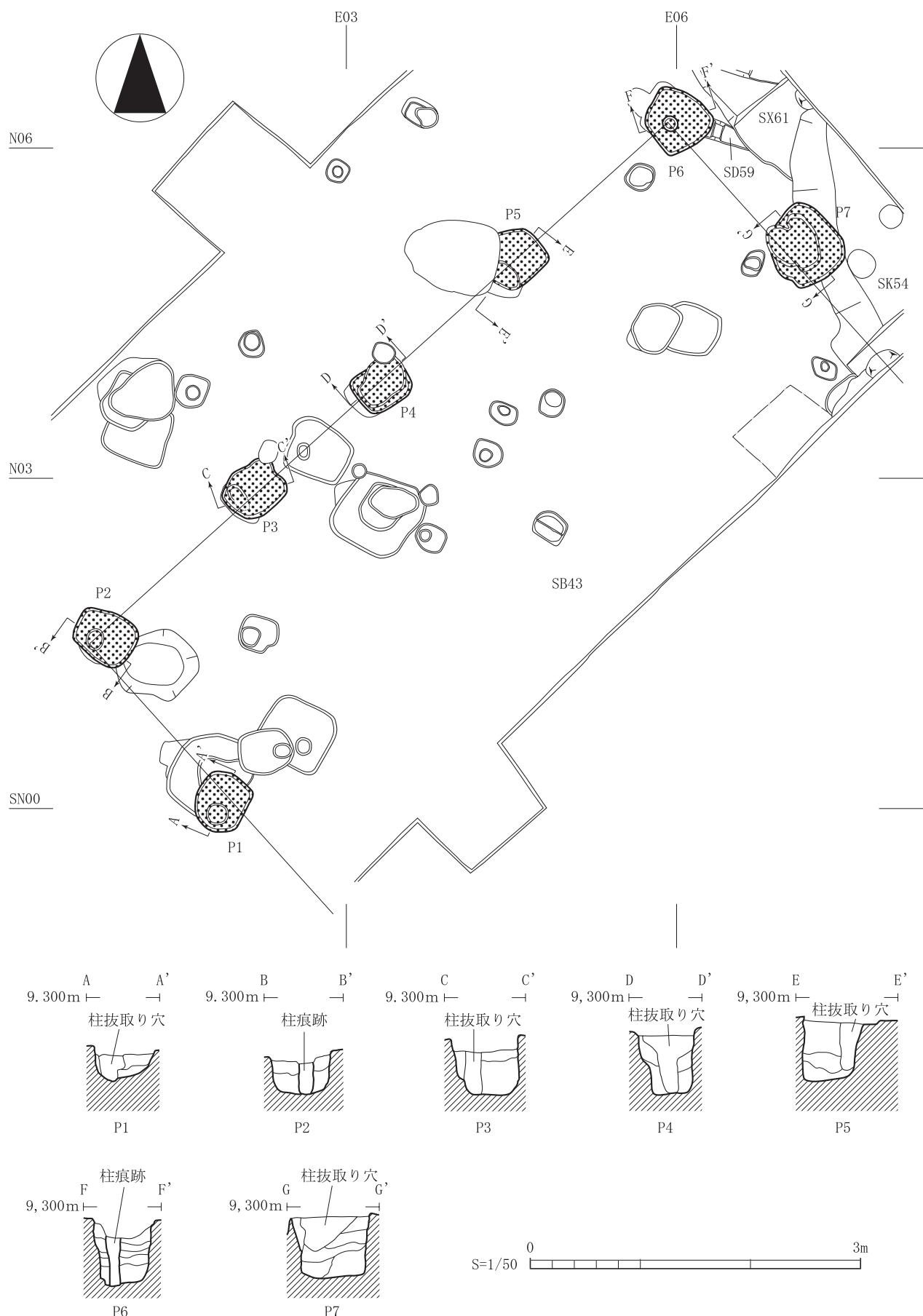
SB45掘立柱建物跡（第5・7図）

調査区北部で発見した、南北2間以上、東西2間以上の掘立柱建物跡である。SB44、SK54と重複し、それよりも新しい。柱穴は4基検出しており、南西隅柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、西側の柱列で測ると北で約19度東に偏している。規模は西側の柱列の柱間が約2.3m、南側の柱列の柱間が約2.2mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は南西隅柱穴で測ると、長辺約60cm、短辺約50cm、深さ約50cmである。埋土は、黒褐色砂質土、黄褐色砂質土が主体であり、明黄褐色粘質土が多く混入している。柱抜取り穴の埋土は、炭化物や明黄褐色粘質土がブロック状に混入する黒褐色砂質土である。なお、南西隅柱穴と南側の柱列西から1間目柱穴では、柱抜取り穴の底面で長さ

註：このうち東妻北より1間目柱穴では、互層状の埋土よりも古い掘り方埋土（凝灰岩が多量に混入するにぶい黄橙色粘質土）を確認している。調査区が限られているため詳細は明らかではないが、掘り方の深さを微調整した痕跡若しくはSB43よりも古い建物跡が存在する可能性の2つが考えられる。



第3図 SB44平面図・断面図



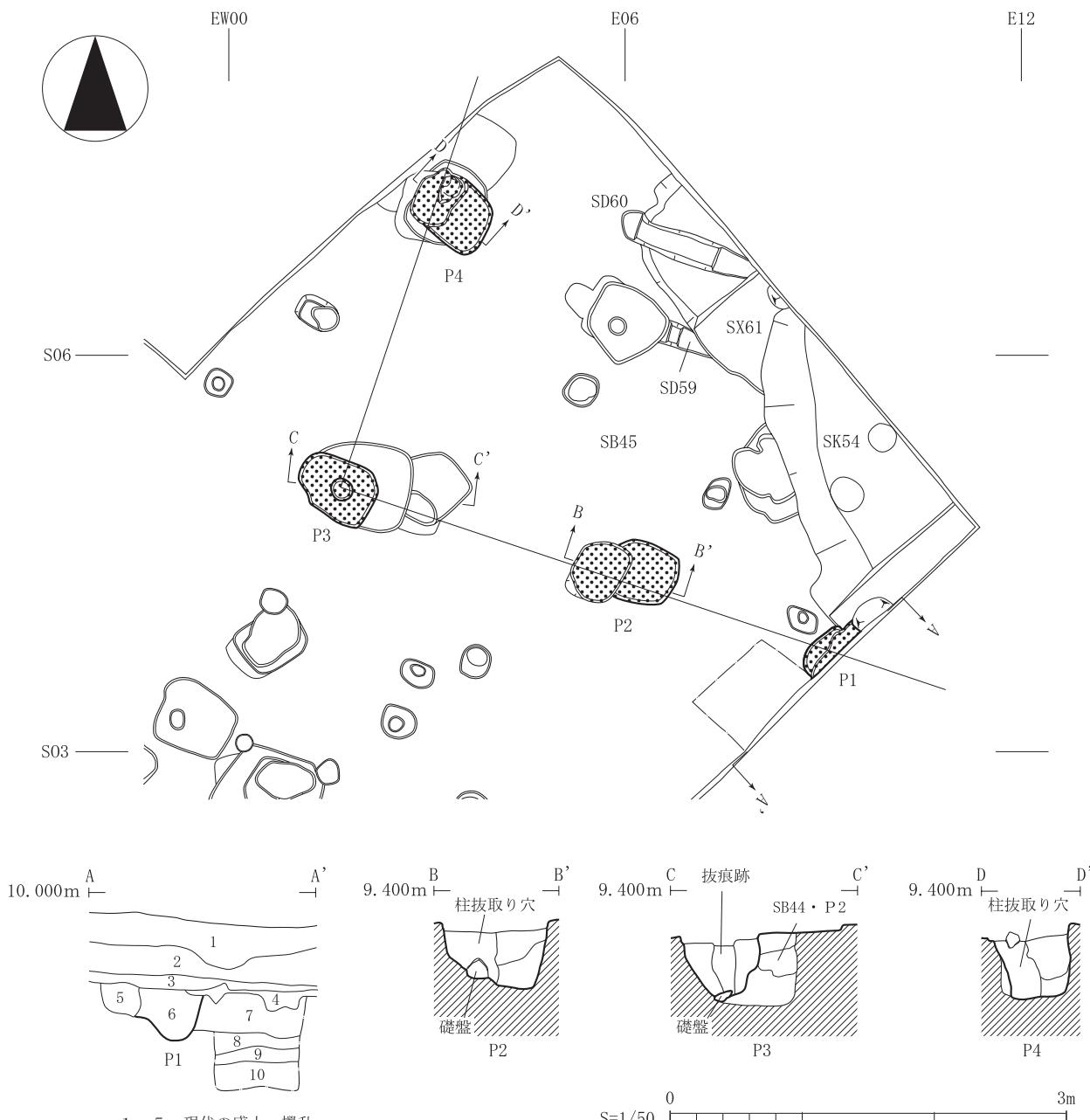
第4図 SB43平面図・断面図

15~20cmの礎盤を確認している。

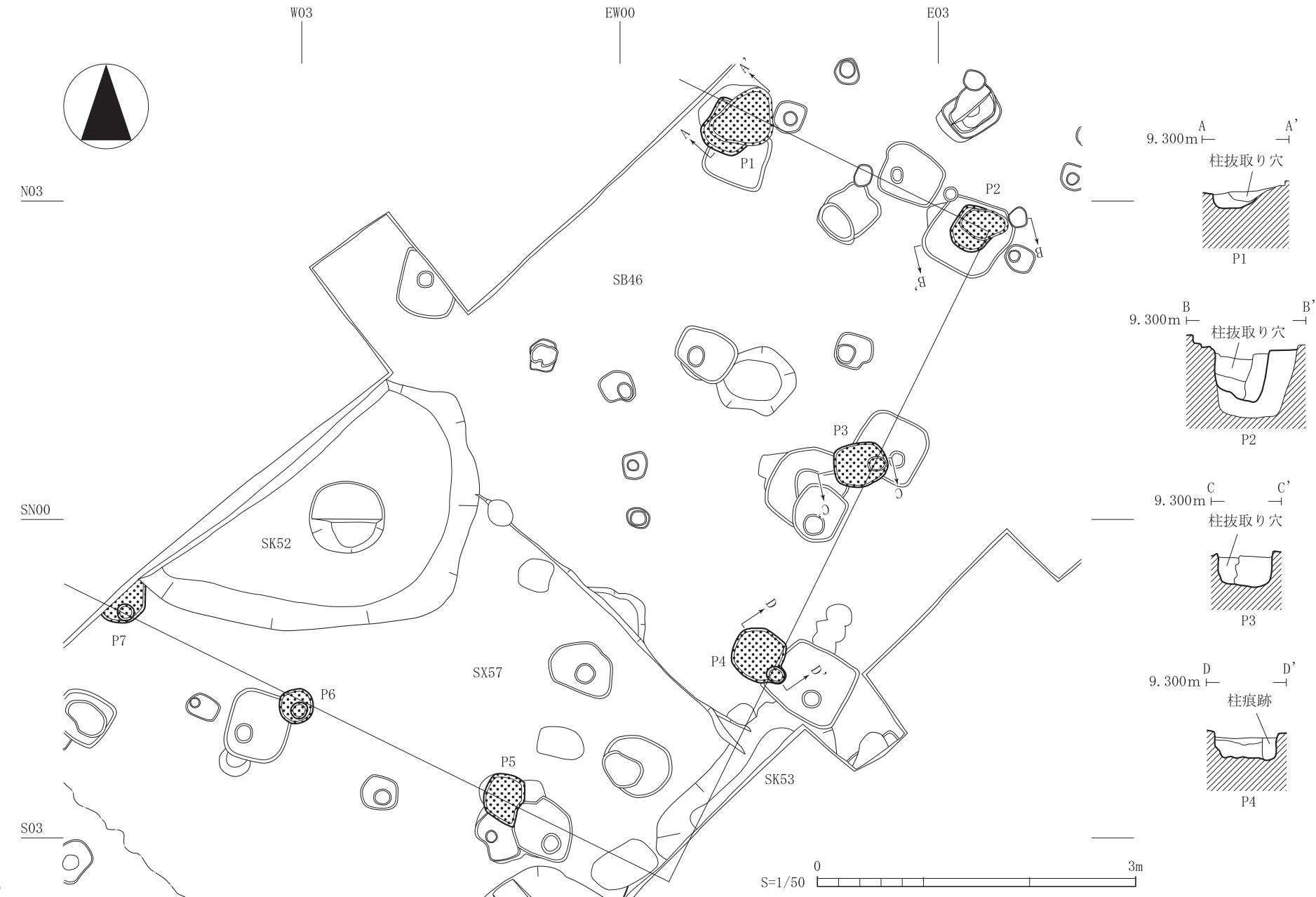
遺物は、掘り方から土師器杯（BV類）、須恵器杯（IIa類）、柱抜取り穴から土師器杯（B類）、須恵器杯（BV類）が出土している。

SB46掘立柱建物跡（第6・8図）

調査区中央部で発見した南北3間、東西3間以上の掘立柱建物跡である。SB44、SK52、SX57と重複し、SK52、SX57よりも古く、SB44よりも新しい。柱穴は7基検出しており、南側の柱列東より2・3間目柱穴と東側の柱列北より2間目柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認した。このうち東側の柱列北より1間目柱穴の柱抜取り穴は、柱のあたり痕跡を残すものである。方向は、東側の柱列で測ると北で約25度東に偏している。規模は東側の柱列で約6.9mと推測され、柱間は北より約2.5m、2.22m



第5図 SB45平面図・断面図



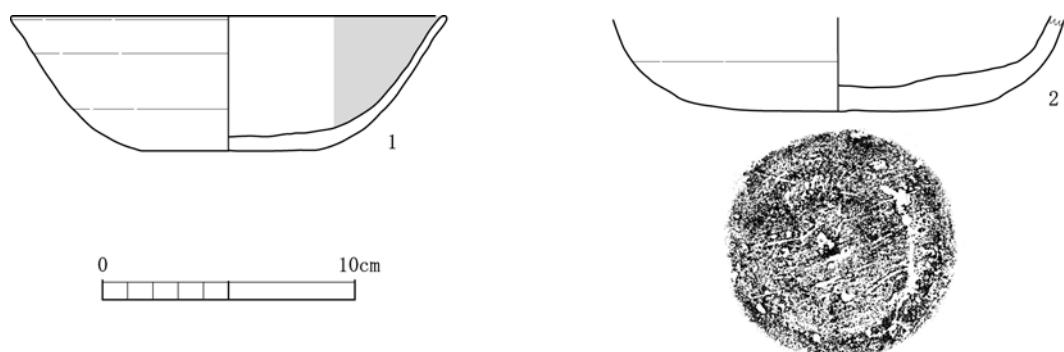
第6図 SB46平面図・断面図

である。東西方向の柱間については、北側の柱間が約2.6m、南側の柱列東より2間目・3間目が約2.1m、1.88mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は東側の柱列北より2間目柱穴で測ると一辺約50cm、深さ約30cmである。埋土は灰黄褐色砂質土やにぶい黄褐色砂質土が主体であり、明黄褐色粘質土が斑状に多く混入している。柱痕跡は直径15~18cmの円形であり、埋土は黒褐色または灰黄褐色砂質土である。柱抜取り穴は、明黄褐色粘質土や炭化物が多く混入するにぶい黄褐色または灰黄褐色砂質土が主体である。

遺物は、柱抜取り穴から土師器杯（BV類）・土師器甕（A・B類）、須恵器杯（V類）、鉄鏸、平瓦（II Ba類）が出土している。

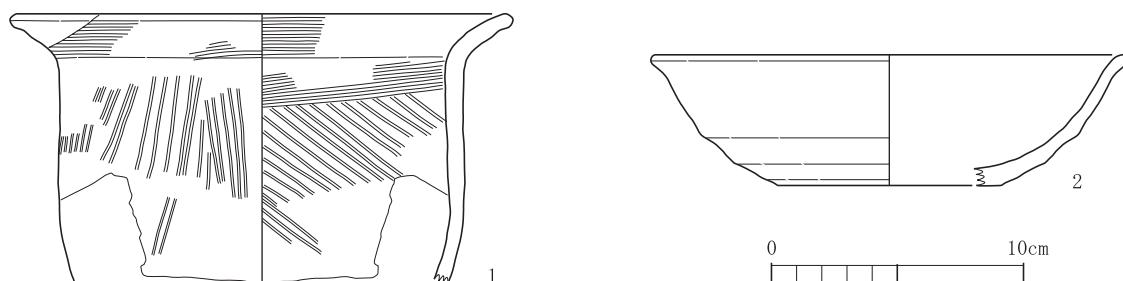
SB48掘立柱建物跡（第9図）

調査区北部で発見した桁行2間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡である。SB43、SK54と重複し、それよりも新しい。柱穴は6基検出しており、北側柱列東より1間目柱穴で柱抜取り穴、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。方向は、南側柱列で測ると西で25度56分北に偏している。建物の規模は桁行が



番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外 面	内 面						
1	土師器 杯	P4・掘り方	ロクロナデ 底部：回転糸切り	(ヘラミガキ)、黒色処理	13.0 3/24	5.2 12/24	4.0	-	R 6	
2	須恵器 杯	P4・掘り方	ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	-	9.0 24/24	-	9	R 5	II a類

第7図 SB45出土遺物



番号	種類	層位	特 徵		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備 考
			外 面	内 面						
1	須恵器 瓶	P3・抜取り穴	口縁部：ヨコナデ 体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ 体部：ハケメ、ナデ	14.9 4/24	-	-	-	R 8	A類
2	須恵器 杯	P1・抜取り穴方	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	14.0 3/24	6.6 4/24	3.9	-	R 7	V類

第8図 SB46出土遺物

棟通り下で4.77m、梁行は約3.5mである。柱穴の平面形は方形または円形を基調としており、規模は最も大きい南側柱列西より1間目柱穴で測ると、長径30cm、短径25cm、深さ20cmである。埋土は、黒褐色または褐灰色砂質土であり、明黄褐色粘質土が多く混入している。柱痕跡は直径10~15cmの円形であり、埋土は黒褐色砂質土である。

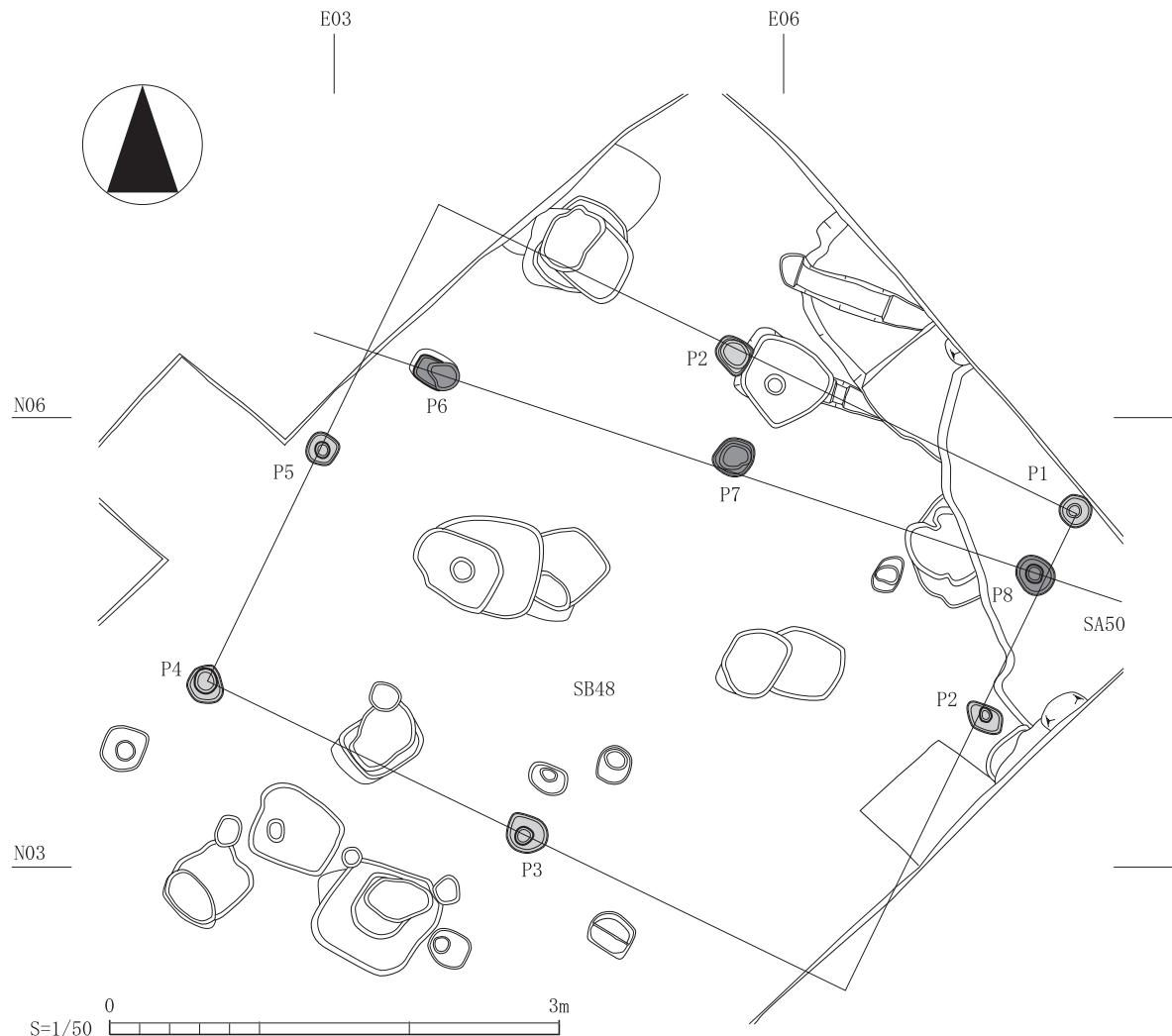
遺物は、土師器杯（B類）の小片が出土している。

SA50柱列跡（第9図）

調査区北部で発見した東西2間以上の柱列跡である。SB43、SK54と重複し、それらよりも新しい。柱穴は3基検出しており、最も東側の柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、西で約19度北に偏しており、柱間は西より約2.1m、約2.2mである。柱穴の平面形は方形または楕円形であり、規模は最も東側の柱穴で測ると、長軸25cm、短軸20cm、深さ15cmである。埋土は、黒褐色または褐灰色砂質土であり、明黄褐色粘質土が多く混入している。柱痕跡は直径12cmの円形であり、埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土していない。

SI51竪穴住居跡（第10図）

調査区南部で発見した竪穴住居跡である。周溝と床面の一部を確認したのみであり、残存状況は非常に悪い。SB47、SX57、SD58と重複し、それらよりも古い。規模は南北約6.4mであり、方向は北辺で測ると

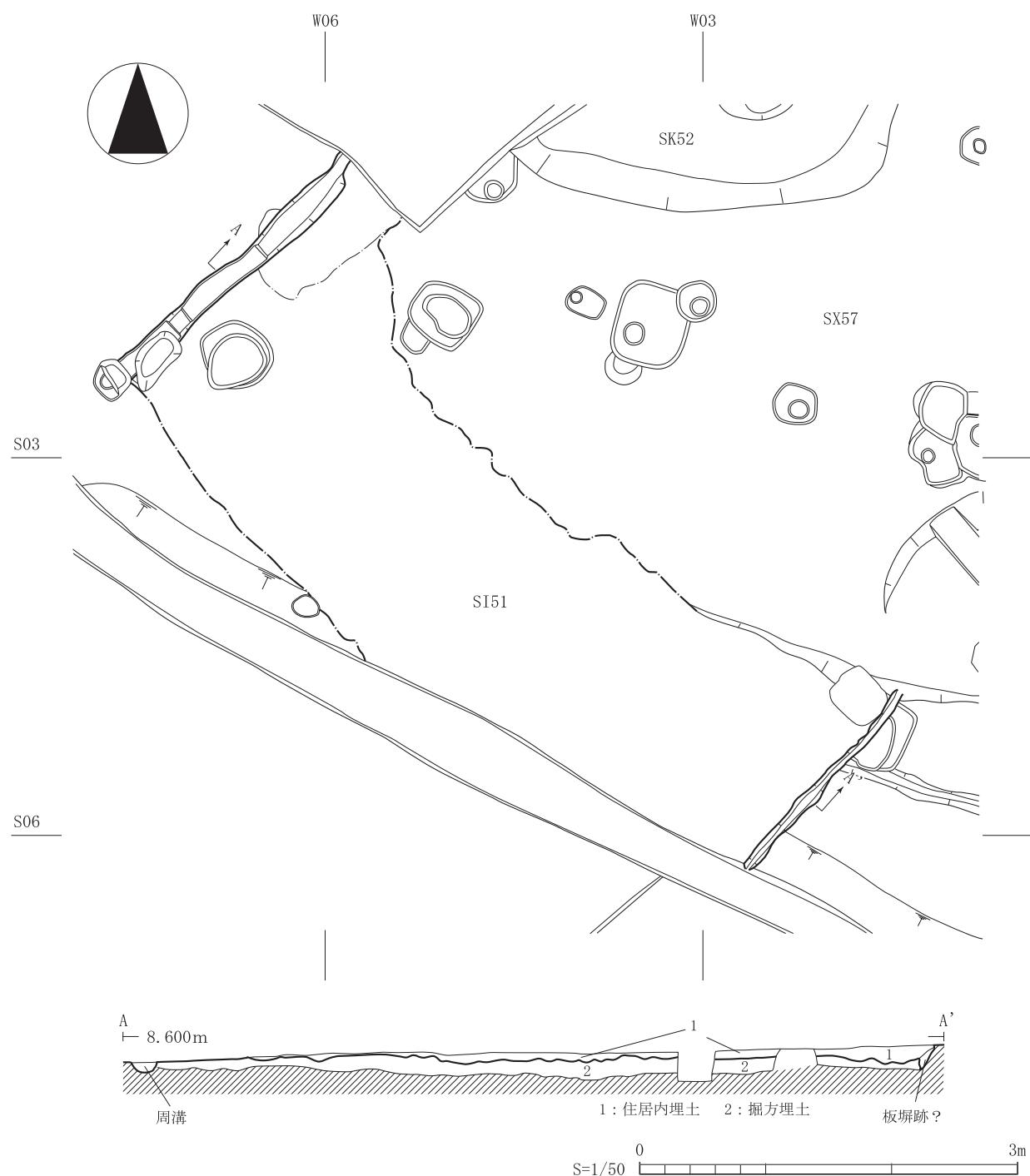


第9図 SB48、SA50平面図

東で約42度北に偏している。床面は掘り方埋土上面であり、北側ほど四凸が著しく南に向かって緩やかに下っている。埋土は、検出面であるⅡ層と近似したにぶい黄褐色粘質土が主体であり、掘り方底面までの深さは10~20cmである。住居内施設としては、北・南辺で周溝を確認した。北辺の周溝は幅15~20cm、深さ約10cmであり、底面での東西の比高は約10cmである。一方、南辺の周溝は幅5~10cmと非常に狭いことから、壁材の痕跡である可能性も考えられる。遺物は出土していない。

SK52土壙（第11・12図）

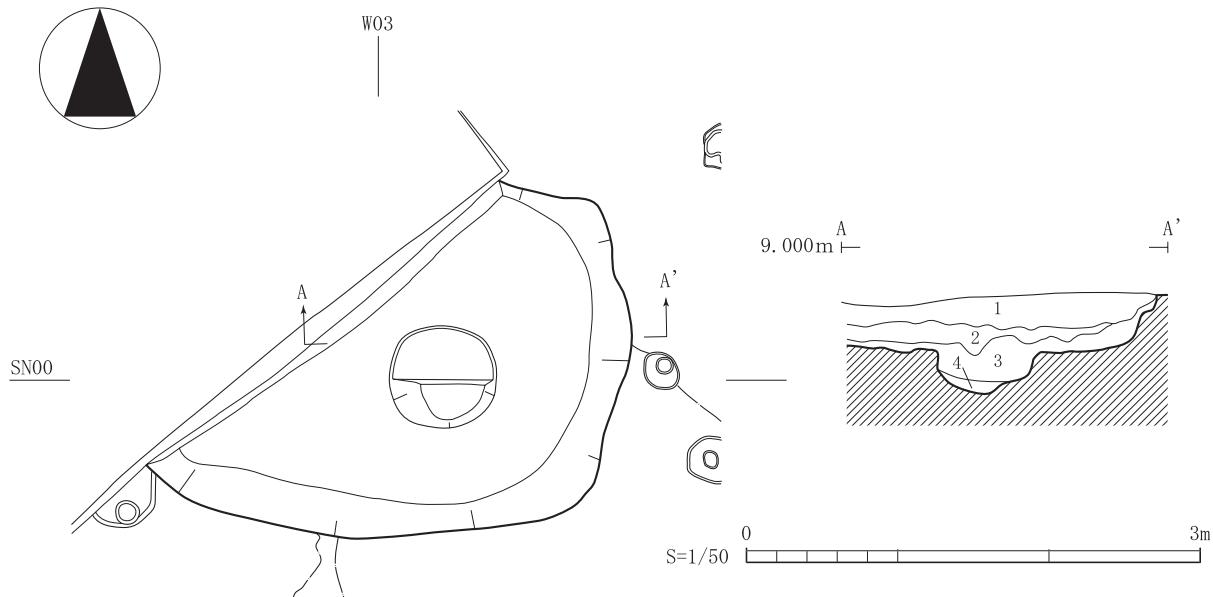
調査区中央部で発見した東西に長い方形の土壙であり、底面の中央やや東寄りには円形の窪みがある。SB44・46、SX57と重複し、それらよりも新しい。規模は、長径3.1m以上、短径約2.4m、深さ約40cmで



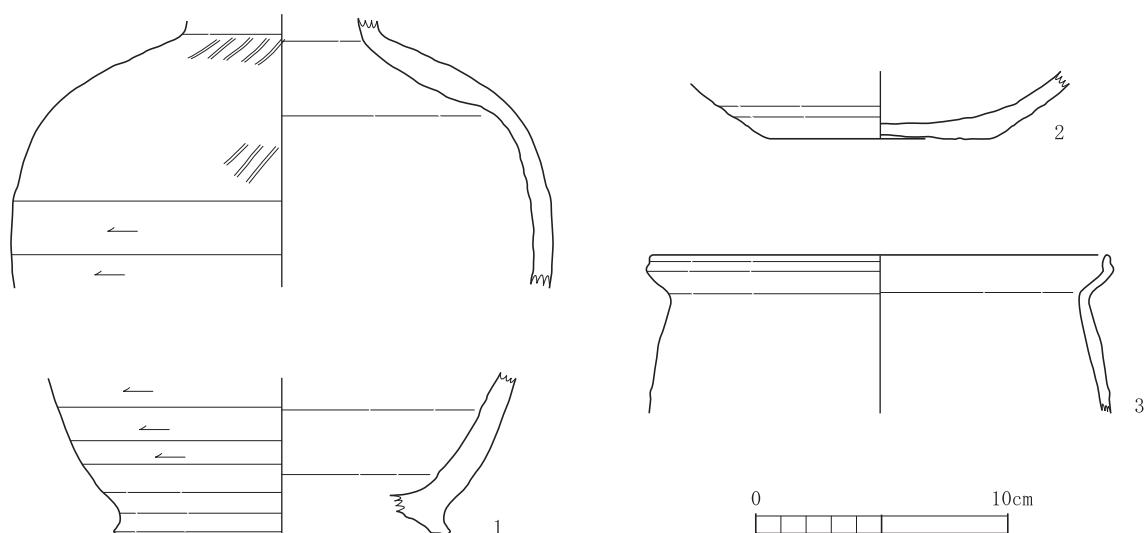
第10図 SI51平面図・断面図

ある。壁はおよそ垂直に立ち上がっている。底面は西側でやや凹凸が認められるものの、概ね平坦である。底面で確認した円形の窪みは、直径約70cm、深さ約30cmである。上部は垂直に立ち上がっているが、底面付近は緩やかに丸みを帯びながら窄まっている。埋土は4層に分けることができる。1層は褐灰色砂質土や炭化物が多量に混入するにぶい黄褐色砂質土、2層はにぶい黄褐色砂質土や炭化物が多量に混入する褐灰色砂質土、3層は炭化物が多量に混入する褐灰色粘質土、4層は灰白色砂質土である。

遺物は土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（II類）・甕、須恵系土器杯が出土している。



第11図 SK52平面図・断面図



単位: cm

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外 面	内 面						
1	須恵器 瓶	K52・1-1	タタキ→ロクロナデ→回転ヘラケズリ	ロクロナデ	-	10 2/24	-	-	R 1	同一個体と 考えられる
2	須恵系土器 杯	K52・1-1	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	-	6.6 6/24	-	-	R 3	
3	土師器 甕	K54・1-1	ロクロナデ	ロクロナデ	13.6 4/24	-	-	-	R 4	B類

第12図 SK52・54出土遺物

SK54土壤（第12・13図）

調査区北東隅で発見した土壤である。SB43・45・48、SA50と重複し、SB45・48、SA50よりも古く、SB43よりも新しい。規模は東西2m以上、南北1.3m以上、深さ約30cmである。壁は緩やかに立ち上がりつておらず、底面は概ね平坦である。埋土は2層に分けることができる。1層は炭化物や明黄褐色粘質土が多く混入する黒褐色砂質土、2層は明黄褐色粘質土が多く混入する灰黄褐色粘土である。

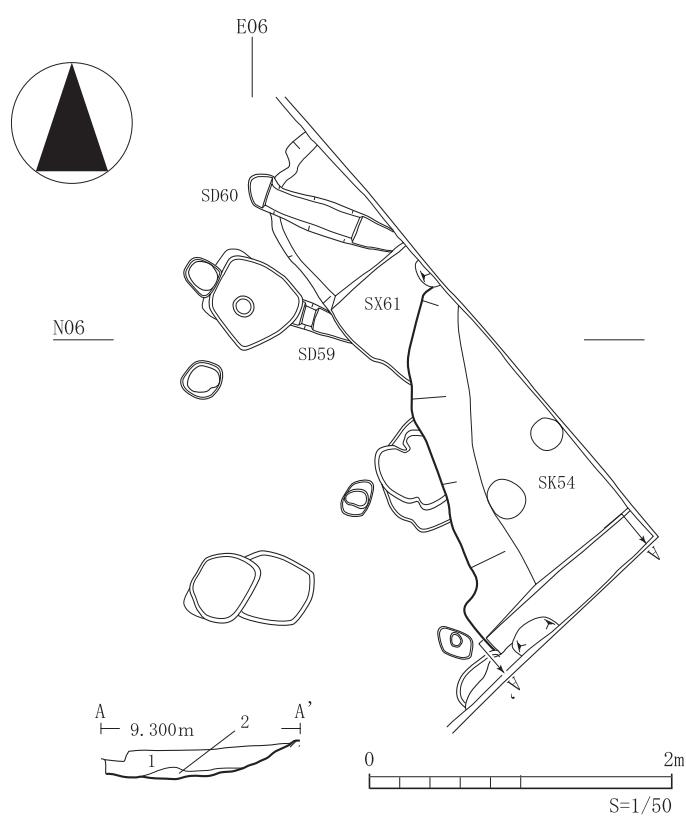
遺物は土師器杯（B類）・甕（B類）が出土している。土師器甕には底部に回転糸切り痕のあるものも確認できる。

SK53土壤（第14図）

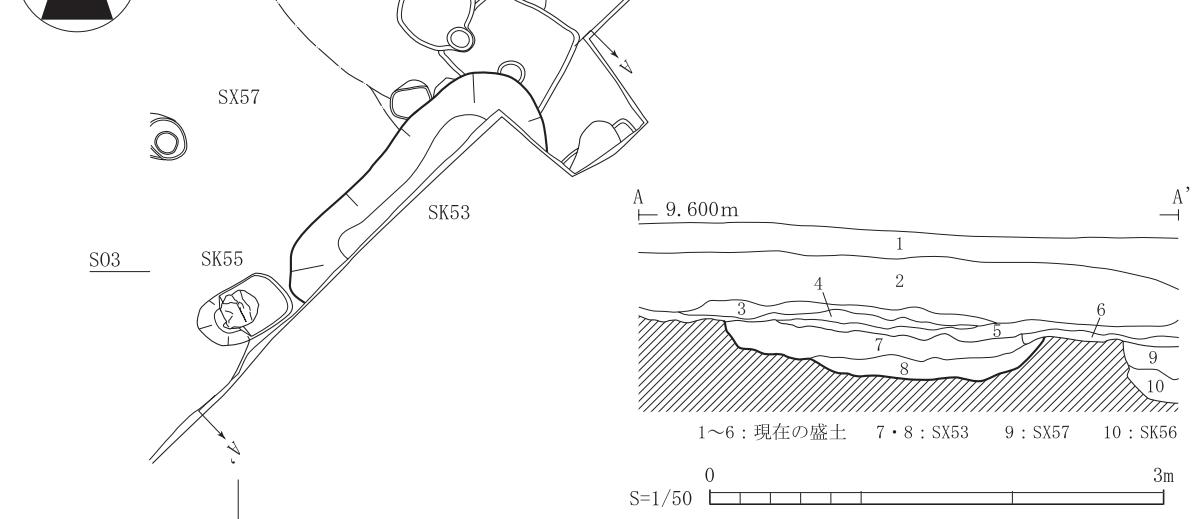
調査区中央部で発見した、南北に長い土壤である。SB44、SX57と重複し、それよりも新しい。規模は長軸約2.1m、深さ

約40cmである。壁は北側にわずかに段が認められるものの、概ね緩やかに立ち上がっている。底面にはやや凹凸があり、丸みを帯びて窪んでいる。埋土は2層に分けることができる。1層は明黄褐色粘質土や炭化物が混入する黒褐色砂質土、2層は明黄褐色粘質土が多く混入する暗褐色砂質土である。

遺物は、土師器杯（BV類）・甕（B類）、須恵器杯・甕の小片が出土している。



第13図 SK54平面図・断面図

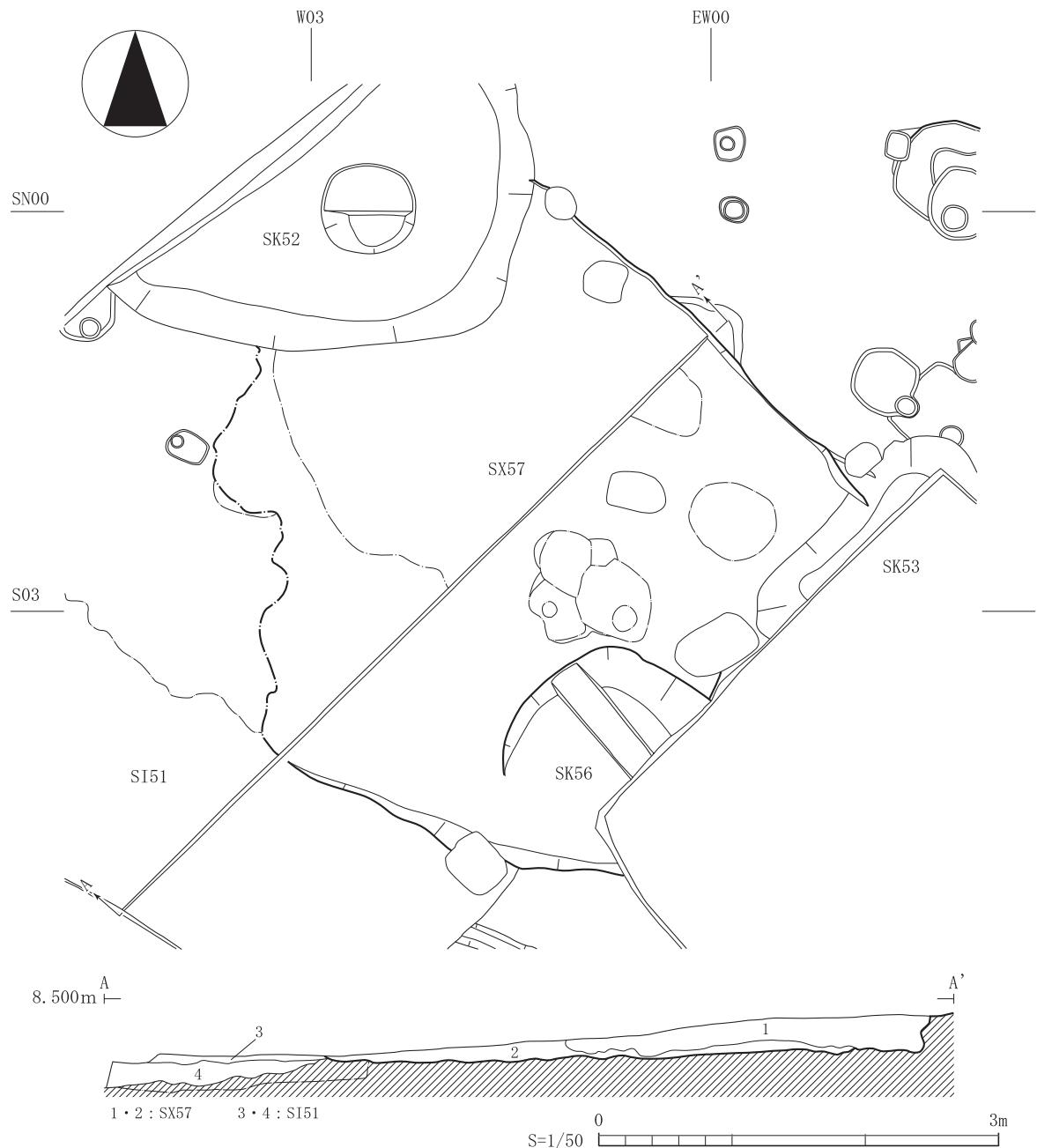


第14図 SK53平面図・断面図

SX57堅穴状遺構（第15図）

調査区中央から西部で発見した堅穴状遺構である。南辺がやや彎曲しているものの、概ね方形と推測される。SB44・46、SI51、SK52・53・55と重複し、SK52・53・55よりも古く、SB44・46、SI51よりも新しい。規模は東西4.3m以上、南北約4.5m、深さは東辺で約30cmである。壁は北辺及び南辺東側は垂直に立ち上がっているが、西辺は非常に緩やかである。底面は僅かに凹凸が認められ、北東から南西に向かって約10cm下っている。埋土は2層に分けることができる。1層は明黄褐色粘質土がブロック状に多量に混入する灰黄褐色砂質土、2層は炭化物や明黄褐色粘質土が僅かに混入する褐灰色砂質土である。

遺物は、土師器杯（BⅡ類）・高台付杯・甕（A・B類）、須恵器杯・甕の小片が出土している。



第15図 SX57平面図・断面図

4 考察

今回の調査では、掘立柱建物跡5棟、柱列跡1条、竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構1基、土壙3基などを発見した。これらの埋土をみると、遺構検出面であるII層と近似したにぶい黄褐色砂質土や灰黄褐色砂質土が主体または多量に混入する遺構（a群：SB44～47、SI51、SK52～53、SX57）と、黒褐色砂質土や褐灰色砂質土が主体となっている遺構（b群：SB48、SA51やこれらと規模が類似する小柱穴群）に分けることができる。遺構の新旧関係をみると、重複しているものは全てb群が新しく、a群→b群の変遷を捉えることができる。ここでは、はじめに遺構の年代について述べ、次ぎに本地区の性格について若干の検討を行う。

（1）遺構の年代

1) a群

① 掘立柱建物跡

遺構の重複関係よりSB43→SB44→SB45・46の3時期に分けることができる。建物の方向を見るとSB43が東側に大きく傾いている（N-48°-E）のに対し、SB44～46ではその半分程度の傾きとなっている（N-18°E～N-25°-E）。これらの年代については、最も古いSB43掘り方埋土から土師器杯BV類が出土していることから、上限を8世紀後葉以降とすることができる。一方、SB44・45・46の掘り方及び抜取り穴からは、小片ではあるものの土師器杯BV類・甕B類、須恵器杯IIa・V類が出土している。10世紀前葉頃に出現するとされる須恵系土器がa群では最も新しいSK52にのみ認められることを考慮すれば、SB43～46については概ね8世紀後葉～9世紀代の範疇と捉えることができる。

② 竪穴住居跡

SI51は、重複関係で9世紀後半頃と考えられるSX57よりも古いことが判明している。傾きがSB43と近似していることから、それと同時期の可能性が推測される。

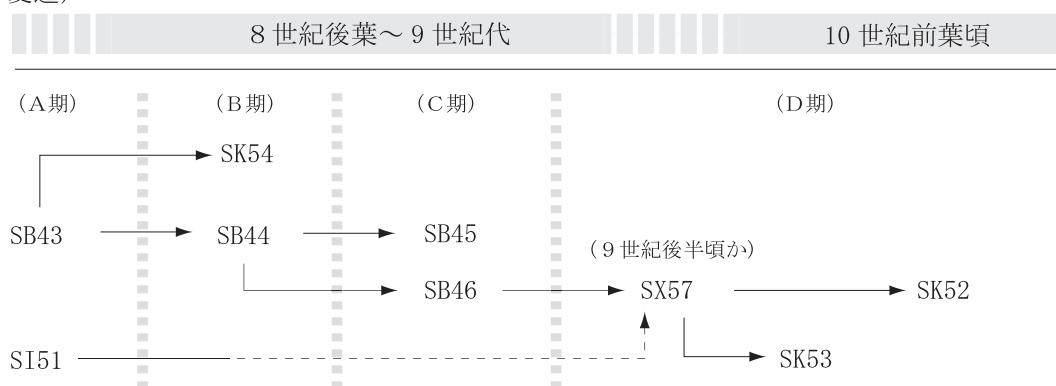
③ 竪穴状遺構

SX57については須恵系土器が全く出土していないことから、10世紀代には下らないものと推測できる。上限については土師器杯（B類）・甕（B類）が出土していることから、8世紀後葉以降に求めることができる。一方、遺構の重複関係ではSB46よりも新しいことが明らかである。SB46は8世紀後葉～9世紀代の範疇で捉えた建物群の中で最も新しいものであることから、SX57については9世紀でも後半頃の年代を想定しておきたい。

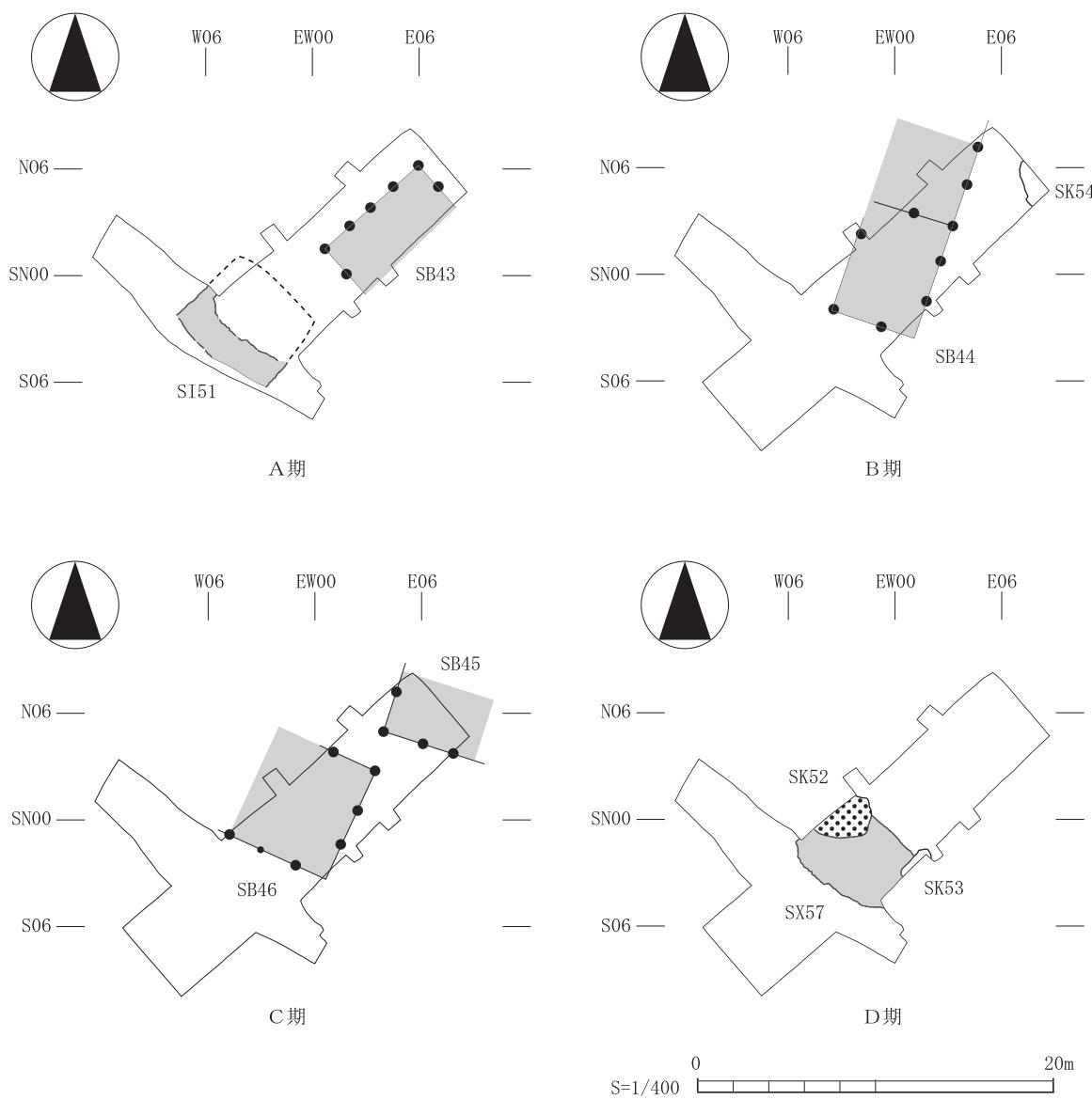
④ 土壙

須恵系土器が出土しているSK52が10世紀前葉以降、SB45よりも古くSB43よりも新しいSK54が9世紀頃と推測される。SK53は9世紀後半頃と考えたSX57よりも新しいものの、出土遺物の中に須恵系土器が全く認められないことから、概ね9世紀の範疇で収まるものと考えておきたい。

(遺構の変遷)



(変遷模式図)



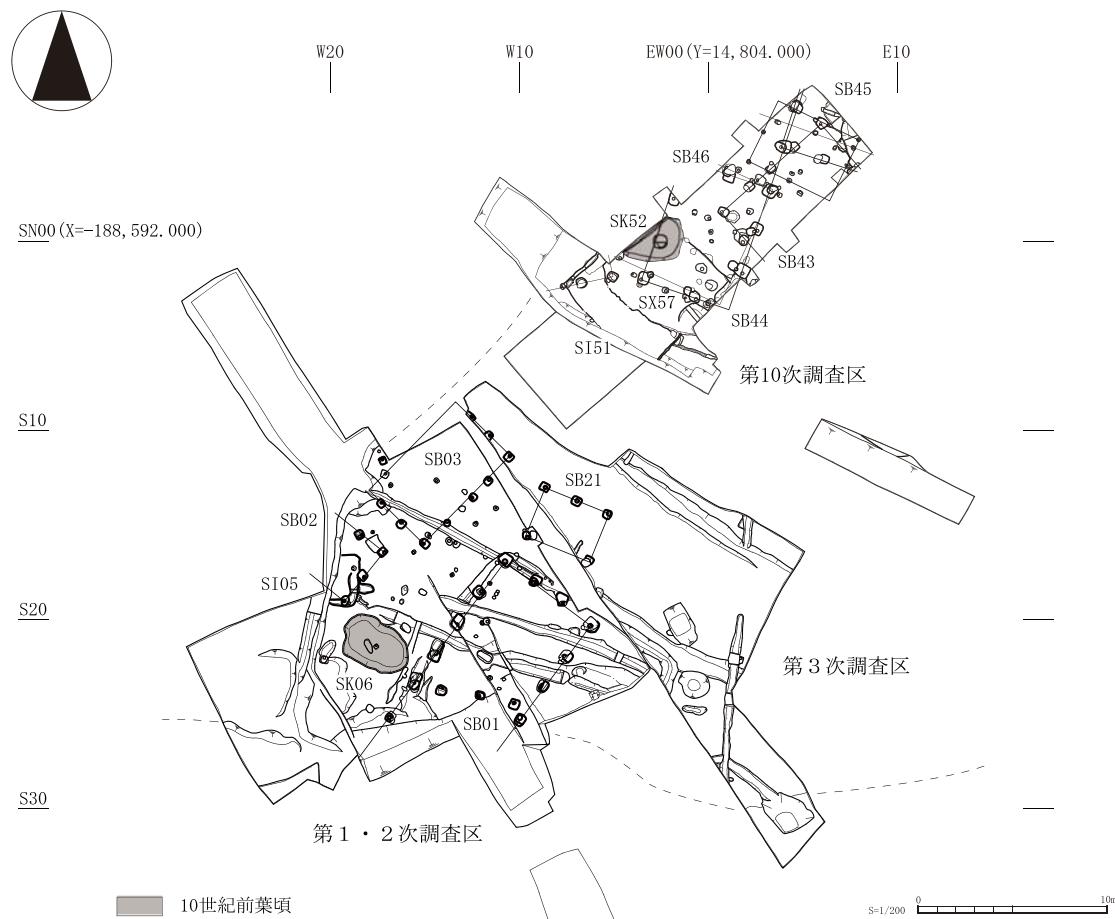
第16図 古代の遺構変遷図

2) b群

本地区では柱穴の規模が極端に小さいSB48やSA50のほか、これらと同様の小柱穴を多数検出している。出土遺物が古代のものに限られるため詳細は明らかでないが、このような柱穴は市内各遺跡で確認される中世以降のものと類似している。また、第1次調査の際には、これらの埋土と近似する黒色土から無釉陶器甕が出土していることから、およそ中世頃の遺構である可能性が考えられる。

(2) 遺構の変遷と性格

第16図は、今回発見したa群の遺構（古代）を抽出して、それらの重複関係と前述した年代観を基に整理したものである。これをみると、建物跡がほぼ同位置で建て替えられる8世紀後葉～9世紀代（A期～C期）と、それらが廃絶した後に竪穴状遺構や土壙が認められる9世紀後半以降（D期）の4時期に分けることができる。一方、隣接する第2・3次調査区でも掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土壙などが発見されている（第17図）。このうち、SB01～03・21建物跡を9世紀後半以前、SB02よりも新しいSI05竪穴住居跡を9世紀後半頃、須恵系土器が出土しているSK06土壙を10世紀前葉頃のものとしている（註）。9世紀代に建物跡や竪穴住居跡、10世紀に僅かに土壙が認められるといった状況は本調査区の様相とも概ね一致しており、本地区周辺における共通した土地利用のあり方が反映されたものと考えられよう。



第17図 本調査区と周辺の遺構分布図

註：多賀城市教育委員会『小沢原遺跡・高崎遺跡—史跡連絡線関連遺跡発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第54集 1999

ところで、第2次調査で発見した桁行5間以上のSB01建物跡については、その規模から官人層の居宅の一部である可能性が窺われる。梁行の規模はやや狭いものの、本調査区でも桁行5間以上のSB44建物跡を確認しており、同様の性格が推測できよう。

5 まとめ

- (1) 掘立柱建物跡、竪穴住居跡、竪穴状遺構などを発見した。
- (2) 古代の掘立柱建物跡は8世紀後葉～9世紀代のものであり、桁行5間以上のものも確認できる。
- (3) 本調査区で発見した掘立柱建物跡は、隣接する調査区と同様に官人層の居宅の一部であると考えられる。



調査区全景（南より）

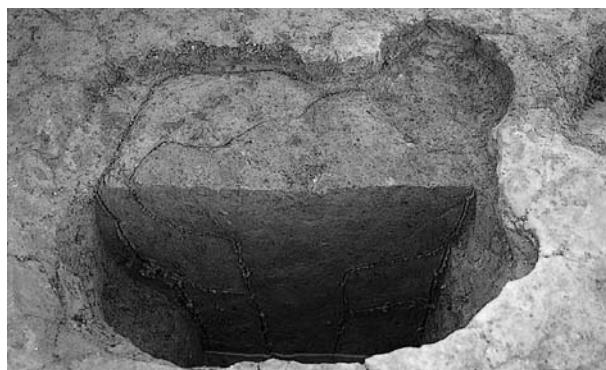


調査区全景（北東より）

SB43柱穴



P2 断面



P3 断面（下部「柱のあたり痕跡」）

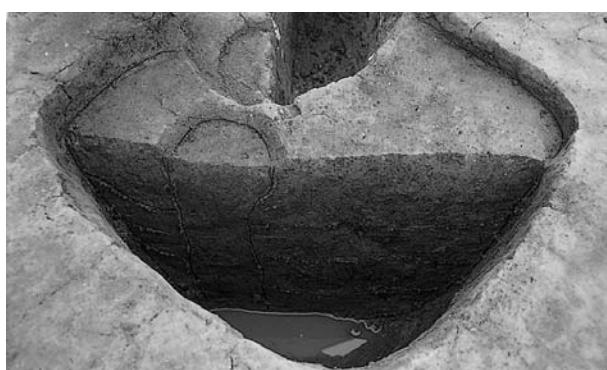


P6 断面



P7 断面

SB44柱穴



P4 断面



P5 断面



P7 断面



P8 断面

SB45柱穴



P 2 断面

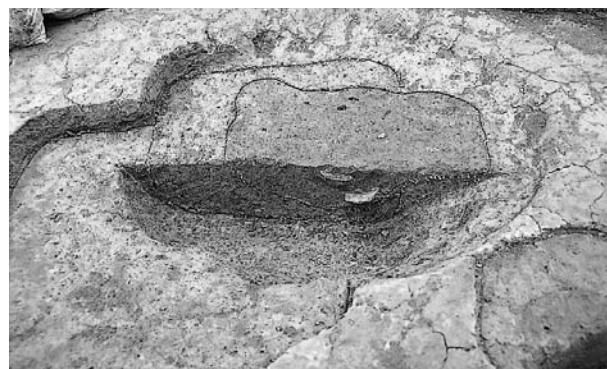


P 3 断面



P 6 断面

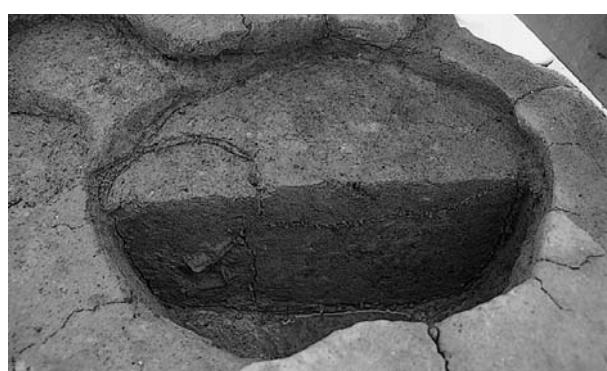
SB46柱穴



P 1 断面



P 2 断面



P 7 断面

土器片が多く混入することから「柱のあたり
痕跡」と判断した



P 8 断面

III 留ヶ谷遺跡第5次調査

1 調査区の位置と周辺の調査成果

本遺跡は、古代から近世までの複合遺跡で、特に中世から近世の遺構・遺物が多く発見されている。今回の調査区は遺跡の東側にあたり、南北に延びる尾根の東側の崖に区画される位置にある。調査区の標高は11m前後である。これまで本遺跡では3次にわたる調査を行っており、特に中世から近世にかけての様子が明らかになりつつある。

第1次調査では、南北方向の尾根に沿ったおよそ中世頃と考えられる土壙跡や溝跡を発見している。第2次調査では東西に2段の平場とそれに伴う掘立柱建物跡、柱列跡、土壙跡、溝跡などを発見している。南側で発見した大溝や西側の土壙は中世にさかのぼるものと考えられるが、東側の平場で発見した遺構は全て近世のものである。周辺地区では発掘調査を実施していない地区においても、土壙状の高まりや平場などを確認することができ、その広がりは遺跡のおおよそ全域に及んでいる。土壙や平場などは中世の館跡に伴うものと考えられ、近世にはこれを改修し武士の屋敷として利用したものと考えられている。本遺跡の東側に隣接している向泉院には主に仙台藩の御用米を運搬するために御舟入堀を切り拓いた和田織部房長



第1図 調査区位置図

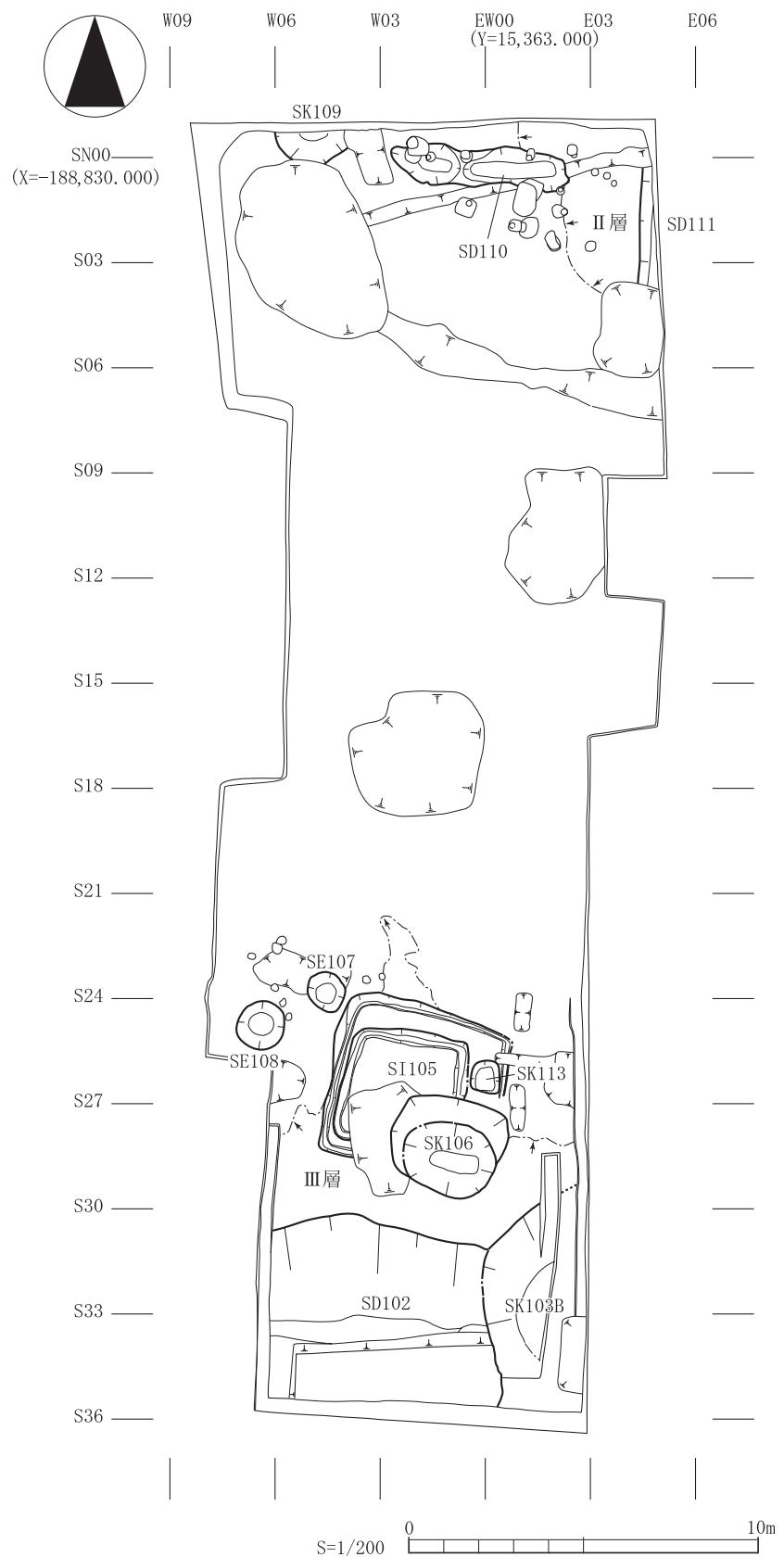
の側室の墓がある。和田氏の家臣の多くがこの寺を菩提寺としていることなどから、本遺跡一帯に和田氏及びその家臣の屋敷があったとする説がある（註）。しかし、この説には根拠となる資料が提示されていないため検証することができず、また和田氏が留ヶ谷周辺を知行していたということも仙台藩の記録の中に見いだすことができないことから、本遺跡と和田氏との関わりは現在のところ明らかではない。

2 調査に至る経緯と経過

本調査は共同住宅新築に伴うものである。平成19年2月28日に地権者より当該地における共同住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画では、現地表に0.1～1.2mの盛土を施した後に、建物の基礎には長さ6m、直径13.98mmの鋼管杭を115本打ち込み、外周に設置する擁壁部分は現地表より最大幅1.4m、最深2.6mの掘削を行うものであった。当該地及びその周辺には、中世の館跡の一部と見られる土壘状の高まりや、平場状の平坦面が現地表でも観察できることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため4月16日から23日にかけて遺構の分布状況を把握することを目的として確認調査を行ったところ（第4次調査）、建物部分において現地表から0.2～1.0m下で竪穴住居跡や近世の遺物が入る堆積層などを発見した。この結果を受け工法変更による遺構の保存が計れないか協議を行ったが、それ以外の方法では建物を支える十分な強度が得られないことから、申請された計画で実施することに決定した。5月14日に地権者からの依頼を受け、5月24日から調査を開始した。

調査は、第4次調査で建物部分の表土（I層）の除去を既に行っていたため、継続して擁壁部分の表土を重機によって除去することから取りかかった。攪乱された土層の除去とあわせて遺構検出作業を行ったところ、調査区北側でSD110・111溝跡や柱穴を、南側でSI105竪穴住居跡の他に、SD102堀跡やSK103・106土壘があることが判明した。これ以降、隨時図面作成や写真撮影を行った。11日には調査区西側でSE107・108井戸跡を発見し、全容を把握するため一部西側へ調査区を拡張した。14日よりSK103土壘の埋土の除去を開始し、茶臼や下駄などが出土した。また、この底面からはSX104石組遺構の一部を発見した。7月5日にはこの作業が完了し、SD102堀跡の埋土除去を開始した。18日には、ここから柄杓が出土するとともに、SX104石組遺構の全容が判明した。26日にはSD102堀跡とSX104石組遺構の写真撮影を行った。SI105竪穴住居跡については10日に埋土を除去し始めた。27日には2時期の変遷があることが判明し、A期の調査を始めた。8月2日には土層観察のためのベルトを除去し、写真撮影を行った。3日には、全ての器材を撤収し、現地発掘調査の一切を終了した。

註：参考文献（8）



第2図 遺構全体図

3 調査成果

(1) 層序

I層：表土で2層に細分できる。I 1層は現代の盛り土で厚さは15～28cm、I 2層は現代の耕作土で厚さは0.2～1mである。

II層：調査区北側にのみ堆積する近世の整地層。厚さは15～40cmである。肥前産の磁器皿（第17図2）が出土している。

III層：調査区南側にのみ堆積する古代の堆積層。南側ほど厚くなっている、厚さは最大で80cmである。

IV層：周辺における基盤層で岩盤である。

(2) 発見した遺構と遺物

調査区中央は後世の攪乱などによる地形の改変を受けており、遺構は発見できなかった。今回の調査で発見した竪穴住居跡、溝跡、井戸跡、土壙、柱穴は、調査区の北側と南側に分布している。以下、それぞれで発見した遺構を説明する。

① 北側で発見した遺構

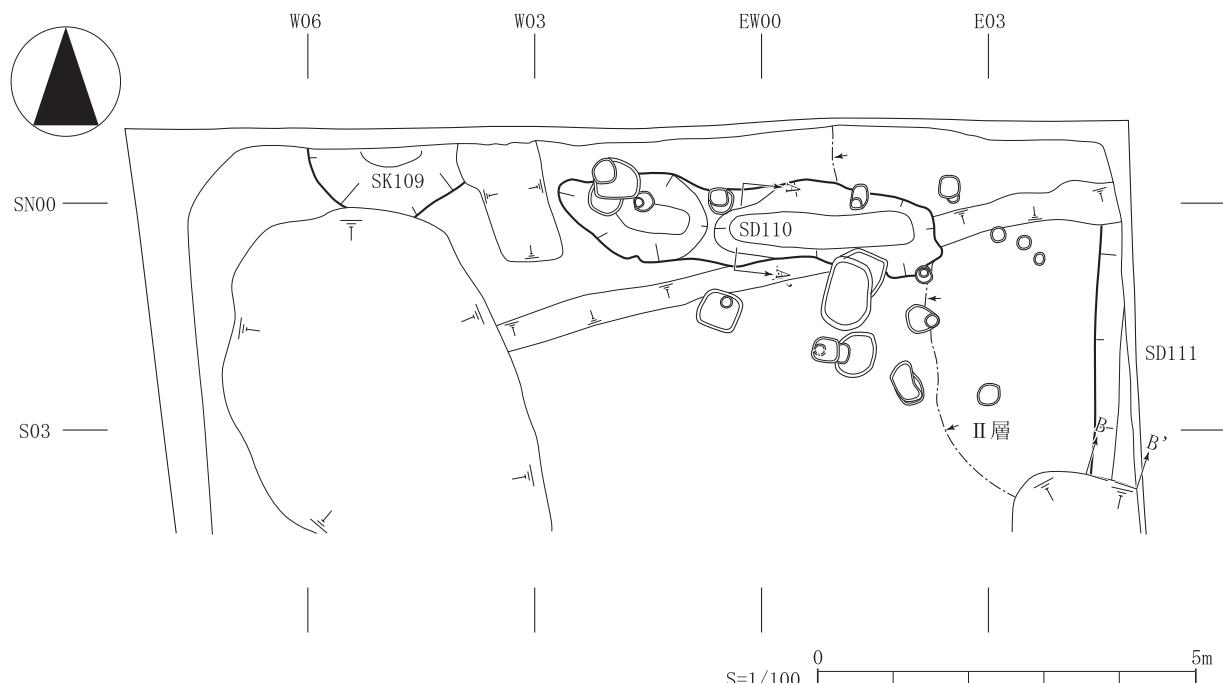
SD110溝跡（第2・3・4図）

II層上面で発見した東西方向の溝跡である。規模は長さ5m、上幅1～1.2m、深さ20～34cmで、方向は東で5度南に偏している。底面は東寄りで浅くなっている。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は2層に区分でき、1層はブロック状の岩盤を含む極暗褐色土、2層は砂を含む褐灰色土で自然堆積層とみられる。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯（Ⅲ類）・甕、砥石が出土している。

SD111溝跡（第2・3・4図）

IV層上面で発見した南北方向の溝跡で長さ3.3m検出した。規模は上幅62cm以上、深さ12cmである。



第3図 調査区北側遺構平面図

底面はほぼ水平で、壁は急に立ち上がっている。埋土は1層で、II層によって埋められている。遺物は出土していない。

SK109土壤（第2・3図）

IV層上面で発見した土壤である。規模は東西2.0m、南北90cm以上、深さ20cmである。埋土は2層に区分でき、1層は褐灰色土で、2層は灰白色火山灰の自然堆積層である。遺物は出土していない。

②調査区南側で発見した遺構

SI 105竪穴住居跡（第2・6・7図）

III層上面で発見した竪穴住居跡であり、南側の一部が攪乱によって壊されている。ほぼ同位置で2時期の変遷（A→B期）を確認した。重複関係からSK106より古く、B期はSK113より新しい。以下古い順に説明する。

A期：規模は南北3.4m、東西3.5mで、方向は北辺でみると東で9度南に偏している。床は灰褐色土の貼床である。周溝は各辺で確認でき、規模は上幅19~46cm、深さ20~23cmである。埋土は黄橙色土であり、底面はほぼ水平である。

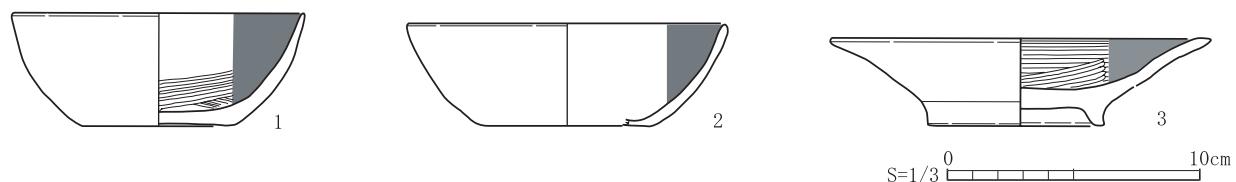
遺物は掘方埋土から土師器杯（BV類）・甕（B類）、須恵器杯・甕、周溝から土師器甕が出土している。

B期：規模は南北4.8m、東西5.1mで、方向は北辺でみると東で15度南に偏している。壁面はほぼ垂直に立ちあがっており、その高さは42~50cmである。床は岩盤をブロック状に含む褐灰色土で貼っている。周溝は各辺で確認でき、規模は上幅14~30cm、深さ5~8cmである。埋土は岩盤をブロック状に含む灰黄褐色土である。底面は北西隅が最も高くそこから緩やかに低くなっている、その比高は22cmである。堆積土は3層に区分でき、1層は炭化物を少量含む黒褐色土、2・3層は岩盤をブロック状に含む灰黄褐色土で、下層ほど石が少ない。カマドや支柱、貯蔵穴などの施設は確認できなかった。

遺物は掘方埋土から土師器杯、周溝から土師器甕（B類）、堆積土から土師器杯（BV類）（第5図-1・2）・高台付杯（第5図-3）・甕（B類）、須恵器杯（V類）・甕、平瓦（II Ba類）、丸瓦（II類）が出土している。

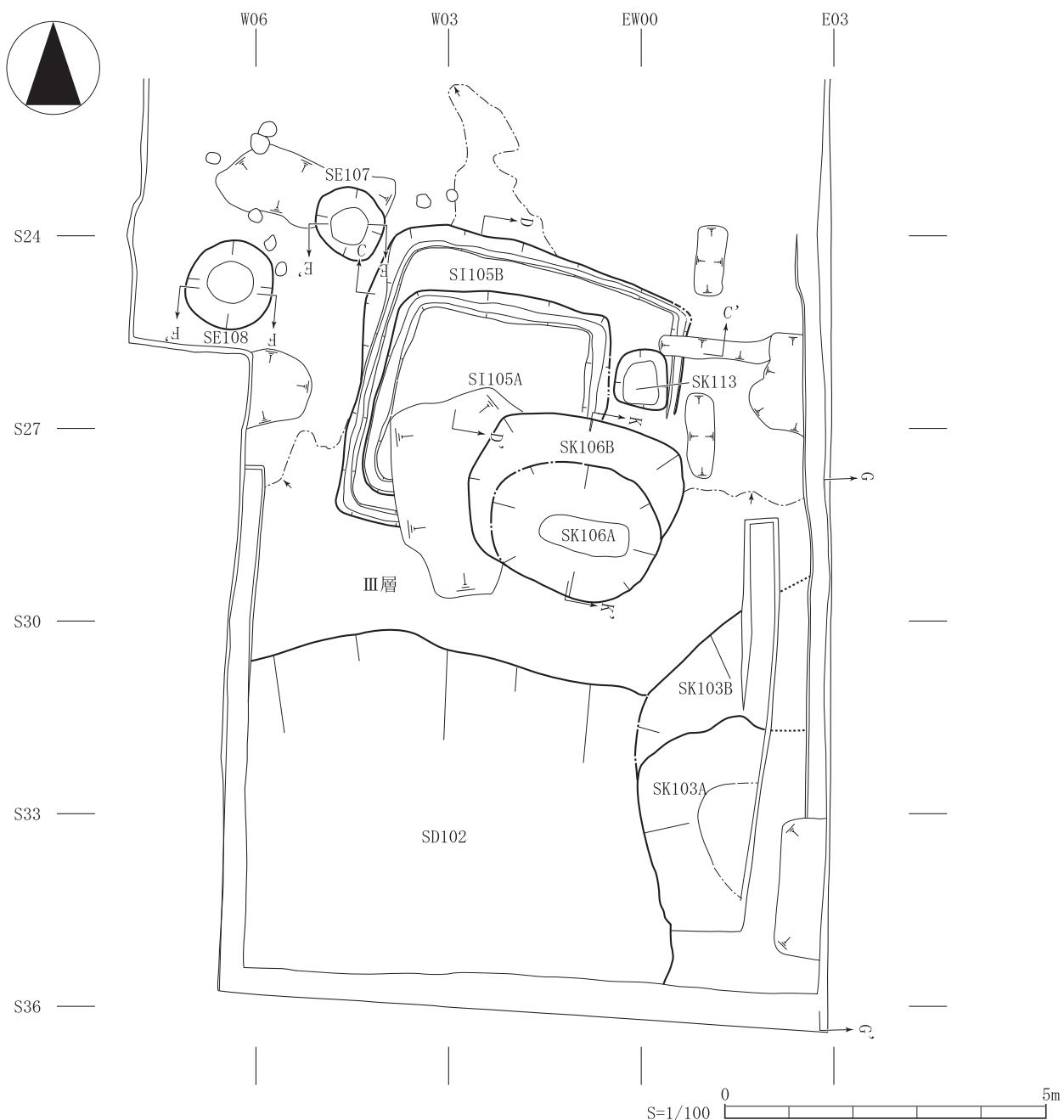
SD102堀跡、SX104石組遺構（第2・6・8・10・11図）

SD102は調査区南側のIII層上面で発見した東西方向の堀跡であり、長さ7.6mを検出した。平面および断面の観察より、本調査区の南東付近で終息するものと判断できる。SK103と重複関係がありこれより古い。

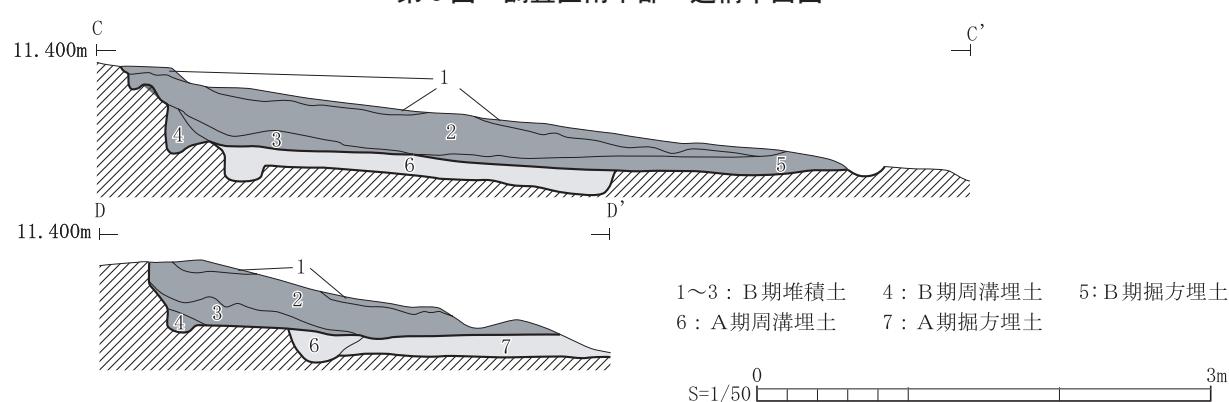


番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 ・杯	2層	ロクロナデ、底部:-	ヘラミガキ、黒色処理	11.6 2/24	6.0 24/24	4.5	-	R44	
2	土師器 ・杯	2層	ロクロナデ、底部:-	ヘラミガキ、黒色処理	12.5 5/24	6.8 10/24	4.1	-	R53	
3	土師器 ・高台付杯	2層	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	7.5 12/24	6.8 24/24	3.5	3-1	R52	

第5図 SI 105竪穴住居跡 出土遺物



第6図 調査区南半部 遺構平面図



第7図 SI 105竪穴住居跡 断面図

規模は上端5.4m以上、深さ1.9mである。埋土は上層の人为埋土と下層の自然堆積層に大別できる。上層は1～9層に細別できる。1層が黒褐色土、2層が褐色土、3～5層が黒褐色土、6層が暗褐色土、7層が黒褐色土、8層が黒褐色粘質土、9層は褐色土である。いずれも岩盤をブロック状に含んでおり、特に1・3・7層には多量に混入している。9層の褐色土はⅢ層に起因するものとみられる。下層は10～13層の4層に細別できる。10・11層が黒色粘土、12・13層が黒褐色粘質土である。11・13層にはブロック状の岩盤を微量に、12層には多量に混入している。

SX104は調査区南東隅で発見した石組遺構である。石の大きさは20～90cmであり、特に加工を施さず自然の石を用いて組み合わせている。SK103によって大きく壊されているが、南北1.3m、東西60cm、高さ60cm残っていた。なお、SX104については、SD102東端部に沿って認められることから、SD102と一連の遺構とみられる。また、調査区の東側は崖面であることから、崖面とSD102との間に土橋が存在する可能性も考えられる。

遺物は上層から無釉陶器甕（第12図1～4・6）・擂鉢（第12図5）、瓦質土器擂鉢（第12図7）、青磁碗（第13図2）、鉄滓、砥石、下層から無釉陶器甕、青磁碗、肥前産の陶器碗（第13図1）、砥石（第13図1～3）が出土している。木製品は下層から漆器、柄杓（第13図1）、用途不明品（第13図2）が出土している。このほか古代の遺物であるが土師器杯（B I・BV類）・高台付杯・甕（B類）、須恵器杯（II・III・V類）・甕・瓶、須恵系土器杯・高台付杯、灰釉陶器碗、緑釉陶器碗、転用硯、土器片製円板、平瓦（I・II B・II Ba・II C類）、丸瓦（II類）が出土している。

SE107井戸跡（第2・6・9図）

調査区南側のIV層上面で検出した素掘りの井戸跡である。平面形はおおよそ円形であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は直径1.0～1.2m、深さ1.2mである。埋土は4層に区分でき、1層は黄灰色土、2層は灰色土、4層は黒褐色土でいずれもブロック状の岩盤を含む。3層は礫層である。

遺物は土師器甕が出土している。

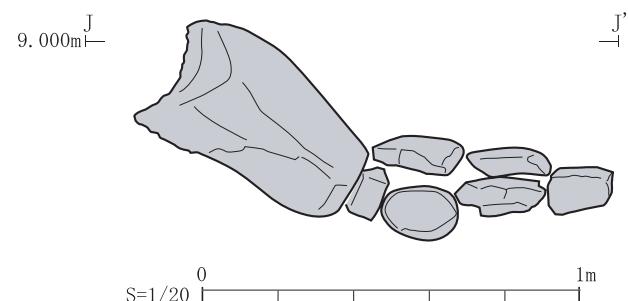
SE108井戸跡（第2・6・9図）

調査区南側のIV層上面で検出した素掘りの井戸跡である。平面形は円形であり、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中ほどから上方ではやや外側に開く。規模は直径1.3m、深さ1.0mである。埋土は3層に区分でき、1層はブロック状の岩盤を多く含む黒褐色粘質土で人为的な堆積土とみられる。2層はブロック状の岩盤を微量に含む黒褐色粘土、3層はにぶい黄色土の自然堆積層である。

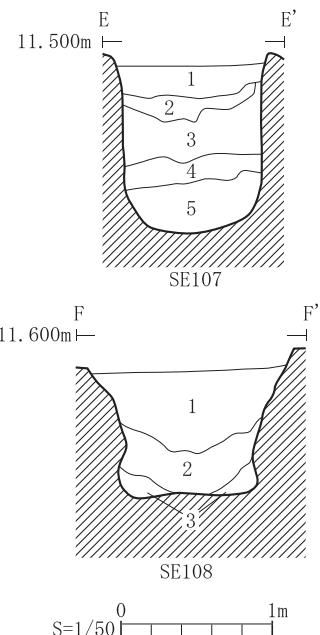
遺物は土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。

SK103土壤（第2・6・11図）

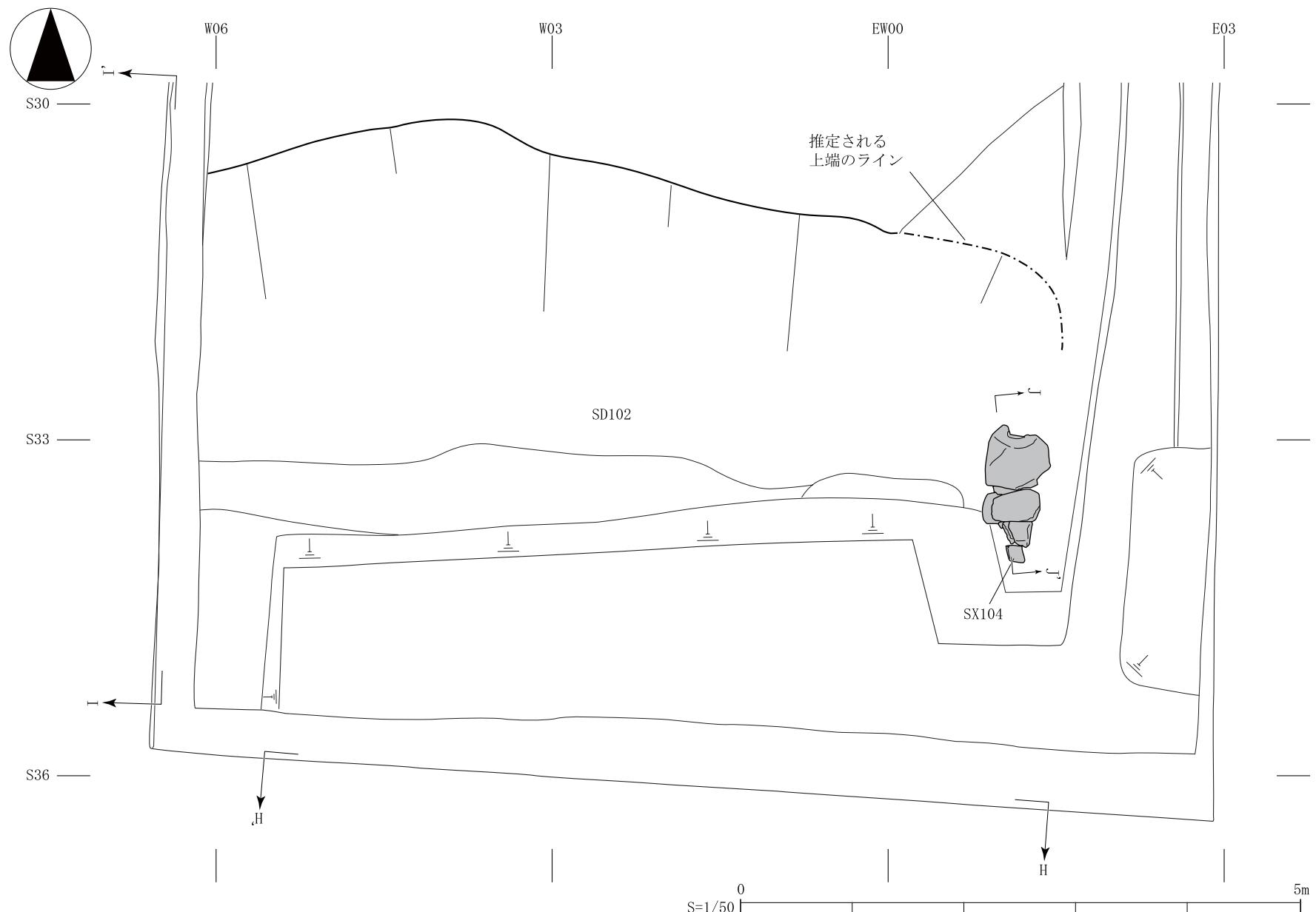
調査区南側Ⅲ層上面で発見した土壤である。重複関係からSD102より新しい。ほぼ同位置で2時期の変遷（A→B期）を確認できた。以下、古い順に説明する。



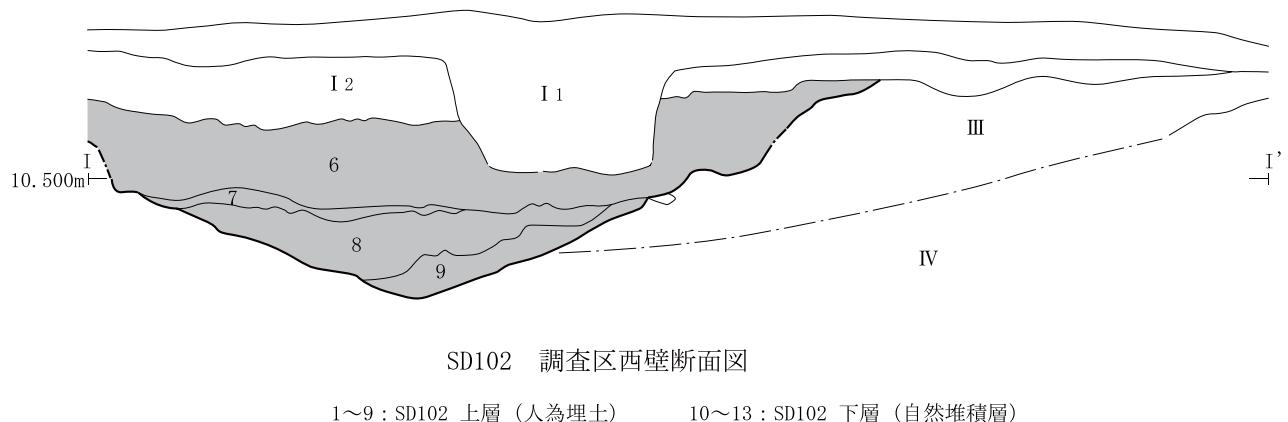
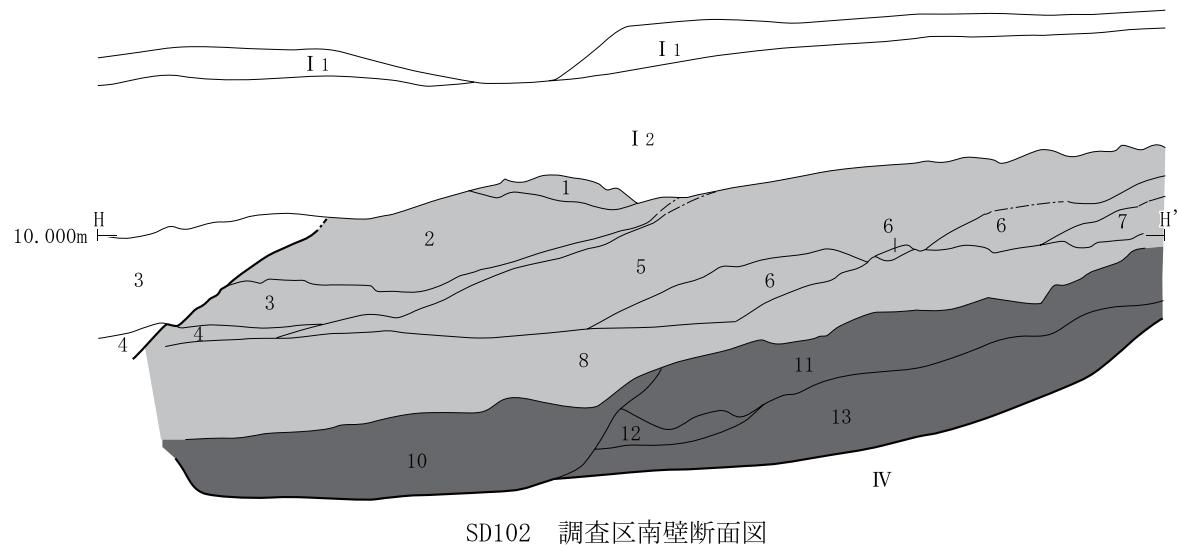
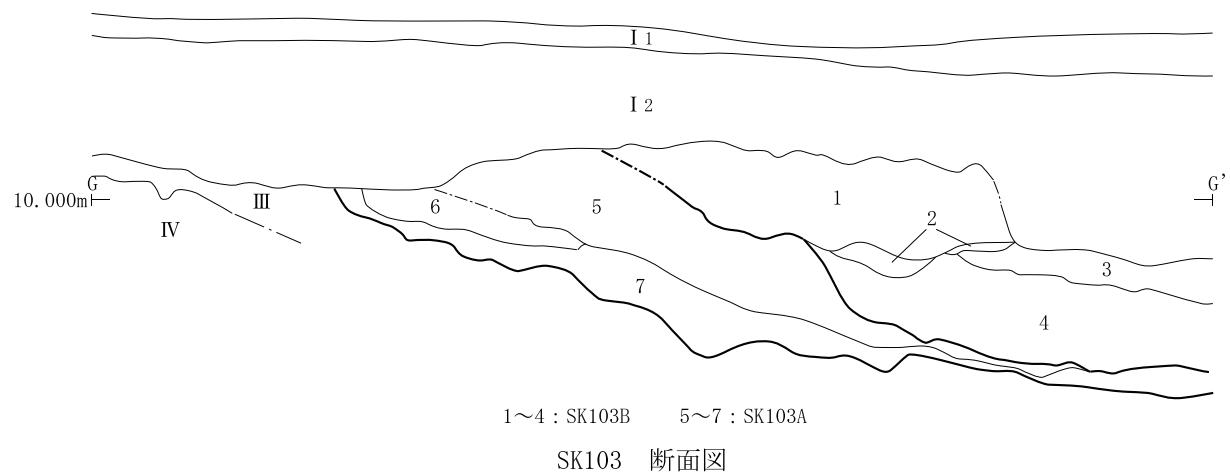
第8図 SX104石組遺構 立面図



第9図 SE107・108断面図



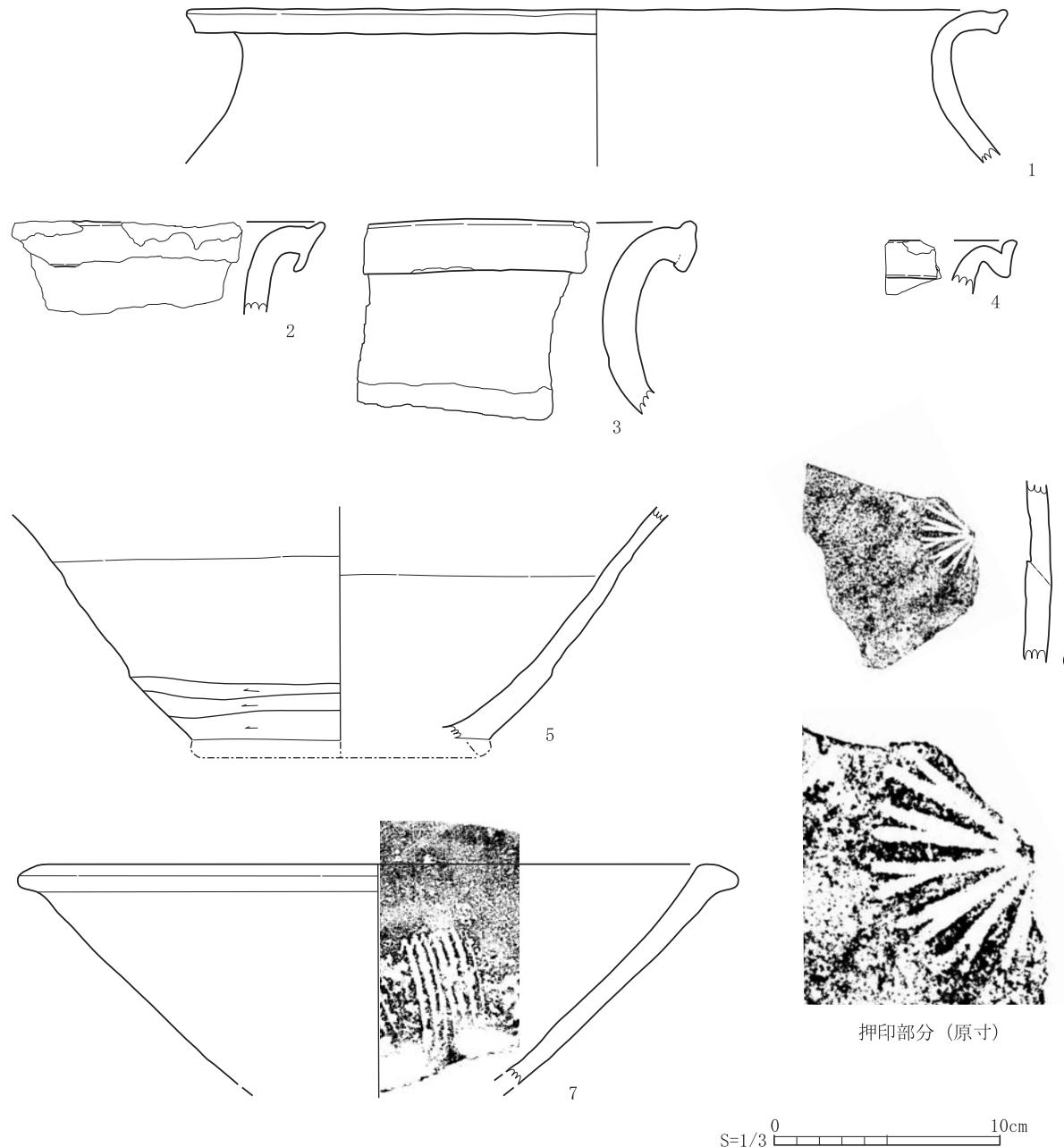
第10図 SD102堀跡とSX104石組遺構 平面図



※段ごとの断面図を合成

$S=1/50$ 0 3m

第11図 SD102溝跡、SK103 断面図



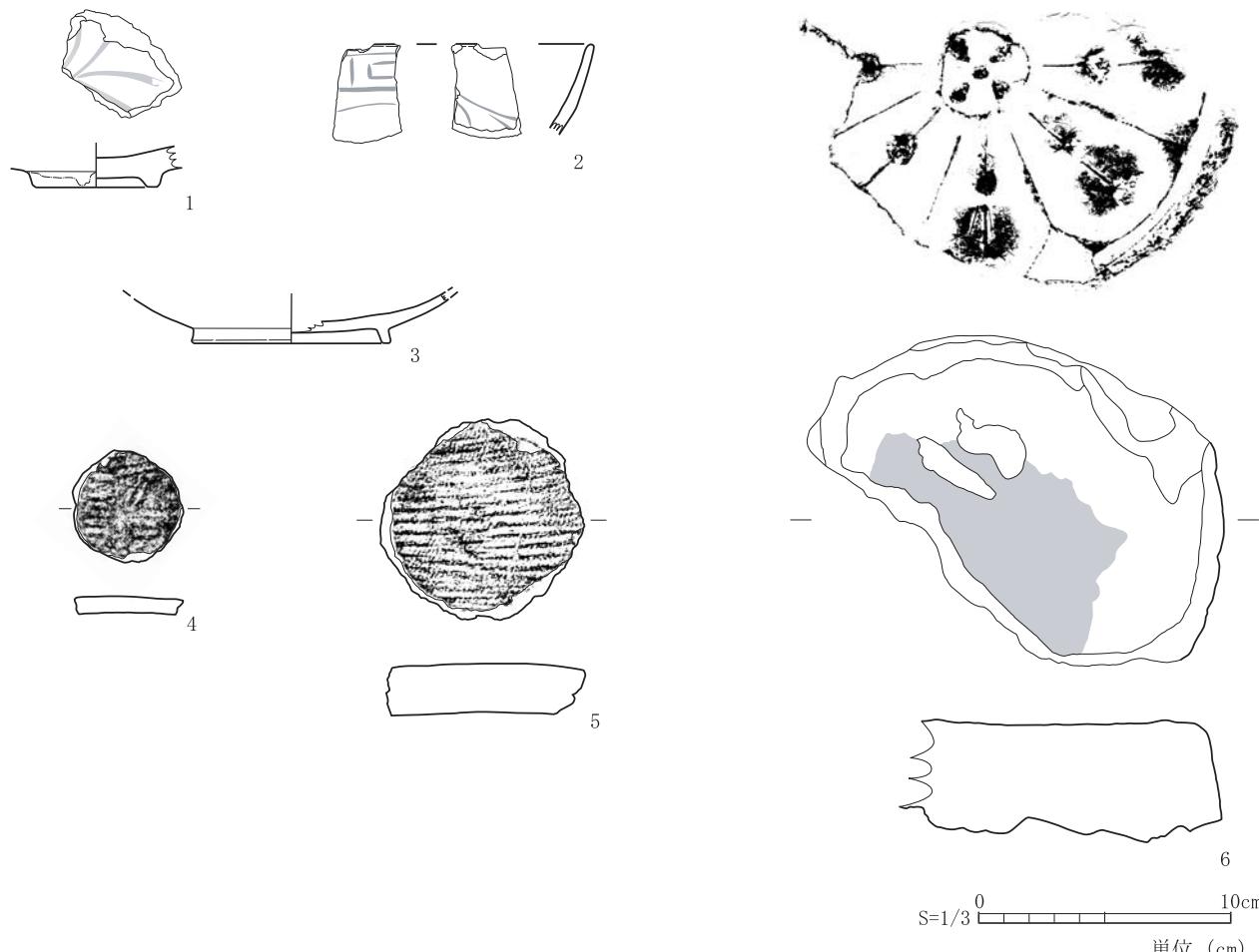
押印部分（原寸）

S=1/3 0 10cm

単位 (cm)

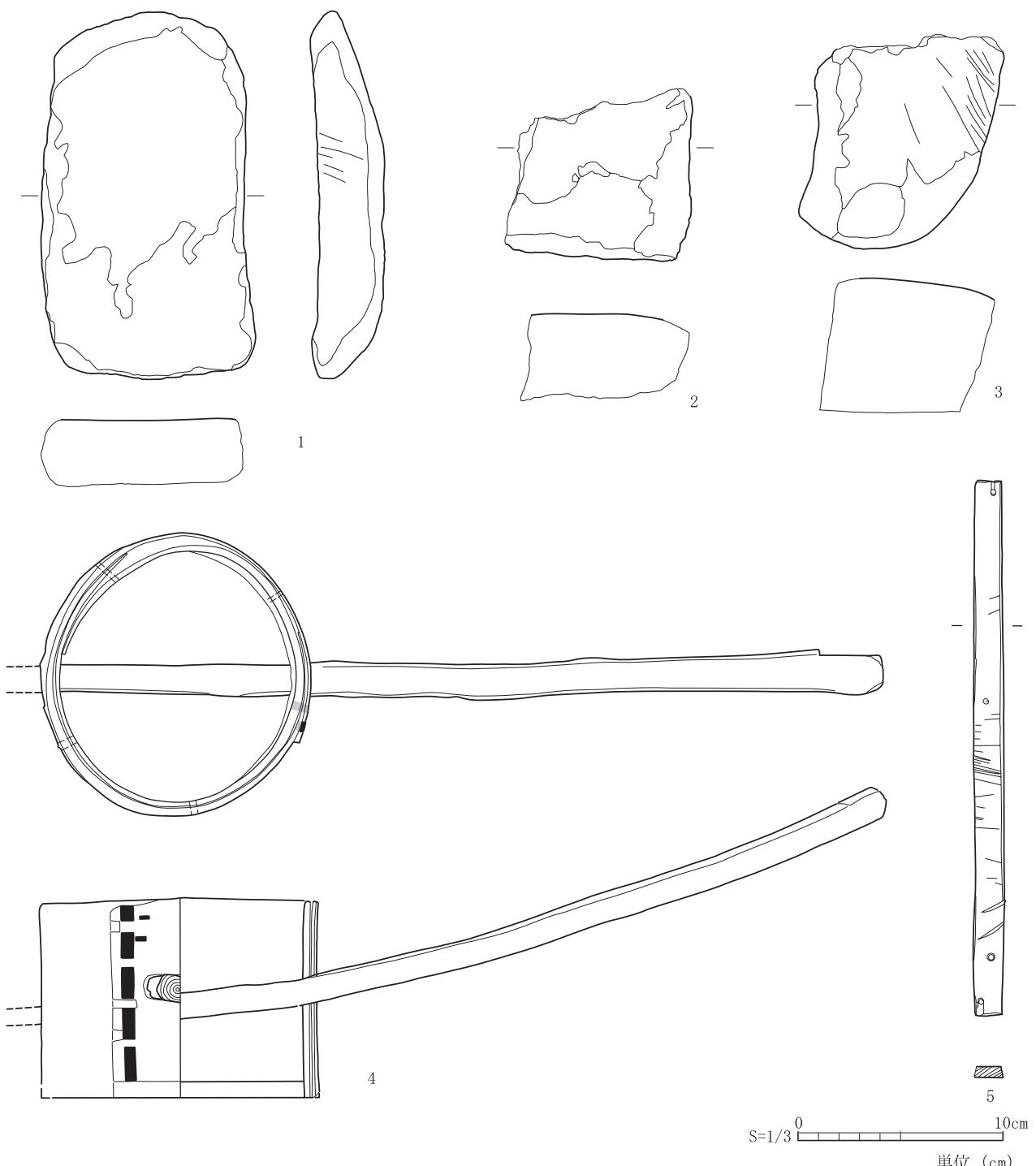
番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	無釉陶器 ・甕	上層	ヨコナデ	ヨコナデ	36.2 5/24	-	-	4-1-1	R1	
2	無釉陶器 ・甕	上層	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	4-1-3	R18	
3	無釉陶器 ・甕	上層	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	4-1-2	R17	
4	無釉陶器 ・甕	上層	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	4-1-5	R24	
5	無釉陶器 ・擂鉢	上層	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	-	13.2 6/24	-	4-1-6	R3	
6	無釉陶器 ・甕	上層	ヨコナデ、押印	ヨコナデ	-	-	-	4-1-4	R12	
7	瓦質土器 ・擂鉢	上層	ヨコナデ	ヨコナデ、筋目（7本）	28.8 8/24	-	-	-	R21	

第12図 SD102溝跡 出土遺物（1）



番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	陶器 ・椀	下層		鉄軸による文様	-	4.8 6/24	-	5-1-3 5-2-3	R5	肥前（唐津）
2	青磁 ・椀	上層	雷文、ラマ式連弁		-	-	-	5-1-10 5-2-10	R27	中国（明）
3	緑釉陶器 ・椀	上層			-	7.8 6/24	-	-	R2	
4	土器片製 円板	下層			最大幅:4.1 厚さ:0.7			-	R8	須恵器甕転用
5	土器片製 円板	下層			最大幅:7.5 厚さ:2.0			-	R7	須恵器甕転用
6	転用硯	上層	重弁蓮花文軒丸瓦 型番132			-	-	-	-	軒丸瓦転用

第13図 SD102溝跡 出土遺物（2）



番号	遺物名	層位	法量	特徴	写真 図版	登録番号
1	砥石	2層	長さ:18.0 幅:10.5 厚さ : 3.3		-	R70
2	砥石	1層	長さ:8.4 幅:9.1 厚さ : 4.3		-	R71
3	砥石	1層	長さ:10.5 幅:10.0 厚さ : 6.6		-	R69
4	柄杓	2層	【身】口径 : 13.0 底径 : 13.6 高さ : 9.7 【柄】長さ : 42.6 幅 : 1.7 厚さ : 1.5	木取り : 芯持ち (柄)	3-4	R2
5	用途不明品	2層	長さ : 26.2 幅 : 1.45 厚さ : 0.55	木取り : 板目 3箇所に穴	-	R4

第14図 SD102溝跡 出土遺物 (3)

A期：検出した規模は南北6.0m、東西2.9m、深さ1.4mである。埋土は3層に区分でき、1層は黒褐色土、2層は貝を含む黑色土、3層は黒色土で、いずれの層もIV層に起因する礫を含む。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は瓦質土器擂鉢、石臼が出土している。この他古代の遺物であるが土師器杯（BV類）・甕（B類）、須恵器甕、須恵系土器杯が出土している。

B期：検出した規模は南北4.3m、東西3.0m、深さ1.3mである。埋土は4層に区分でき、1層は黒褐色土、2層は黑色土、3層は黒褐色、4層は黒色粘土で、2層と3層にはIV層に起因する礫が多く含まれている。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

遺物は無釉陶器甕、磁器碗、陶器碗・皿・甕・擂鉢（第16図-1）、瓦質土器擂鉢（第16図-2）、茶臼（第16図-5）、石臼（第18図-1）砥石、鉄滓、寛永通宝（第16図-3・4）、木製品は漆器碗、挽物皿、下駄（第17図-1・2）、錘（第17図-3）、用途不明品（第17図-4）が出土している。また、古代の遺物であるが土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯・甕・瓶、須恵系土器杯、平瓦（II B類）、丸瓦（II類）が出土している。

SK106土壌（第2・6・15図）

調査区南側のⅢ層上面で発見した土壌である。SI105と重複しており、それより新しい。ほぼ同位置で2時期の変遷（A→B期）を確認できた。以下、古い順に説明する。

A期：平面形は楕円形で、規模は長径3.2m、短径2.7m、深さ80cmである。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋土は3層に区分でき、1層は黒色土、2層は炭化物を含む黒色粘土、3層は褐灰色粘土であり、いずれもブロック状の岩盤を含む。

遺物は土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器甕・瓶が出土している。

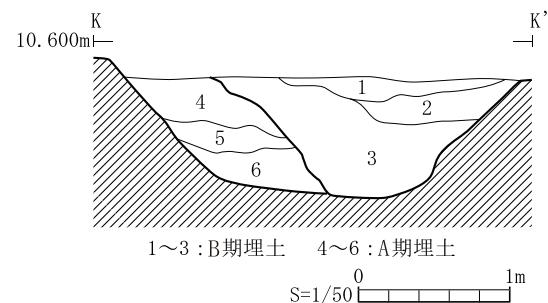
B期：平面形は楕円形で、規模は長径2.6m、短径2.0m、深さ80cmである。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋土は2層に区分でき1層は炭化物を少量含む黒褐色土で、2層は黒色粘質土で上方ほどブロック状の岩盤を多く含む。

遺物は燻し瓦、使用痕のある石が出土している。また、古代の遺物であるが土師器杯（BV類）・甕（B類）、須恵器杯（V類）・甕・瓶、須恵系土器杯が出土している。

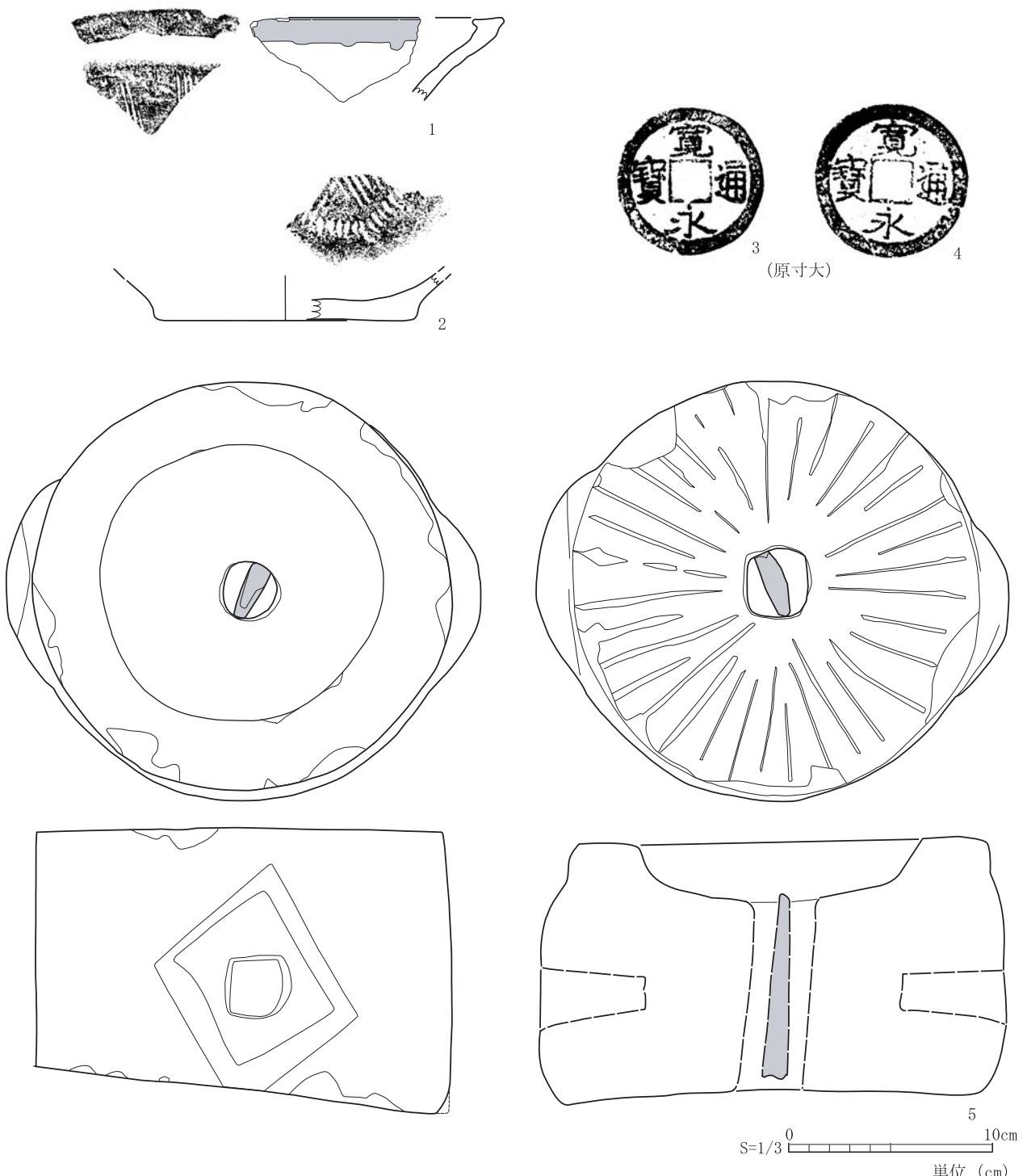
SK113土壌（第2・6図）

調査区南側で発見した土壌である。SI105B期と重複しており、それより古い。平面形は長方形であり、規模は長辺90cm、短辺80cm、深さ19cmである。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。

遺物は土師器杯・甕（B類）、須恵器甕が出土している。

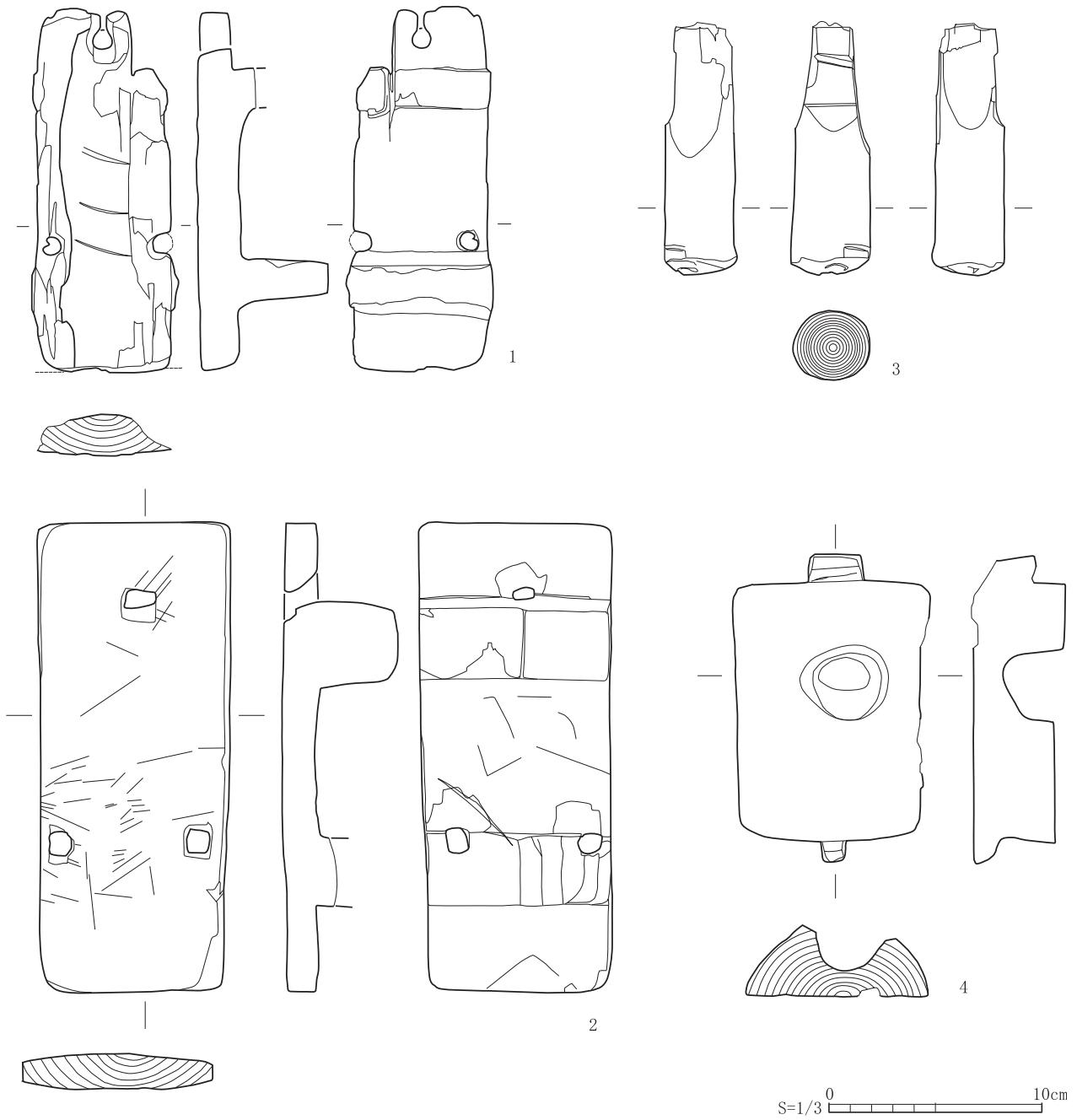


第15図 SK106土壌断面図



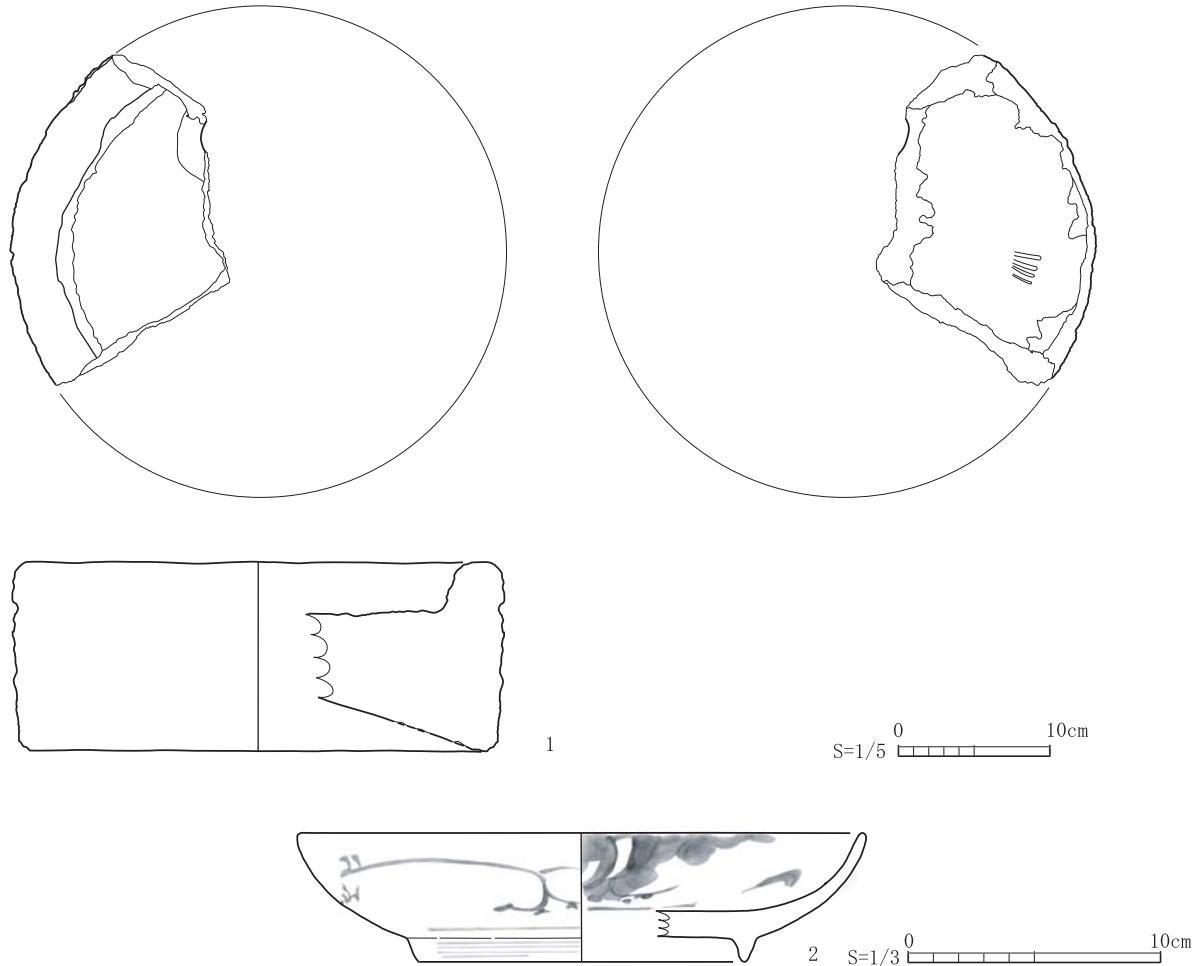
番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	陶器 ・擂鉢	1層	ロクロナデ	ロクロナデ、 筋目（5本？）	-	-	-	5-1-1 5-2-1	R36	岸窯産、 口縁に灰釉
2	瓦質土器 ・擂鉢	1層	-	筋目（7本？）	-	13.0 6/24	-	-	R11	
3	古銭	1層	寛永通宝		直径:2.4			5-1-5 5-2-5	R2	
4	古銭	1層	寛永通宝		直径:2.5			5-1-6 5-2-6	R3	
5	茶臼	2層	菱形の台座文様、臼面に放射状の目		直径:24.1 高さ:13.8 供給口径:3.3			3-2	R72	供給口に板 状の木製棒

第16図 SK103B 出土遺物（1）



番号	遺物名	層位	法量	木取り	特徴	写真図版	登録番号
1	下駄	1層	長さ：18.9 幅：6.9 高さ：6.9	芯持ち		3-5 4-2-2	R6
2	下駄	1層	長さ：21.95 幅：9.05 高さ：5.7	芯持ち		3-5 4-2-3	R9
3	木錘	3層	長さ：11.8 幅：3.5 厚さ：3.2	芯持ち		3-5 4-2-4	R19
4	用途不明品	3層	長さ：14.5 幅：9.3 厚さ：4.5	芯持ち	長径4.2、短径3.5、深さ2.8の穴有り	3-5 4-2-1	R11

第17図 SX103B 出土遺物（2）



番号	種類	遺構層位	特徴		大きさ			写真図版	登録番号	備考
			外面	内面						
1	石臼	SK103b 1層	白面に放射状の目		直径:32.5 高さ:12.6			3-3	R56	
2	磁器・皿	II層	唐草文、圈線		22.6 4/24	13 4/24	5.1	-	R54	

第18図 SK103土壤、堆積層 出土遺物

4 考察

(1) 遺構の年代

古代：SI105竪穴住居跡B期の堆積土からは、土師器杯（BV類）が2点、須恵器杯（V類）が1点出土している。器形がわかるものには土師器杯があり、その器形は底径が小さく底径／口径比は0.52と0.54である。このような器形のものは9世紀後半頃とされている多賀城跡鴻の池第10層出土土器の中に見られ、BV類が主体としていることなどの共通点もある。したがって、SI105Bもおよそその頃の年代が考えられる。

SK109については、底面に灰白色火山灰が自然堆積していたことから、10世紀前葉頃の年代が考えられる。

中世・近世：SD102堀跡からは、無釉陶器甕・擂鉢、陶器皿が出土している。このうち陶器皿は自然堆積層とみられる下層から出土している。その特徴から肥前産の絵唐津で、年代は慶長年間（1596～1615）と考えられることから、SD102堀跡はこの頃までは開口していたものと考えられる。また、人為的に埋め

戻されたと考えられる上層からは無釉陶器甕や青磁碗が出土している。無釉陶器甕は口縁部が上方につまみ上げられて縁帯を作り出しているものや、N字状となるもの、下に下がっているものなどがあり、これらの特徴から13～14世紀頃の常滑窯の製品と考えられる。青磁碗は外面に雷文とラマ式連弁文がヘラ彫りされており、おおよそ15世紀頃の中国明代の製品と考えられる。SD102堀跡とどのような関係があるのか明確ではないが、少なくともSD102周辺には、13世紀から15世紀頃の遺構が存在した可能性は指摘できよう。

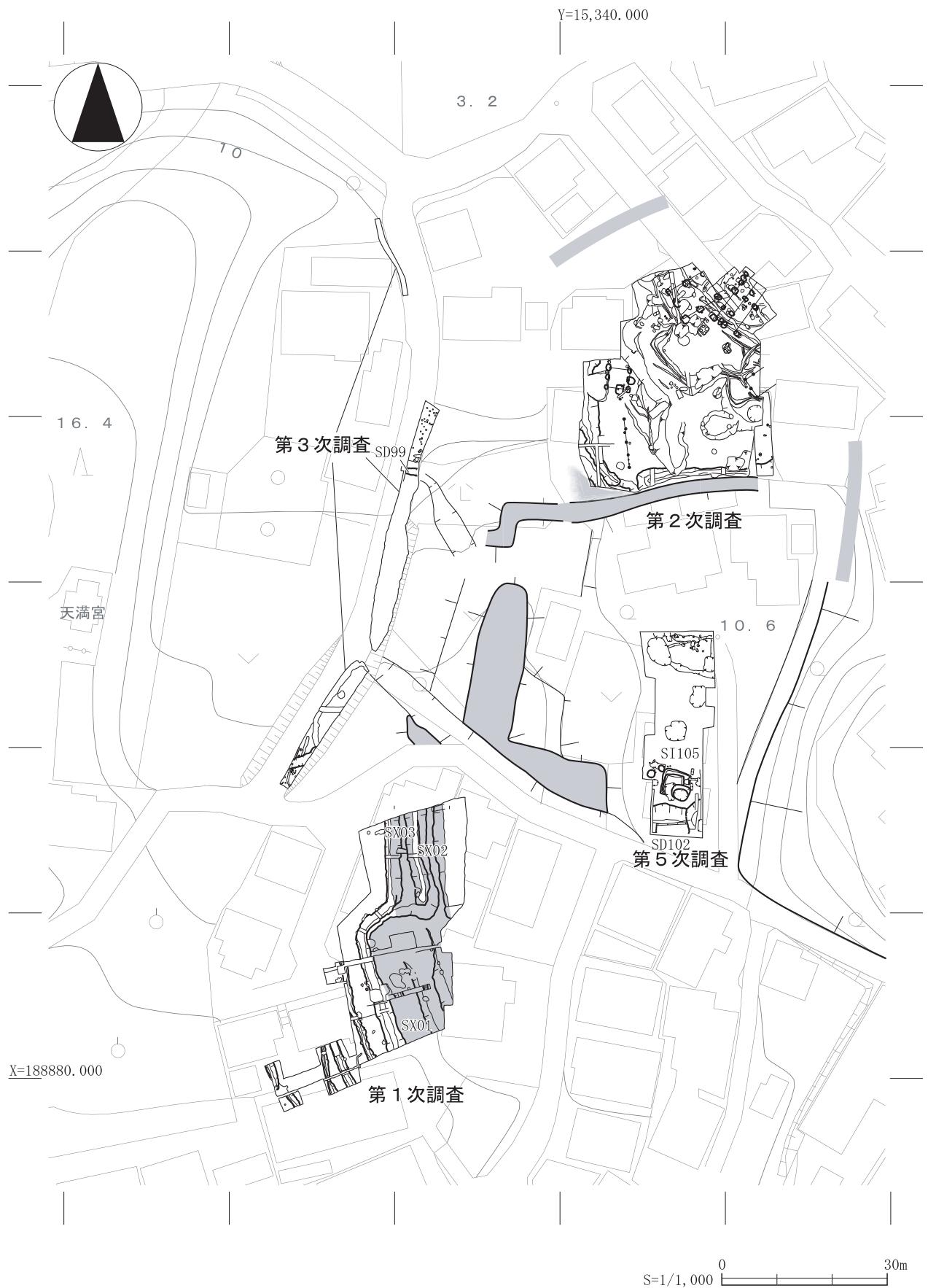
SK103土壌B期の埋土からは陶器擂鉢と寛永通宝が出土している。陶器擂鉢については、口縁部や施釉方法の特徴から、岸窯（福島市）の製品と考えられる。この窯の操業年代については「正保〇年五月」の紀年銘を有する壺の存在から、正保年間（1644～1648）にその一端があることは確実であり、多くは17世紀後半から18世紀前半の遺跡から出土しているという。また仙台市南小泉遺跡や白河市小峰城の調査では、寛永年間（1624～44）にさかのぼるとの指摘もある。寛永通宝については2枚出土しているがいずれも古寛永錢であり、鑄造年代は寛永13年（1636）～万治2年（1659）である。このことから、SK103B期は寛永13年（1636）～18世紀前半、A期は前述したSD102より新しいことから慶長年間以降、B期以前と考えることができる。

SD110と柱穴の一部は、整地層とみられるⅡ層の上面で検出している。Ⅱ層からは磁器皿が出土しており、高台内には圏線が描かれている。このような特徴は肥前磁器では17世紀中頃から見られるとされている。したがって、北側で発見したSD110と柱穴については17世紀中頃以降の年代を与えることができる。SK106についてはB期の埋土から燻し瓦が出土していることから、おおよそ近世以降と考えられるが、小破片であるため詳細は不明である。

SE107・108については出土した遺物は全て古代のものであるが、埋土の特徴はSK103・106に類似していることから、およそ近世以降と考えておきたい。

（2）中世の遺構について

留ヶ谷遺跡では、これまでの調査で中世の館に関わるとみられる土壙や溝跡などが発見されており、地表からその高まりや窪みを観察できる地点もある（第19図）。それらとSD102堀跡の位置関係についてみると、西側にはおおよそ同じ方向の土壙があり、その北辺からは南北方向の土壙状の高まりがのびている。北側にある第2次調査区との境にも東西方向の土壙があり、その西端部は舟形状に屈曲している。東側には崖面があり、それに沿って通路状の細長い平場が南北方向にのびている。調査区東壁から約1.8m西の位置において、SD102の底面に構築されたSX104石組遺構は堀と直行する方向に組んだものであり、詳細は不明であるが土橋の基礎である可能性も考えられよう。このことから、本調査区は、これら土壙と堀跡、崖によって区画された東西約50m、南北約57mの平場の中に位置しており、SD102はその南辺を区画する施設の一部である可能性がある。この頃の区画内部の様子については、調査区の中央部は攪乱や削平を受けていることや、北側は近世の遺構による地形の改変がなされていることから、明らかにすることはできなかった。ところで、多賀城市では中世の館跡に関わる遺構がいくつか調査されており、そのいずれも16世紀に機能を停止していたことが明らかになっている。高崎遺跡第11次調査で発見したSD1086溝跡は人為的に埋め戻されており、その層から16世紀末以降に出現する美濃窯（志野）の施釉陶器鉢が出土している。このことから、15～16世紀頃に機能していたものが、16世紀末頃に埋め戻されたと考えられている。また、八幡館跡SD13溝跡から出土した遺物は、古瀬戸の施釉陶器瓶子が14世紀に



第19図 第5次調査区と周辺の調査区

さかのぼるもの、多くは15～16世紀のものであることから16世紀代には埋没し始めたものと考えられている。前者は八幡氏の一族である高崎氏、後者は八幡氏の館と考えられ、両氏とも戦国時代には留守氏の被官であったとされている。留守氏は天正18年（1590）頃、利府城から黒川郡大谷城へ所替えになっているが、八幡氏やこれを宗家とする高崎氏もこれに従って移転したと考えられている。一方、天文17年（1548）には成立したと考えられる「留守分限帳」をみると、塩釜の駒犬館に居を構えた佐藤玄番頭をはじめ、多くの家臣団が塩釜に知行を有していたことが記されている。今回調査した留ヶ谷遺跡の館については、館の主を推定できるような資料や出土遺物はないが、本遺跡東側に位置する塩釜一帯が留守氏の所領であったことを考えれば、八幡氏や高崎氏と同様留守氏の支配下にある武士の館であったと推測される。

5 まとめ

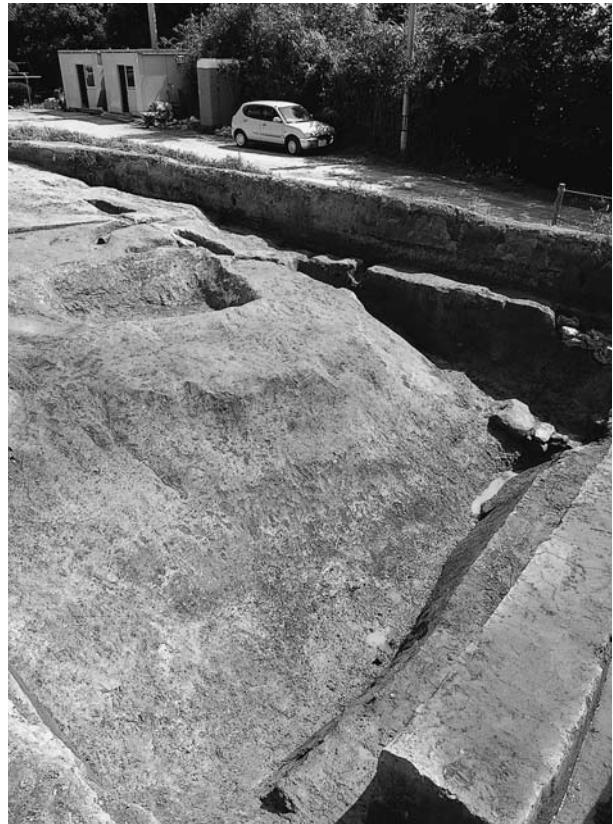
- (1) 留ヶ谷遺跡の東側で調査を行い、古代の竪穴住居跡や中世の堀跡、近世の柱穴、土壙などを発見した。
- (2) 古代の遺構としては本遺跡でははじめて9世紀後半頃と考えられる竪穴住居跡を発見し、集落の一端が明らかとなった。遺構には伴わないが緑釉陶器や瓦など一般集落ではあまり見られない遺物も出土しており注目される。
- (3) 中世の遺構としては館の空堀跡を発見し、当該地が東西約50m、南北約57mの区画の南辺にあたることが判明した。
- (4) 調査区北側では、近世の建物を構成すると考えられる柱穴を発見した。第2次調査では、中世の館跡を近世には武士の屋敷に改修していたことが明らかとなっており、この区画でも同様の変遷があったことが窺われる。
- (5) 調査区の南側では、遺構はさらに南と東にのびていることから、遺跡の範囲は南東側に広がる可能性が高いと考えられる。

参考文献

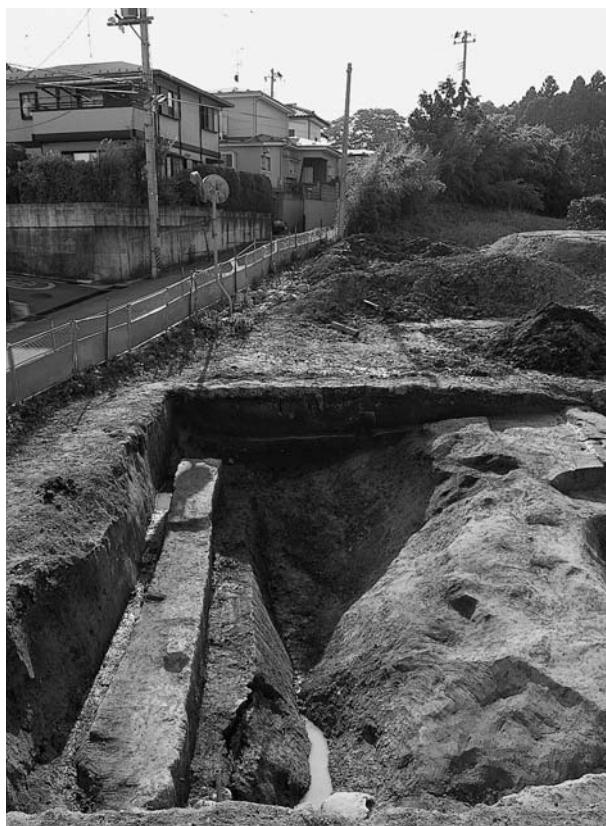
- (1) 多賀城市教育委員会『留ヶ谷遺跡－第1・3次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第48集 1998
- (2) 多賀城市教育委員会『年報1 昭和61年度』多賀城市文化財調査報告書第14集 1987
- (3) 多賀城市『多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世』 1997
- (4) 多賀城市『多賀城市史 第2巻 近世・近現代』 1993
- (5) 多賀城市『多賀城市史 第4巻 考古資料』 1991
- (6) 多賀城市『多賀城市史 第5巻 歴史史料（一）』 1985
- (7) 福島市教育委員会『岸窯跡－近世窯跡の調査－』福島市埋蔵文化財報告書第111集 1998
- (8) 東北中世考古学会編『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院 2003
- (9) 寺嶋修二「貞山運河、七北田川の付替、御舟曳堀、蒲生御蔵前、鶴巻御蔵、苦竹御蔵の歴史」『高砂の歴史』 1984
- (10) 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』 2000
- (11) 永井久美男編『近世の出土銭II－分類図版篇－』兵庫埋蔵銭調査会 1998



1 SD102溝跡とSX104石組遺跡（西より）



2 SD102溝跡とSX104石組遺構（南西より）

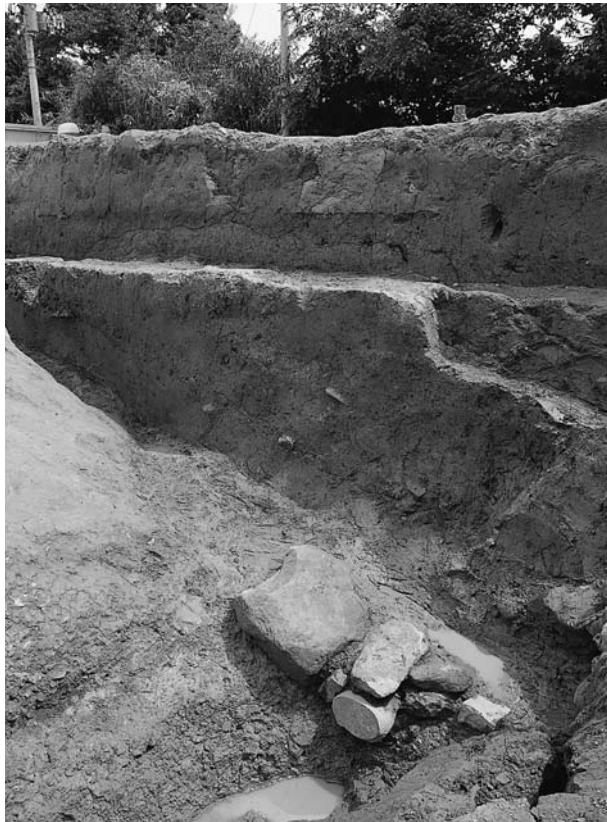


3 SD102溝跡（東より）



4 柄杓出土状況（SD102堀跡 下層）

写真図版 1



1 SX104石組遺構（南西より）



2 SX104石組遺構（西より）



3 SI105竪穴住居跡（東より）



4 調査区北側Ⅱ層上面検出遺構（東より）

写真図版 2



1 土師器高台付杯 (第5図3 R52)



2 茶臼 (第16図5 R72)



3 石臼 (第18図1 R56)



4 柄杓 (第14図5 R2)



5 SK103出土木製品 (第17図
手前からR11,R19,R 9 ,R 6)

写真図版 3

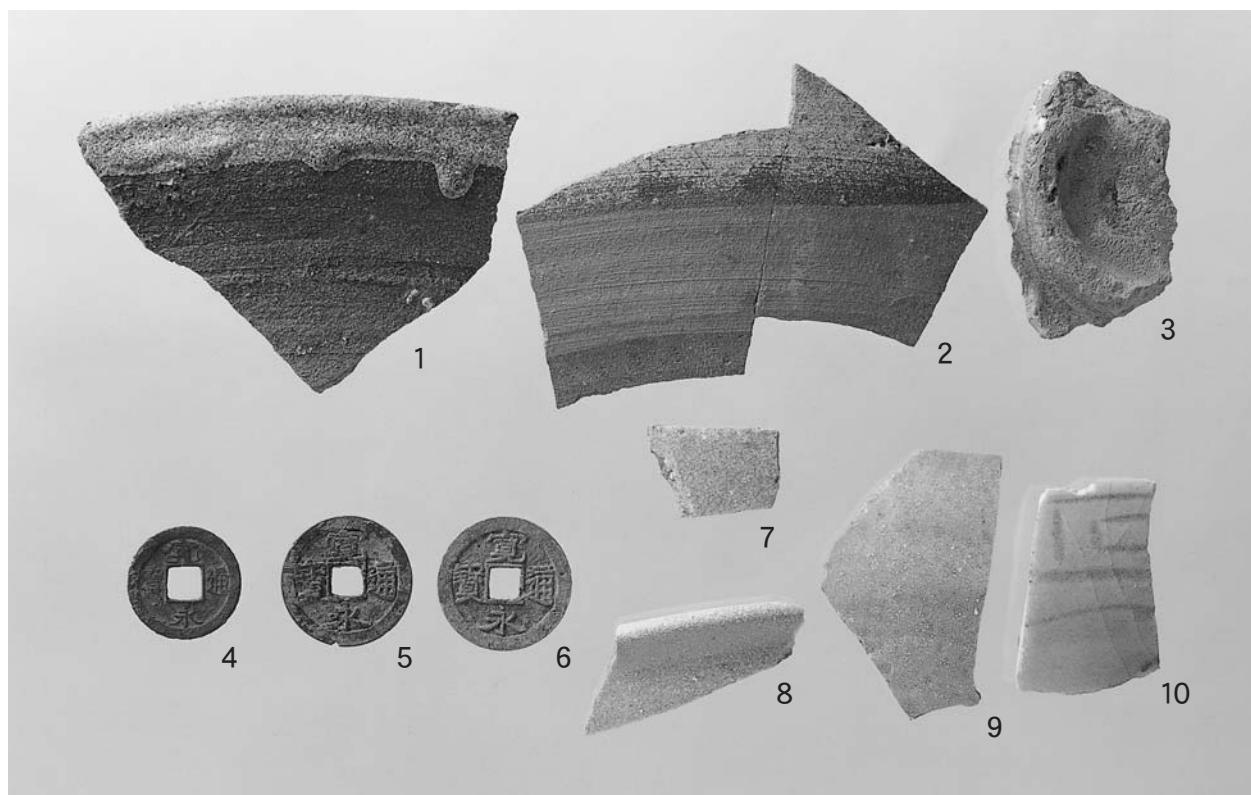


1 SD102出土無釉陶器 (第12図 1:R1 2:R17 3:R18 4:R12 5:R24 6:R3)

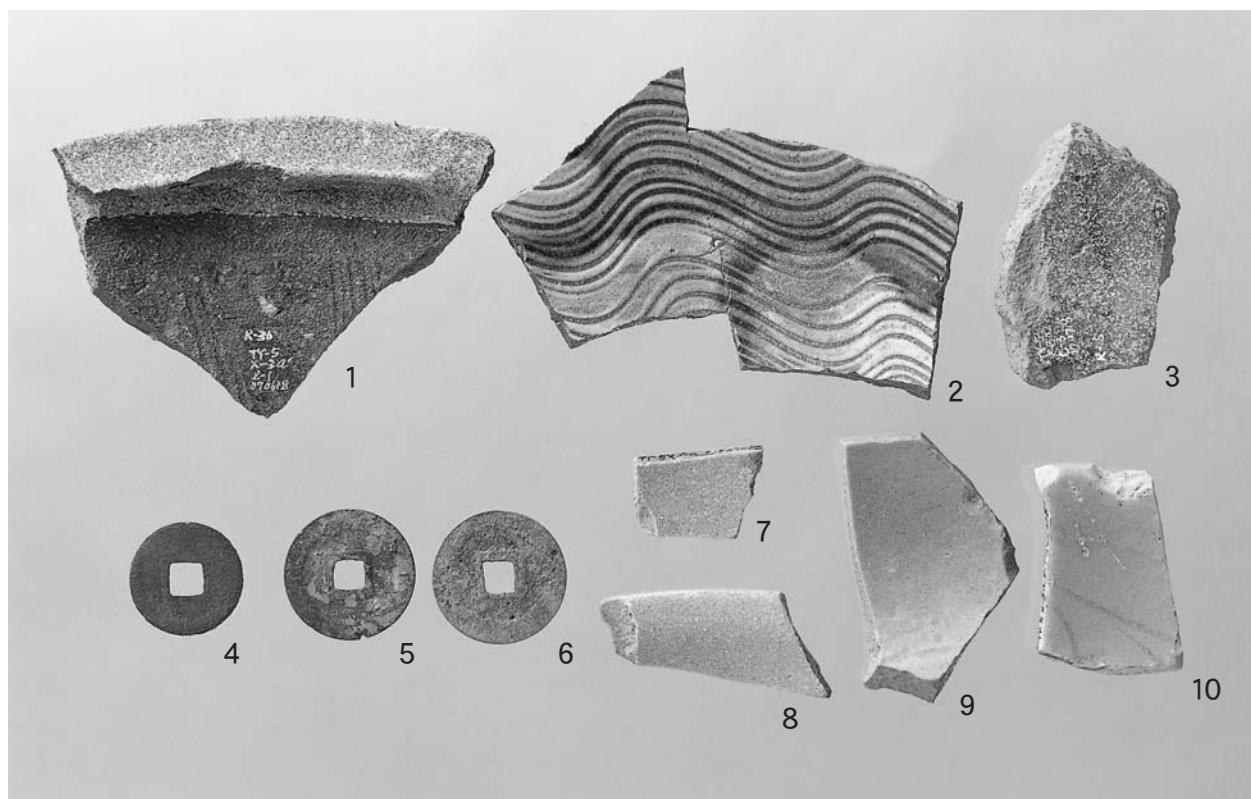


2 SK103出土木製品 (第17図 1:R11 2:R6 3:R9 4:19)

写真図版4



1 陶器、磁器、古銭 (1:SK103 R36 2:I層 R47 3:SD102 R5 4:攪乱 R1 5:SK103 R2
(外面及び表面) 6:SK103 R3 7:SD102 R6 8:SD102 R73 9:SD102 R74 10:SD102 R27)



2 陶器、磁器、古銭 (1:SK103 R36 2:I層 R47 3:SD102 R5 4:攪乱 R1 5:SK103 R2
(内面及び裏面) 6:SK103 R3 7:SD102 R6 8:SD102 R73 9:SD102 R74 10:SD102 R27)

写真図版 5

IV 高崎遺跡第68次調査

1 遺跡の立地と周辺の調査成果

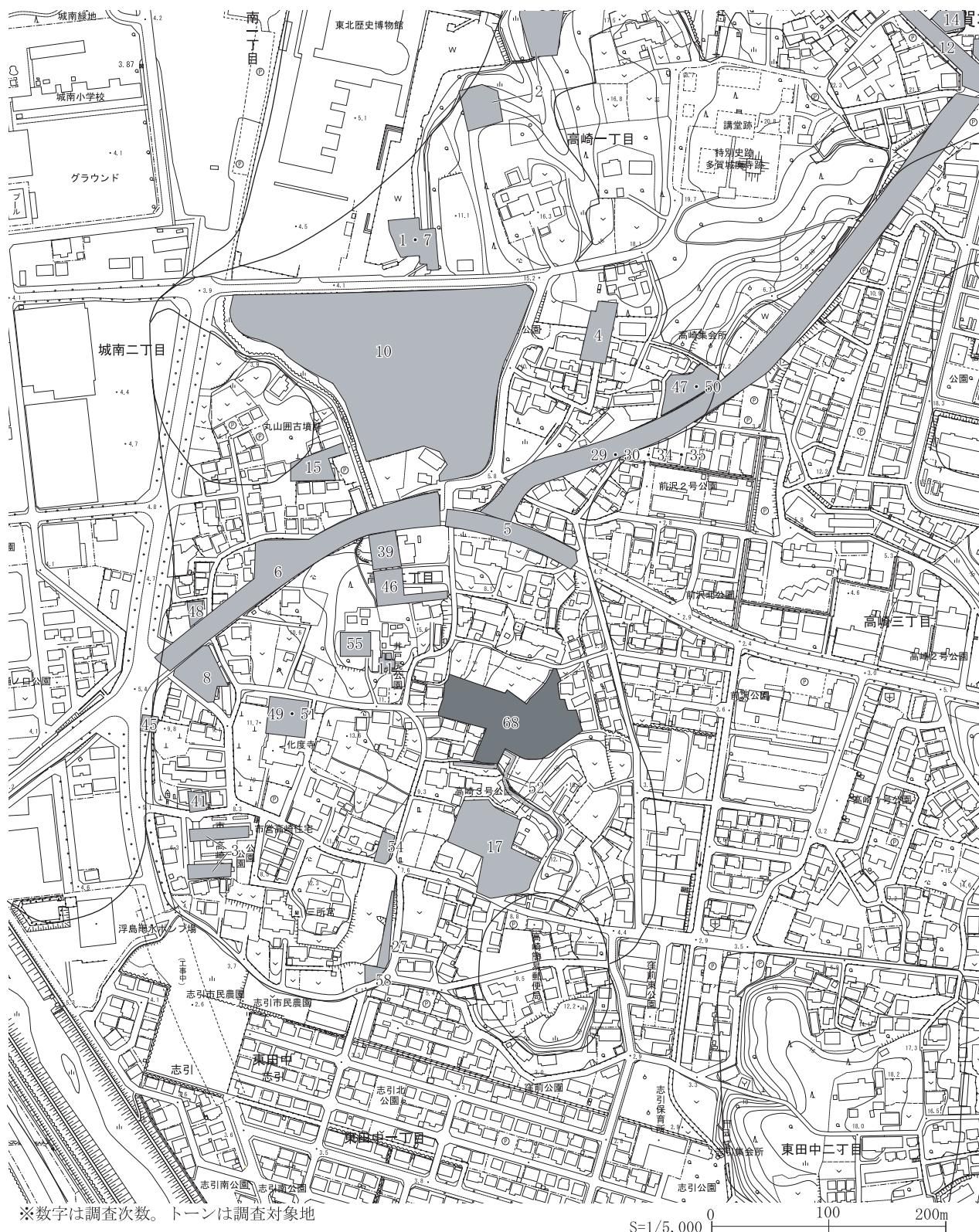
本調査区は高崎遺跡の南側にあたり標高は3.2～9.1mと高低差がある。地形的には丘陵と湿地が入り組んでおり、調査区の東側は湿地、西側は丘陵となっている。

調査区周辺では古墳時代から中世にかけての遺構・遺物を発見している。古墳時代では、第17次調査で中期の竪穴住居跡を発見しており、石製模造品とともに、その未製品や剥片などが出土していることから工房と考えている。古代では、第10次調査で、約80軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などを発見している。竪穴住居跡の中には工房と考えられるものや、灰釉把手付瓶や小型の長頸瓶、鉄製匙などが一括出土したものがあり、付近から仏器である灰釉陶器の淨瓶なども出土していることから一般集落とは異なる性格と考えている。第11次調査区では大量の灯明皿を一括廃棄したとみられる遺構を発見しており、付近では万灯会のような仏教儀式が行われたものと推測している。中世では第17次調査で、南北約35m、東西40m以上の溝によって区画された武士階級の屋敷跡を発見しており、後述する高崎氏との関連が指摘されている。また第11次調査では、16世紀末頃に埋め戻された館の大溝を発見している。その廃絶に関しては、天正18年（1590）頃、高崎氏の宗家である八幡氏が、国人領主である留守氏の黒川郡大谷城への移転に従い、この地を離れたことと関係があると推測している。さらに井戸尻地区には「館屋敷」と呼ばれる一画がある。東西約70m、南北約60mの平場が確認されており、土壘や堀跡などが認められる。また、『留守家文書』の「斯波直持施行状」によると、延文元年（1465）に宮城郡高崎村は八幡氏の所領であったことがわかる。『平姓八幡氏系譜』には、八幡氏一族の彦三郎盛忠が高崎氏を称したと記されており、天正6年（1578）に高崎近江盛長が八幡氏の家督相続問題の際に功績をあげていることなどが記されている。さらに盛忠の法号は「化度寺殿」であり、現在館屋敷の西にある化度寺との関連がうかがわれる。このような史料の存在や地名などから、館屋敷と呼ばれる一帯は高崎氏の館跡と推定されている。

近世の遺構としては、弥勒地区における第7次調査において江戸時代の屋敷跡を発見し、多数の掘立柱建物跡や溝跡、土壙、地鎮遺構を発見している。地鎮遺構は掘立柱建物跡の北西隅に位置し、かわらけと古銭を浅い土壙に埋納したものである。かわらけには輪宝を墨書きしたものがあり、建物をつくる際の地鎮に関わるものと考えられている。

2 調査に至る経緯と経過

本件は高崎二丁目地内の宅地造成工事に伴う本発掘調査である。平成19年2月に中城建設株式会社より当該地における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画内容は、19区画の宅地及び公園・公益用地の造成と、擁壁と道路の新設工事を行うものであった。造成は計画地全体に0.5～2.2mの盛土を施し、一部現地表より0.2～0.6mを切り土施工する計画であるため、宮城県の発掘調査基準に従い2m以上の盛土を施す部分及び切り土施工する部分、道路新設部分と擁壁の基礎により遺構に影響を及ぼす部分を対象に本発掘調査を実施する必要が生じた。ただし当該地の東側は湿地と推定されたため、この範囲と遺構の分布を確認すること目的とした確認調査を実施することとなった。5月16日に調査を行ったところ、東側では湿地を確認し、西側では遺構を発見できなかった。その結果を



第1図 調査区位置図

もとに22日に協議を行ったところ、造成計画の内容を変更することは不可能との結論に達したことから、湿地の範囲や深さなどを記録する作業と、南端部では柱穴を発見した第52次調査区に隣接する部分で本発掘調査を行うこととなった。これにより6月22日に中城建設株式会社より発掘調査実施依頼書の提出を受けたことから、8月21日より発掘調査を開始した。

はじめに重機による表土（I層）の除去から行った。東側から調査をはじめ、21～22日に作業をした結果、第1～5区と第6区の北側は湿地であることが判明し、これらの記録を作成した後、23日には第1～5区は埋め戻した。23日からは攪乱された土層を隨時掘り上げながら遺構検出作業を行ったところ、29日には試掘調査で遺構を確認できなかった第8区の西側地区で柱穴や竪穴住居跡、湿地と考えられた東側地区で溝跡を発見した。以後、写真撮影や図面作成を隨時行った。30日には第8区東側のSD1658には2時期の変遷があることを確認するとともに、同西側では掘立柱建物跡の存在を確認した。第7区では標高低い東側は排水状況が悪いことから、比較的状態の良い西側において9月3～5日に検出作業を行ったところ、調査区中央でSK1693などを発見した。6・7日は台風の影響で作業を中断し、週明けの10日から作業を再開した。各調査区の排水と、第6区の遺構検出作業を行ったが、この後天候不順が続き度々調査を中断せざるを得なかった。14日には第8区で発見したSB1690の全容を確認し、東側ではII層上面で発見したSD1658Bの埋土除去を完了し、さらに下層のIII層上面でSD1659を発見した。また第6区では柱穴や溝跡を発見した。21日には、それまで悪天候と排水不良で作業できなかった第7区東側において遺構検出作業を行ったところ、掘立柱建物跡を発見した。25日から10月4日まではこれら検出した遺構の埋土の除去や記録作成を行った。10月5日には器材を撤収し、現地調査の一切を終了した。

3 調査成果

（1）層序

今回の調査対象地は大きく東半部が湿地、西半部が丘陵となっている（第2図）。西半部は傾斜面であり、各調査区の層序の対応関係を明確にすることができなかつたことから、調査区ごとに層序を示す。また、東半部はおよそ対応関係が把握できたことから、これをまとめて説明する。

東半部（第3図）

I層：現代の表土であり、2層に細分できる。I1層は盛土で厚さは50cmである。I2層は植物の腐食土層で厚さは10～20cmである。

II層：現代の水田耕作土である。暗オリーブ灰色粘土で厚さは38～64cmである。

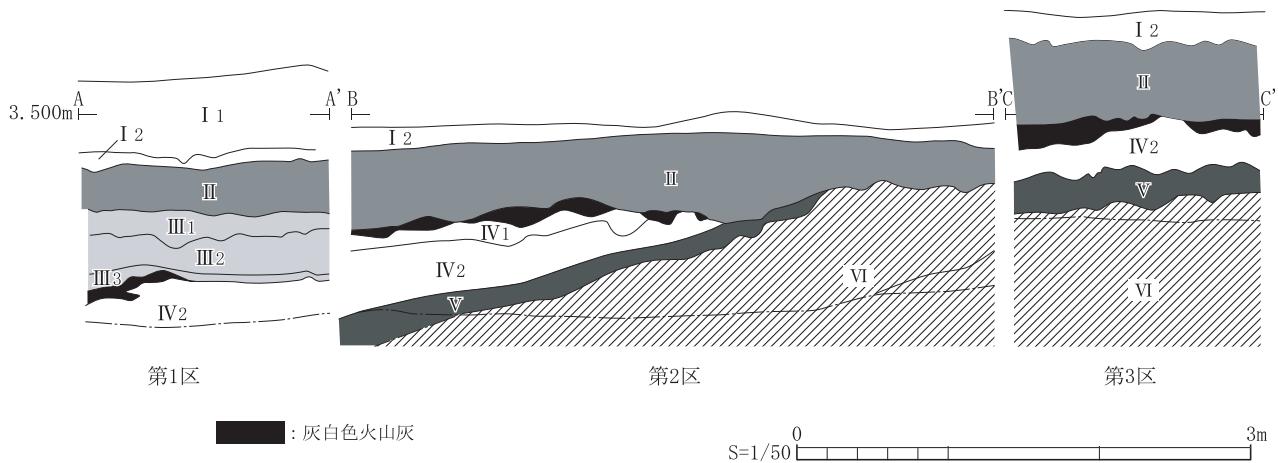
III層：第1区でのみ確認できた厚さ46～54cmの黒～黄灰色粘土で、上方ではオリーブ灰色粘土をブロック状に含んでいる。

IV層：2層に細分できる。IV1層は第2区でのみ確認でき、灰色粘土で厚さは15cmである。IV2層は黒褐色粘土で植物遺体を多量に含んでおり、確認できた厚さは24～34cmである。第1区ではさらに厚く堆積している。

V層：浅黄橙～にぶい黄橙色の粘土である。一部岩盤が細かく碎けた砂として堆積している箇所もある。周辺の基盤層である。



第2図 高崎遺跡第68次調査 全体図



第3図 第1～4区 断面図

第6区

I 層：現表土で厚さは0.9～1.1mである。

II 層：明黄褐色土で周辺の基盤層である。

第7区

I 層：現代の盛土で、厚さは1.0～1.2mである。

II 層：調査区中央にのみ堆積している黒色土で厚さは20～50cmである。

III 層：調査区中央にのみ堆積している灰白色粘土で一部に黒色粘土とで互層となっている。厚さは10～20cmである。

IV 層：調査区中央にのみ堆積しているにぶい黄褐色砂質土で厚さは10～30cmである。

V 層：調査区中央から東側にのみ堆積している褐灰色粘質土～粘土である。攪乱により分断されているため、西側をVa層、東側をVb層とし、後者は調査区北壁での断面のみで確認した。古代の遺構検出面で厚さは10～32cmである。

VI 層：にぶい黄橙色土で、周辺の基盤層である。最終遺構検出面である。

第8区

I 層：現表土で厚さは20cmである。

II 層：調査区東側の低い部分にのみ堆積しており、2層に細分できる。II 1層は黒褐色粘質土で、厚さは東側ほど厚く10～30cmである。II 2層は高い箇所の一部に堆積しており、III層に起因する土をブロック状に含むにぶい機褐色土である。

III 層：浅黄橙色～橙色粘質土で周辺の基盤層である。

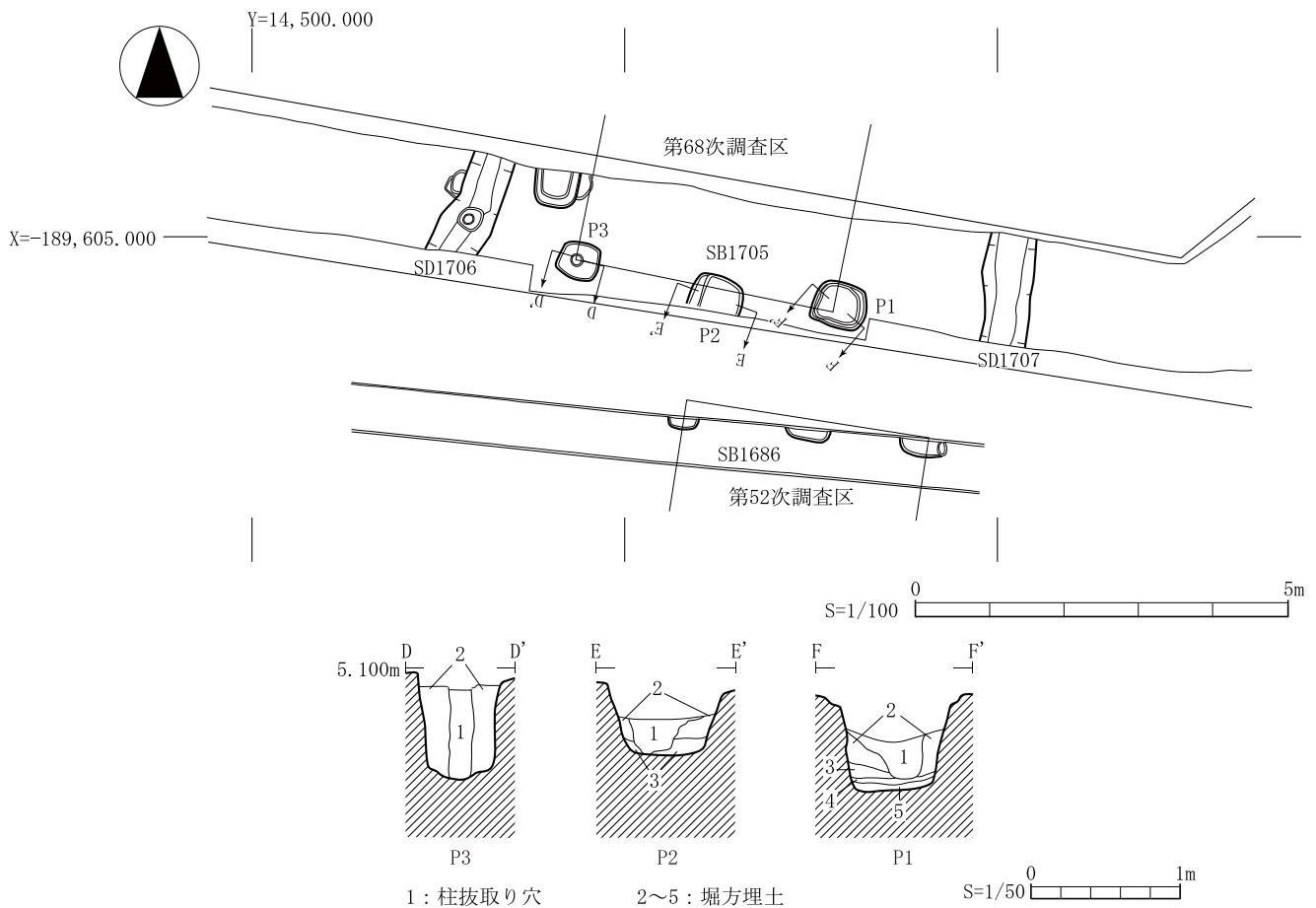
(2) 発見した遺構・遺物

今回の調査では、第6～8区において竪穴住居跡、掘立柱建物跡、柱列跡、井戸跡、溝跡、土壙、柱穴を発見した。以下調査区ごとに説明する。

第6区

SB1705掘立柱建物跡（第2・4図）

調査区中央のII層上面で発見した。掘立柱建物跡の南妻と考えられる。柱は全て抜き取られており、Pit 3では柱のあたり痕跡を残す抜取り穴を確認した。方向は東で約11度南に偏している。総長約3.5mで、



第4図 第6区 遺構平面図・断面図

柱間は西から約1.9m、約1.6mである。掘方の平面形は方形で、規模は一辺40～65cmである。掘方埋土はにぶい黄褐～黄褐色土、柱抜取り穴は灰黄褐～黄褐色土で、いずれもⅡ層に起因する明期褐色土をブロック状に含んでいるが、掘方埋土には多量に含んでいる。

遺物は柱抜取り穴から土師器甕が、掘方から土師器甕（B類）が出土している。

SD1706溝跡（第2・4図）

調査区中央のⅡ層上面で発見した南北方向の溝跡である。方向は北で26度東に偏している。規模は上幅57～73、深さ13～24cmである。底面は北に向かって低くなっている。壁はやや急に立ち上がっている。

遺物は土師器杯・甕（B類）、須恵器杯（III類）・甕が出土している。

SD1707溝跡（第2・4図）

調査区中央のⅡ層上面で検出した溝跡である。方向は北で8度東に偏している。規模は上幅58～71cm、深さ8～18cmである。底面は北に向かって低くなっている。壁は斜めに立ち上がっている。

遺物は土師器杯、須恵器甕が出土している。

第7区

SB1700掘立柱建物跡（第2・5・6・7図）

調査区中央のVI層上面で発見した東西2間の掘立柱建物跡である。SB1702と重複しているが、柱穴に直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。南東隅の柱は抜き取られていたが、その他の柱穴には直径10~15cmの柱材が確認できた。方向は東で約13度南に偏しており、柱間は西から1.93m、約2.2mである。掘方の平面形は方形であり、規模は一辺30~84cmである。掘方埋土はオリーブ黒色~黄灰色粘質土で基盤層のにぶい黄橙色土をブロック状に含んでいる。柱抜取り穴埋土は黒色粘質土である。

遺物は掘方から須恵器杯、柱抜取り穴から土師器杯・甕が出土している。

SB1701掘立柱建物跡（第2・5・6・8図）

調査区東側のVb層上面で発見した東西2間以上の掘立柱建物跡である。SB1702・1703と重複しているが、柱穴に直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。南東側隅の柱は掘方の一部を検出するにとどまったが、他の柱は全て抜き取られていることが確認できた。方向は東で約14度南に偏しており、柱間は西から約2.5m、約2.3mである。掘方の平面形は方形で、規模は一辺0.8~1.0mである。掘方埋土は灰褐色~黄灰色粘質土で基盤層のにぶい黄橙色土をブロック状に多く含んでいる。柱抜取り穴埋土は黒色~黄灰色土で炭化物や基盤層のにぶい黄橙色土をブロック状に少量含んでいる。遺物は出土していない。

SB1702掘立柱建物跡（第2・5・6・8図）

調査区東側のVI層上面で発見した桁行4間、梁行2間以上の掘立柱建物跡と考えた。SB1700・1701・1703・1704、SA1698と重複しているが、柱穴と直接切りあってないため新旧関係は不明である。南西側の隅柱は抜取り穴、それ以外は柱痕跡を確認した。南側の柱列で見ると方向は東で約10度南に偏しており、規模については総長約8.1m、柱間は西から約2.2m、2.07m、2.47m、1.42mである。掘方の平面形は方形または不整形で、規模については方形のものは一辺22~28cm、不整形のものは25~54cmである。柱痕跡の規模は直径10~14cmである。掘方埋土は黒褐色~黄褐色粘質土でVI層に起因する土をブロック状に含んでいる。柱抜取り穴埋土は黒色土で、炭化物と基盤層のにぶい黄橙色土をブロック状に含んでいる。遺物は出土していない。

SB1703掘立柱建物跡（第2・5・6・8図）

調査区東側のVI層上面で発見した東西3間以上、南北2間以上の掘立柱建物跡である。SB1701・1702、SA1698と重複しているが、柱穴に直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。柱は全て抜き取られていることを確認した。南側の柱列で見ると方向は東で約4度南に偏しており、柱間は西から約2.7m、約1.7mである。掘方の平面形は方形または不整形で、規模は前者が一辺26~29cm、後者は一辺42~52cmである。掘方埋土は暗灰色粘質土であり、柱抜取り穴は黒色や黄褐色土である。いずれも基盤層のにぶい黄橙色土をブロック状に含んでいる。遺物は出土していない。

SB1704掘立柱建物跡（第2・5・7図）

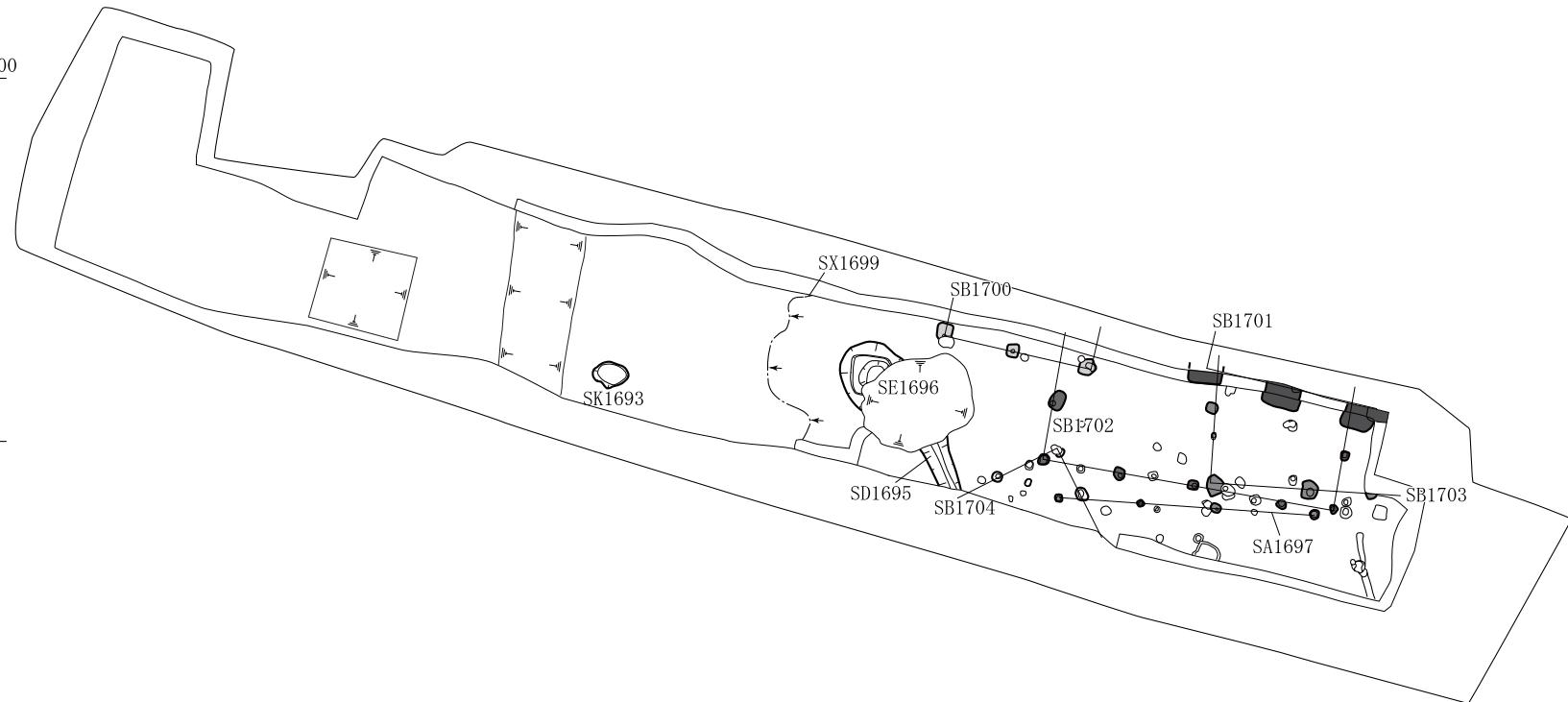
調査区東側のVI層上面で発見した掘立柱建物跡である。東西・南北方向に1間分の柱穴を検出したのとどまり、詳細は不明である。SB1702、SA1697・1698と重複しているが、柱穴に直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。柱は南北方向のものは全て抜き取られており、その他の柱穴では柱痕跡を確認した。北西側の柱列で見ると、方向は東で約27度北に偏している。柱間は東西方向が約1.8m、南北方向が

58



Y=14,500.000

X=-189,550.000



S=1/200 0 10m

第5図 第7区 遺構全体図

約1.4mである。掘方の平面形は円形や楕円形であり、円形のものは直径27cm、楕円形のものは長径39cmである。柱痕跡は直径14cmである。遺物は出土していない。

SA1697柱列跡（第2・5・6・8図）

調査区西側のVI層上面で発見した東西3間の柱列跡である。SB1704と重複しているが、柱穴に直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。全ての柱穴で柱材か柱痕跡を確認した。方向は東で約4度南に偏している。規模は総長7.05mで、柱間は西から2.26m、2.10m、2.69mである。柱痕跡の平面形は円形で直径10~14cmである。掘方の平面形は方形と円形で、前者は一辺14~19cm、後者は直径26~28cmである。掘方埋土は黒色または黒褐色粘質土で基盤層のにぶい黄橙色土をブロック状に含んでいる。遺物は出土していない。

SE1696井戸跡（第2・5・7図）

調査区西側のVa層上面で発見した素掘りの井戸跡である。平面形は円形であり、規模は直径1.7m、中頃に段がつき、それより下は一辺1.0m四方の方形を呈している。深さは1.0mである。埋土は1層で砂を含む黒褐色粘土である。

遺物は、土師器杯（A・B I・B II類）（第9-2図）・高台付杯・甕（A・B類）、須恵器杯（I・II a・III類）（第9-1図）・高台付杯・蓋・甕・横瓶、竈形土器（第9-2図）、木製品では挽物皿（第9-3図）、用途不明品（第9-4図）が出土している。

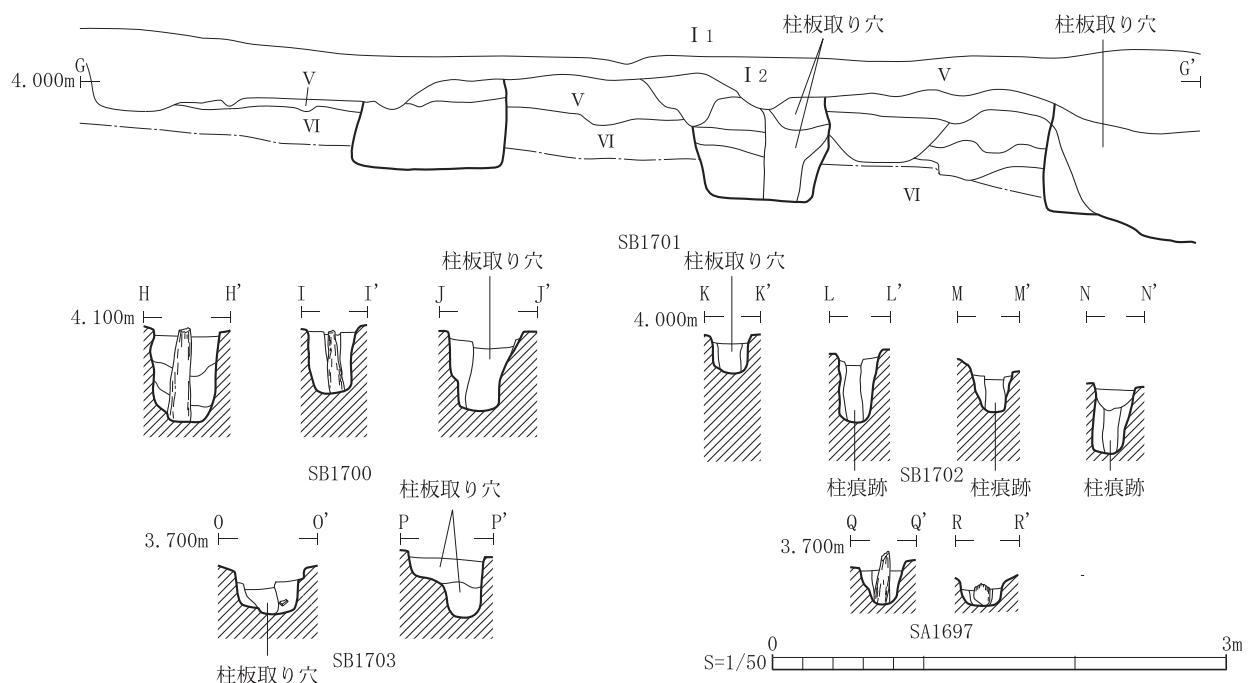
SD1695溝跡（第2・5・7図）

調査区西側のVI層上面で発見した溝跡である。方向は北で約23度西に偏しており、規模は上幅56~78cm、深さ20cmである。

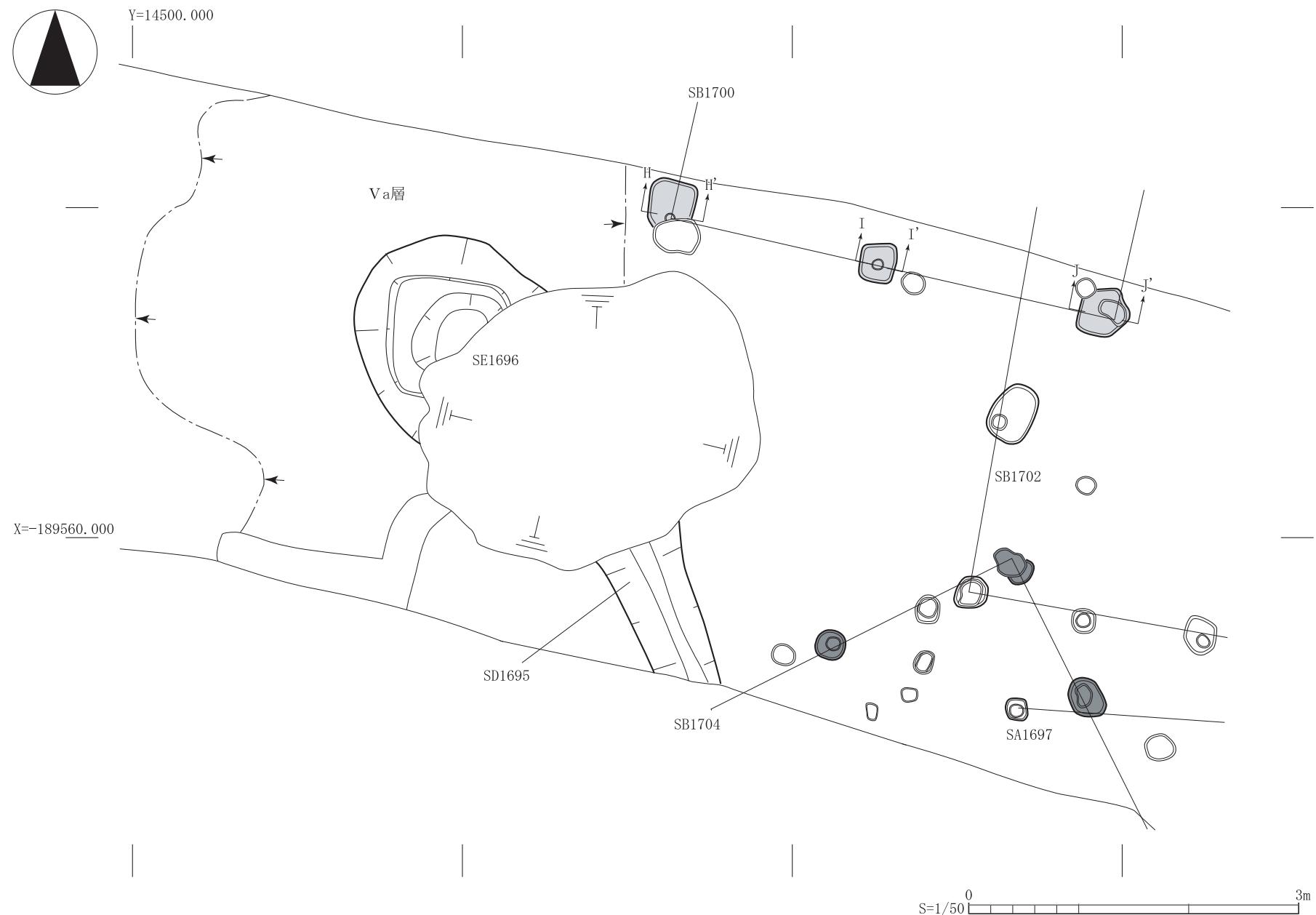
遺物は土師器杯（A類）・甕、須恵器杯（I・III類）・甕・鉢が出土している。

SK1693土壤（第2・5図）

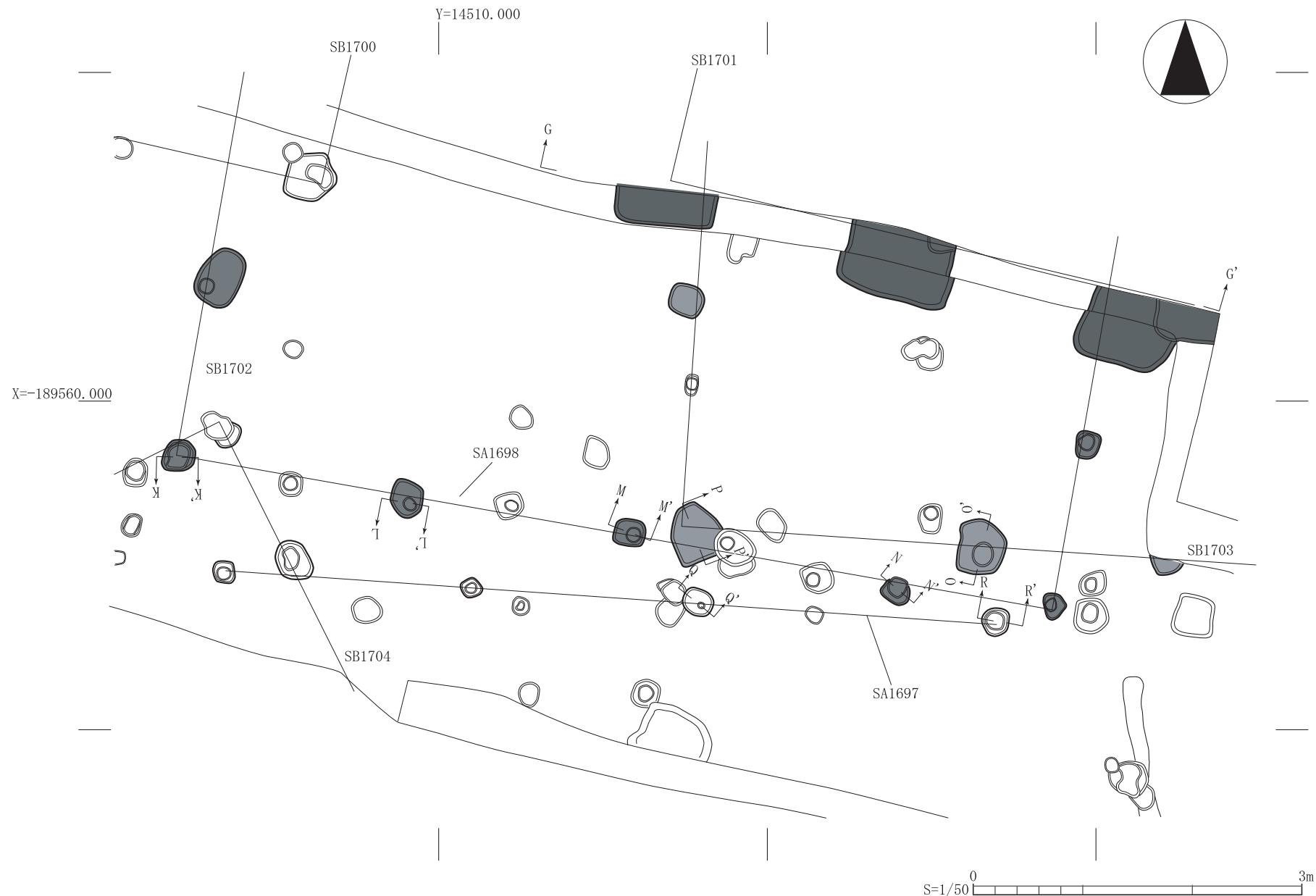
調査区西側のVI層上面で発見した土壤である。平面形は不整形で、規模は東西98cm、南北74cm、深さ



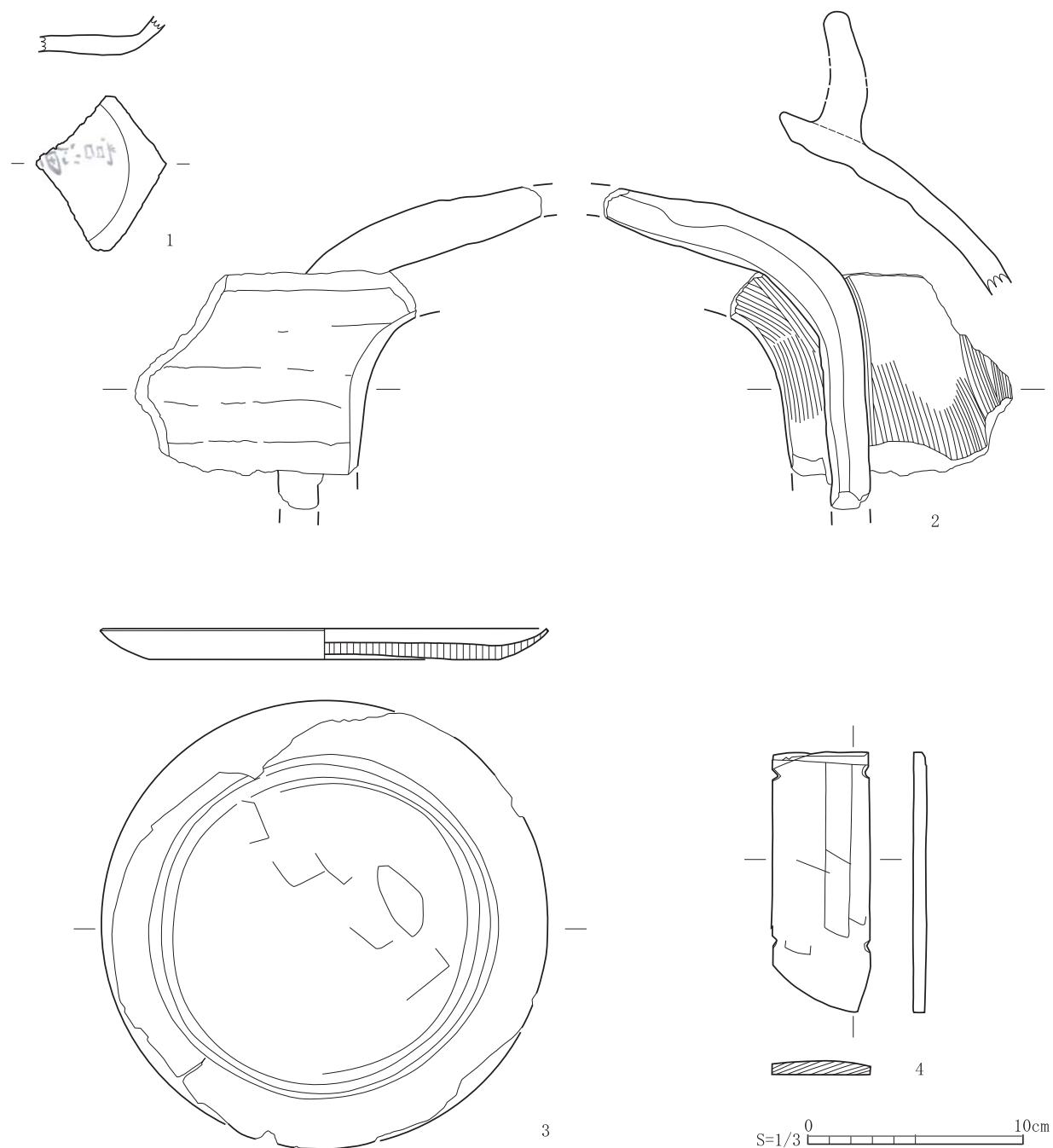
第6図 SB1700~1703及びSA1697・1698断面図



第7図 SB1700・SB1704・SE1696・SD1695平面図



第8図 第7区 遺構全体図



単位 (cm)

番号	種類	遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器 ・杯	SE1696 検出面	ロクロナデ、 底面：ヘラ切り	ロクロナデ	-	-	-	2-3-4	R10	底部に墨書「□（菅もしくは宮力）富□」
2	竈形土製品	SE1696 1層	ナデ	-	13.2 6/24	7.1 11/24	3.85	2-3-5	R6	
3	挽物皿	SE1696 1層			長さ：18.9 高さ：6.9	幅：6.9		2-2	R2	木取り：柾目
4	用途不明品	SE1696 1層	4箇所に刻み目。 円形曲物の転用か。		長さ：21.95 幅：9.05 高さ：5.7			2-2	R1	木取り：板目

第9図 SE1696出土遺物

は20cmである。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

遺物は土師器甕が出土している。

第8区

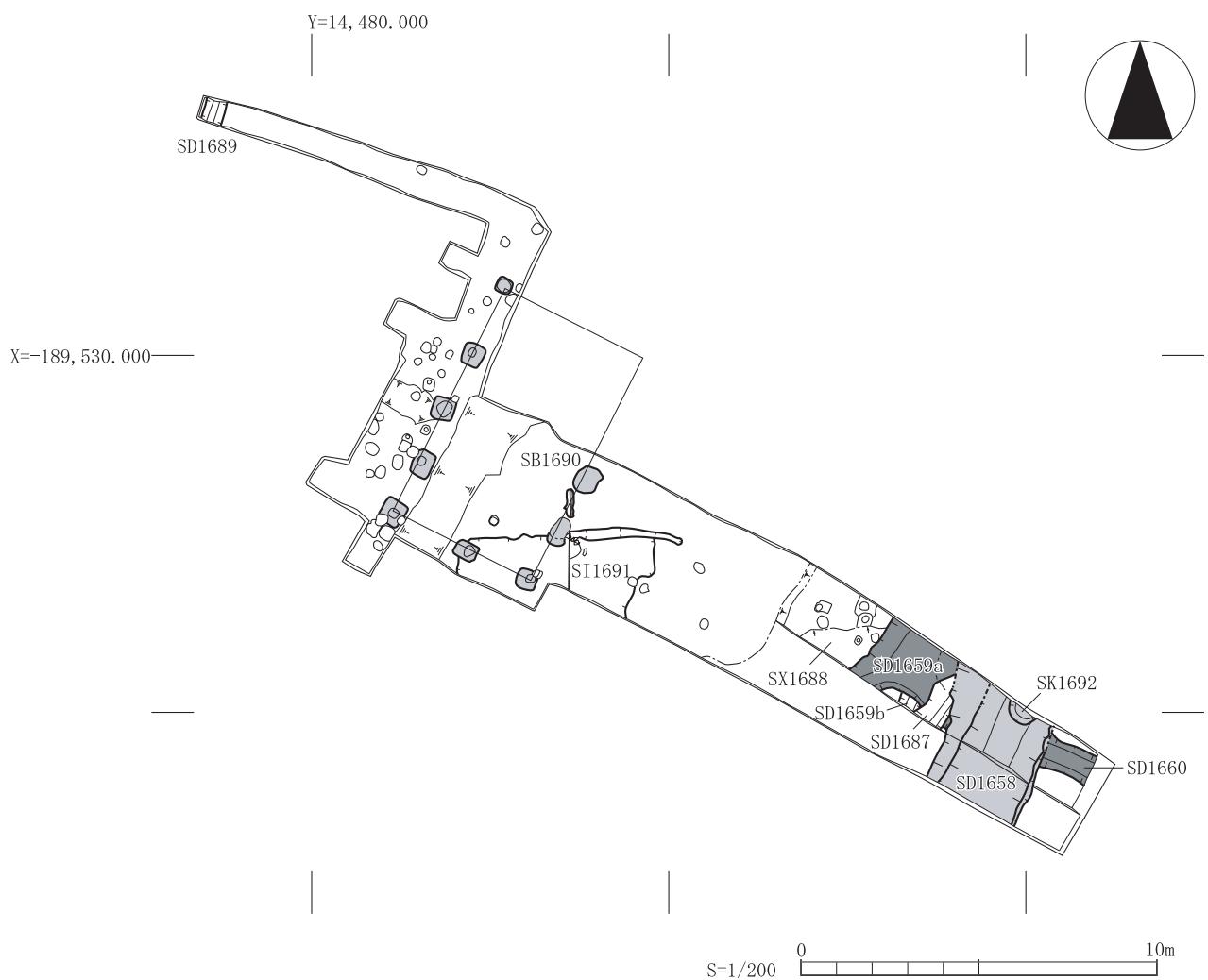
SI1691堅穴住居跡（第2・10・11図）

調査区西側のⅢ層上面で発見した堅穴住居である。SB1690と重複しており、それより古い。削平により東側ほど大きく壊されており、また調査区の南側へ延びていることからその全体を把握することはできなかった。平面形は方形を呈し、北辺でみると規模は一辺5.4m、方向は東で約4度北に偏している。カマドは北辺の中央に設けられており、焼土の広がりを確認できた。煙道は長さ1.2m、幅20cmである。周溝は北辺に沿って確認でき、カマドまで達していることから、この箇所では本来暗渠となっていたと考えられる。床面は灰色粘土の貼床である。

遺物は床面と堆積土から土師器甕（B類）、カマドから土師器甕が出土している。

SB1690掘立柱建物跡（第2・10・11図）

調査区西側のⅢ層上面で発見した桁行4間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。SI1691と重複しておりそれより新しい。柱は全て抜き取られており、Pit 2～5・7では柱のあたり痕跡を残す抜取り穴を



第10図 第8区 遺構全体図

確認した。方向は西側の柱列でみると北で約26度東に偏している。桁行については西側の柱列で総長約7.1m、柱間は南から1.67m、1.62m、1.76m、約2.1mである。梁行については南妻で総長4.3m、柱間は西から2.4m、1.9mである。掘方の平面形は方形であり、柱穴の規模は大きいもので一辺47～74cm、小さいもので一辺35～40cmである。掘方埋土は黒褐色粘質土であり、柱抜取り穴は褐灰色粘質土である。いずれもⅢ層に起因する浅黄橙色粘質土をブロック状に含んでおり、前者には多く含まれ、後者は少ない。

遺物は柱抜取り穴から土師器甕、須恵器杯・甕が、掘方から土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。

SD1659・1660溝跡（第2・10・12図）

調査区東側のⅢ層上面で発見した溝跡である。SD1687やSX1709と重複しており、前者より古く、後者より新しい。同位置で3時期の変遷（A→C期）を確認した。C期には東西方向のSD1660に向かう様子が平面形からうかがえることや、埋土の特徴が共通することからこれらは一連の溝跡と考えられる。以下、古い順に説明する。

A期：調査区北壁で確認した。深さは37cmである。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は、Ⅲ層に起因する橙色粘質土をブロック状に含む褐灰色粘質土である。遺物は出土していない。

B期：方向は北で29度東に偏しており、規模は上幅0.6～1.3m、深さ41cmである。底はほぼ水平であり、壁は斜めに立ち上がっている。埋土は2層に区分でき、1層は褐灰色粘質土、2層は灰黄褐色粘質土である。いずれもⅢ層に起因する土をブロック状に含んでいる。

遺物は土師器甕、須恵器甕が出土している。

C期：前述したように、SD1659CとSD1660とが接続する時期である。規模は上幅1.0～2.3m、深さ73cmである。底面はおよそ平坦で、壁は斜めに立ち上がっている。SD1660の方向は東で約25度南に偏しており、規模は上幅80～87cm、深さ17cmである。底面は地形の傾斜に沿って南東側に向かって低くなっている、その比高はおよそ15cmである。壁は斜めに立ち上がっている。SD1659の埋土は2層に区分でき、1層は炭化物を含む黒褐色粘質土、2層は褐灰色粘質土である。

遺物は土師器杯（A・B I・B II・B III・B V類）（第14-4～7図）・高台付杯・甕（B類）、須恵器杯（I・II b・III・V類）（第14-1～3図）・高台付杯・甕・瓶、竈形土器、軒丸瓦、平瓦（II A類）、丸瓦（II類）、砥石、鉄滓が出土している。

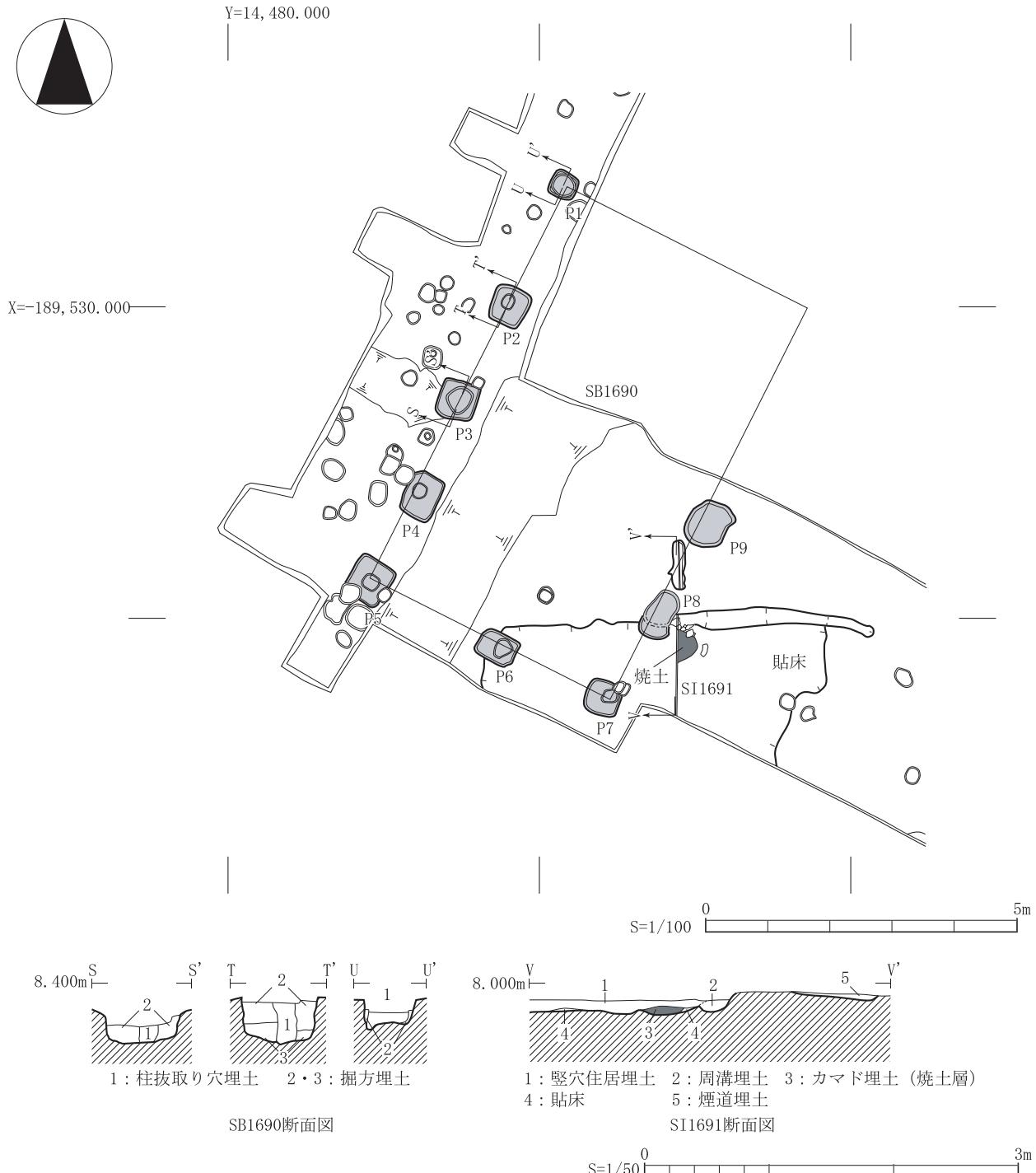
SD1687溝跡（第2・10・12図）

調査区東側のⅢ層上面で発見した溝跡である。SD1659と重複関係がありこれより新しい。方向は北で37度東に偏しており、規模は上幅73～88cm、深さ23cmである。底面はおよそ水平で、壁は斜めに立ち上がっている。埋土は1層で、黒褐色粘質土である。

遺物は須恵器杯が出土している。

SD1658溝跡（第2・10・12図）

調査区東側のⅡ層上面で発見した南北方向の溝跡で、長さは3.1mである。方向は北で約27度東に偏している。SK1692と重複しており、それより新しい。2時期の変遷（A→B期）を確認した。以下古い順に説明する。

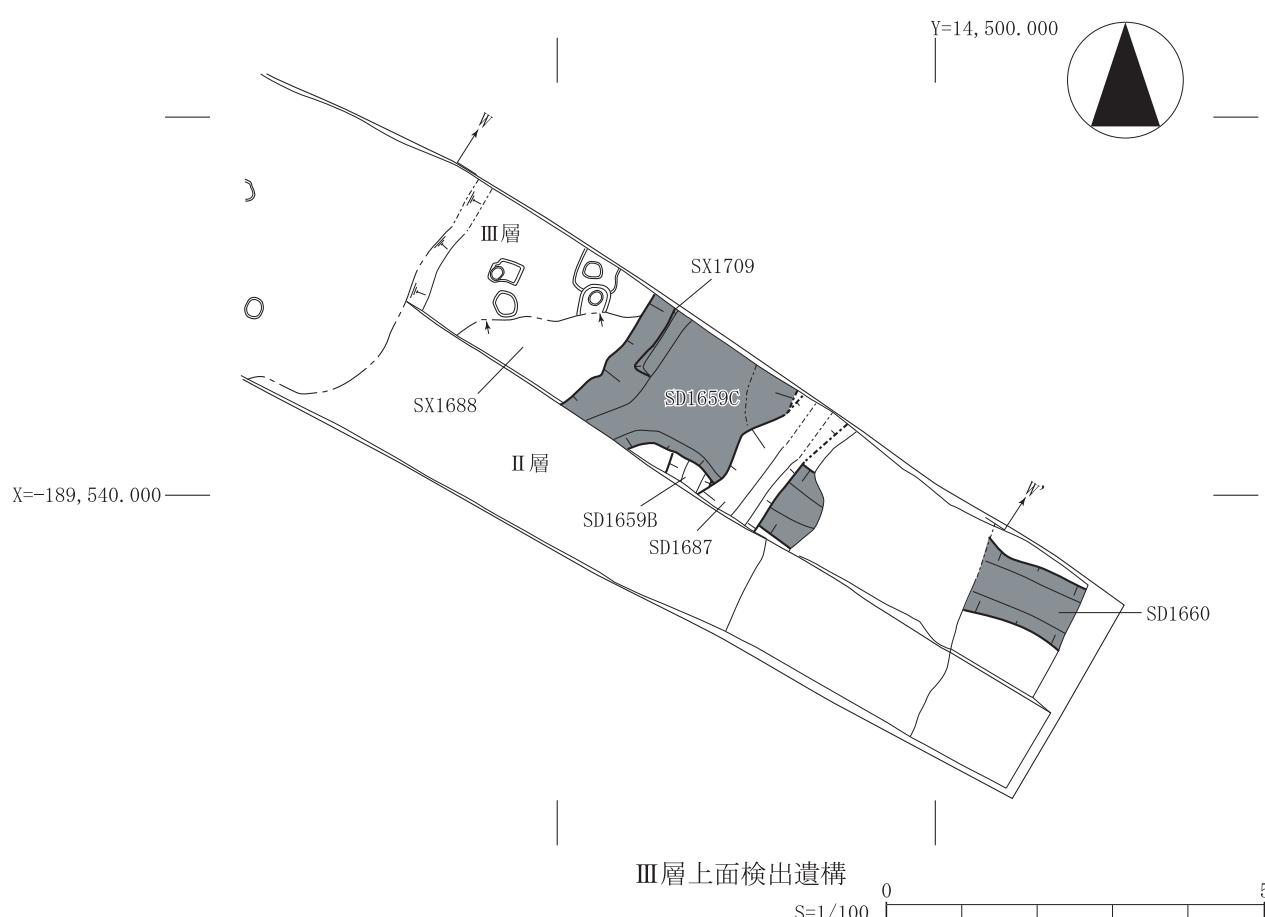
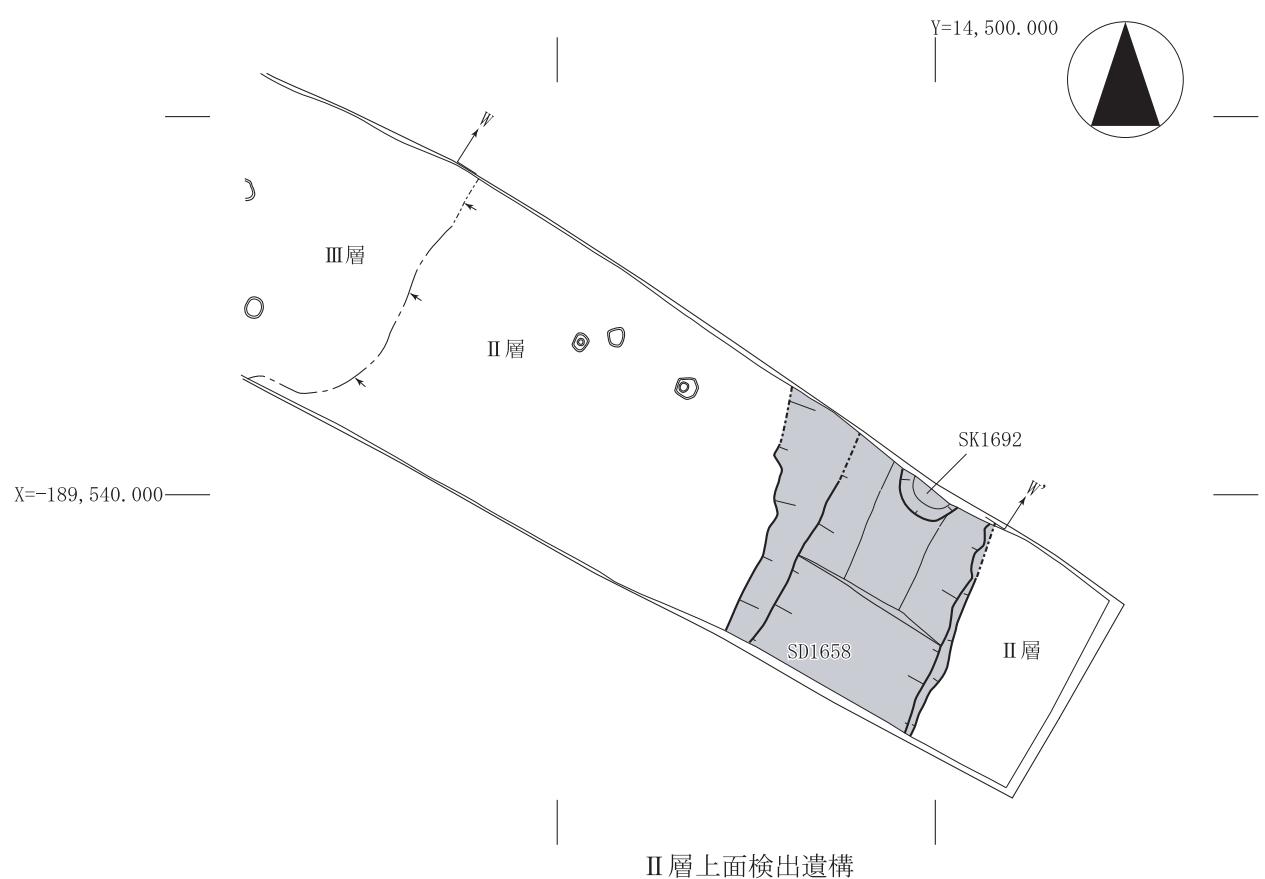


第11図 第8区調査区西半部 遺構平面図・断面図

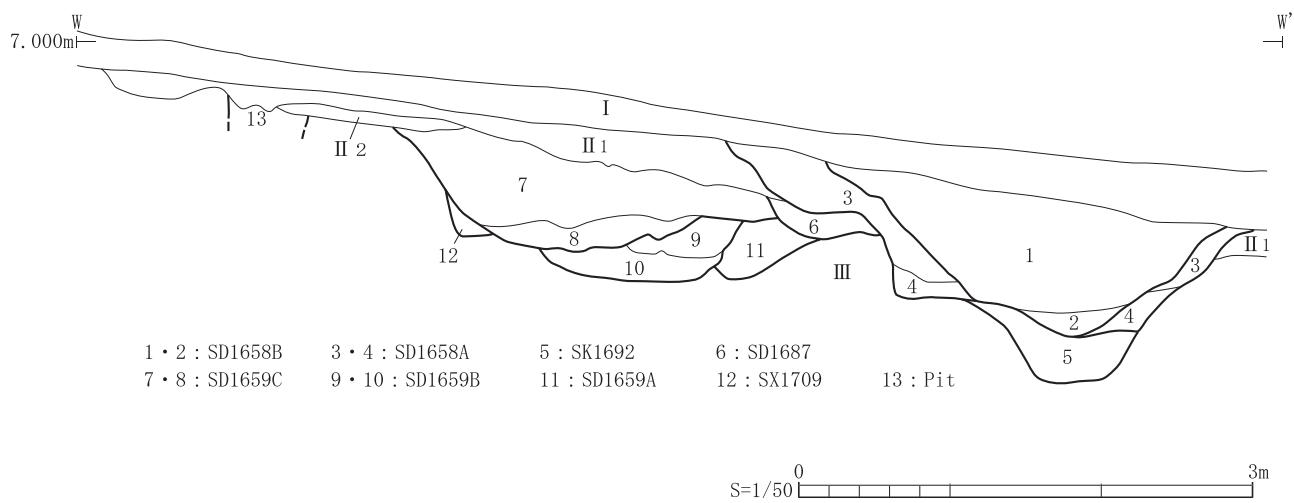
A期：規模は上幅2.8～3.2m、深さ94cmである。底面は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。埋土は2層に区分でき、1層は黒褐色粘質土、2層は褐灰色粘質土で、上層ほどⅢ層に起因する橙色粘質土をブロック状に多く含んでいる。

遺物は土師器杯・甕、須恵器甕、須恵系土器杯が出土している。

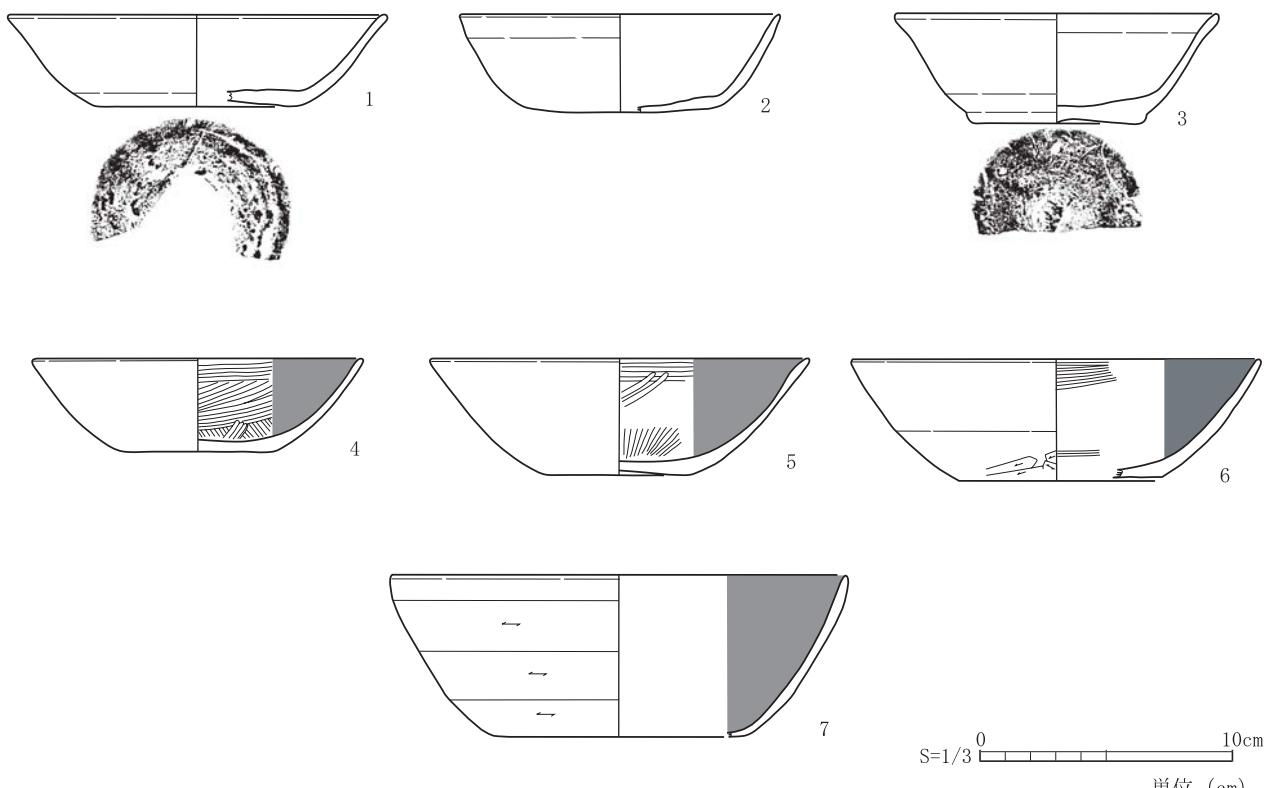
B期：規模は上幅2.1～2.4m、深さ1.0mである。底面は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。埋土は2層に区分でき、1層は焼土を粒状に少量含む暗青灰色粘質土、2層は暗青灰色砂である。



第12図 第8区 調査区東半部遺構 平面図



第13図 第8区 調査区北壁断面図



番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器 ・杯	2層	ロクロナデ、 底面：ヘラ切り	ロクロナデ	15.0 4/24	8.0 16/24	3.55	-	R22	
2	須恵器 ・杯	2層	ロクロナデ、 底面：ヘラ切り	ロクロナデ	12.6 6/24	8.0 8/24	3.9	-	R28	
3	須恵器 ・杯	2層	ロクロナデ、 底面：ヘラ切り	ロクロナデ	12.7 6/24	6.8 12/24	4.4	-	R29	
4	土師器 ・杯	2層	ロクロナデ、 底部：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ ・黒色処理	13.0 2/24	6.1 24/24	3.7	-	R46	
5	土師器 ・杯	1層	ロクロナデ、 底面：回転糸切り	ヘラミガキ ・黒色処理	15.0 2/24	5.6 12/24	4.7	-	R45	
6	土師器 ・杯	1層	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ 底部：摩滅	ヘラミガキ ・黒色処理	16.1 6/24	8.4 19/24	4.85	-	R47	
7	土師器 ・杯	1層	ロクロナデ、回転ヘラケズリ 底部：摩滅	ヘラミガキ ・黒色処理	18.1 8/24	10.0 6/24	6.5	-	R44	

第14図 SD1659C溝跡 出土土器

遺物は土師器杯（BV類）・高台付杯・甕（B類）、須恵器杯（III・V類）・高台付杯・甕、須恵系土器杯・高台付杯、平瓦（I・IIb類）、丸瓦（II類）、砥石が出土している。

SD1689溝跡（第2・10図）

調査区西側のIII層上面で発見した溝跡である。方向は北で20度東に偏しており、規模は上幅60cm、深さ13cmである。底面は水平であり、壁は斜めに立ち上がっている。遺物は出土していない。

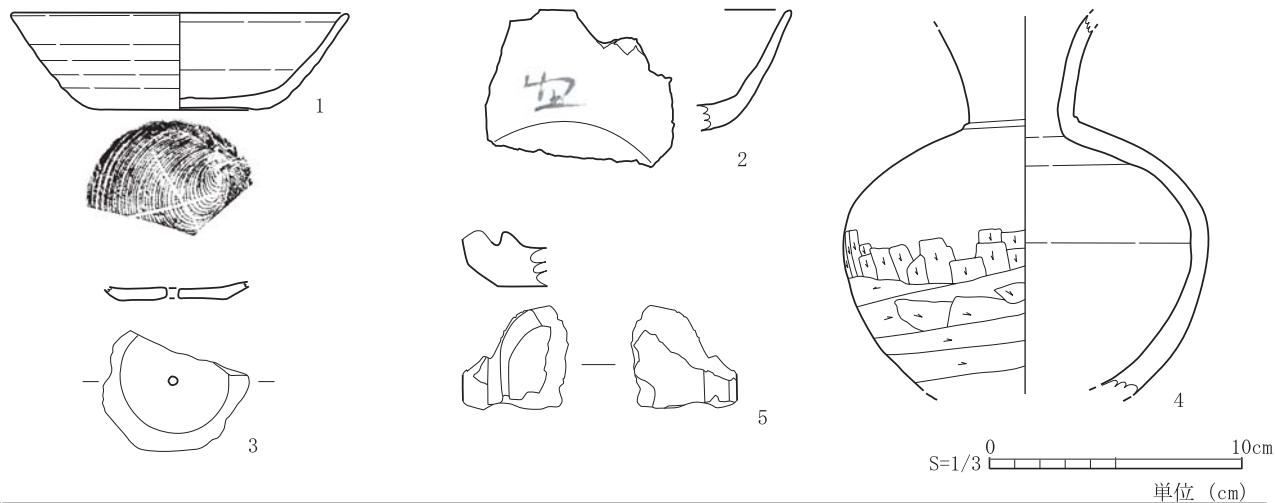
SK1692土壤（第2・10・12図）

調査区東側で発見した土壤である。SD1658と重複しており、それより古い。調査区外へ延びているが、検出した部分についてみると、平面形はおおよそ円形である。規模は直径90cm、深さ50cmである。埋土は暗灰粘質土で下層ほどIII層に起因する橙色粘質土を多く含んでいる。遺物は出土していない。

4 遺構の年代

SI1691からは土師器甕（B類）が出土している。土師器甕（B類）は隣接する市川橋遺跡では8世紀後葉以降に出現すると考えられることから、SI1691の年代は8世紀後葉頃を上限とすることができる。それより新しいSB1690からは須恵系土器が全く出土していないことから、おおよそ8世紀後葉頃から9世紀代の年代を考えておきたい。

SB1690・1700・1701・1705について、柱穴の平面形が方形を呈し、一辺が大きいもので0.8～1.0mの規模がある。このような特徴は古代の建物跡や柱列跡に類似しており、古代の遺構とみることができよう。SB1702～1704やSA1697については、柱穴の平面形が不整形であり、前述したSB1690などと比較して



番号	種類	遺構	特徴		口径 6/24	底径 11/24	器高 3.85	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器 ・杯	8区 II層	ロクロナデ、 底面：回転糸切り	ロクロナデ	13.2 6/24	7.1 11/24	-	-	R40	
2	須恵器 ・杯	7区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	2-3-3	R19	墨書「□」
3	須恵系土器 ・杯	6区 II層	ロクロナデ、 底面：回転糸切り	ロクロナデ	-	2.2 16/24	-	-	R21	底部に穿孔
4	須恵器 ・長頸瓶	7区 III層	ロクロナデ・手持ヘラケ ズリ、底面：回転糸切り	ロクロナデ	-	-	-	2-1	R20	
5	二面覗	7区 I層			-	-	-	-	R51	

第15図 堆積層出土遺物

小規模なもので構成されている。このような特徴を持つものは周辺で確認されている中世以降のものにみられることから、おおよそその時期の遺構と考えておきたい。

SD1659Cからは土師器杯のA類が2点、B類が78点出土している。B類うちB I類が2点、B II類が4点、B III類が1点、BV類が7点とBV類が約半数を占めている。このうち、器形がわかるものが4点あり、底径／口径比は0.37～0.55、器高／口径比は0.28～0.36である。須恵器杯は、I類が2点、IIb類が1点、III類が23点、V類が6点とIII類が多数を占めている。このうち器形がわかるものは3点あり底径／口径比は0.53～0.63、器高／口径比は0.24～0.35である。このような土師器杯の器形や、BV類が占める割合が多いことは、多賀城跡第61次調査鴻の池第10層出土土器と共に、年代は9世紀後半頃が考えられている。また、須恵器の器形や須恵器杯の組成については9世紀前葉から天長9年(832)をさほど隔たらない9世紀前半に限定される多賀城跡第60次調査SE2101B III層出土土器や、9世紀中葉頃とされる同第62次調査SK2167の中間的な様相を示している。また、須恵器が一定量出土していることは、同第61次調査鴻の池第10層出土土器より古い要素といえる。したがってSD1659Cは9世紀中葉から後半頃の年代を考えておきたい。これより古いSD1659Bから出土した土師器甕や須恵器杯はいずれも細片であり、またSD1659Aについては遺物が出土していないことから、年代は不明である。

SD1658A・Bからは須恵系土器が出土していることから、10世紀代と考えられる。

SE1696から出土した遺物はいずれも小破片であるが、土師器についてみるとA類が20点、B類が12点出土しており、A類が半数以上を占めている。また、土師器杯はB I類とB II類のみでBV類は出土していない。このような特徴は、延暦9年(790)より古い8世紀後葉頃と考えられる市川橋遺跡SX1351A・Bの特徴と共に、この井戸跡もおおよそこの時期の遺構と考えておきたい。

5 まとめ

- (1) 調査区は東側が湿地、西側が丘陵部となっており、丘陵部から古代及び中世以降の遺構を発見した。
- (2) 古代の遺構として掘建柱建物跡や竪穴住居跡、溝跡、井戸跡があり、掘立柱建物跡の中には大きな柱穴で構成されるものもある。
- (3) 中世以降と考えられる遺構としては掘立柱建物跡、柱列跡を発見した。

参考文献

- (1) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II－』多賀城市文化財調査報告書第77集 2003
- (2) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』 1992
- (3) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992』 1993



1 第8区 SB1690堀立柱建物跡（北西より）



2 第8区 SB1690堀立柱建物跡（南西より）



3 第7区 IV層上面遺構検出状況（北西より）



4 第6区 II層上面遺構検出状況（西より）

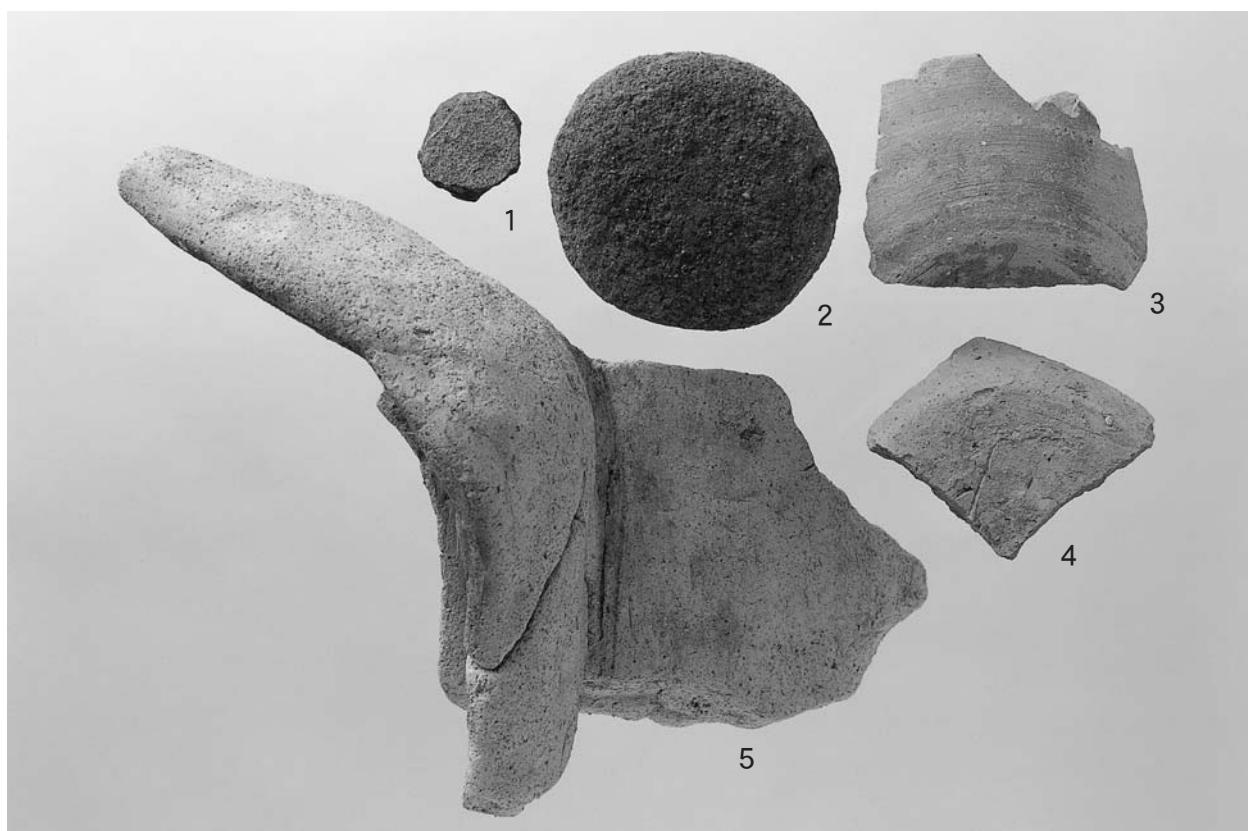
写真図版 1



1 長頸瓶 (第15図4 R20)



2 SE1696出土木製品 (第9図 手前からR 1,R 2)



3 土器片製円板、墨書き土器、竈形土製品 (1:R38 2:R44 3:R19 4:R10 5:R6)

写真図版2

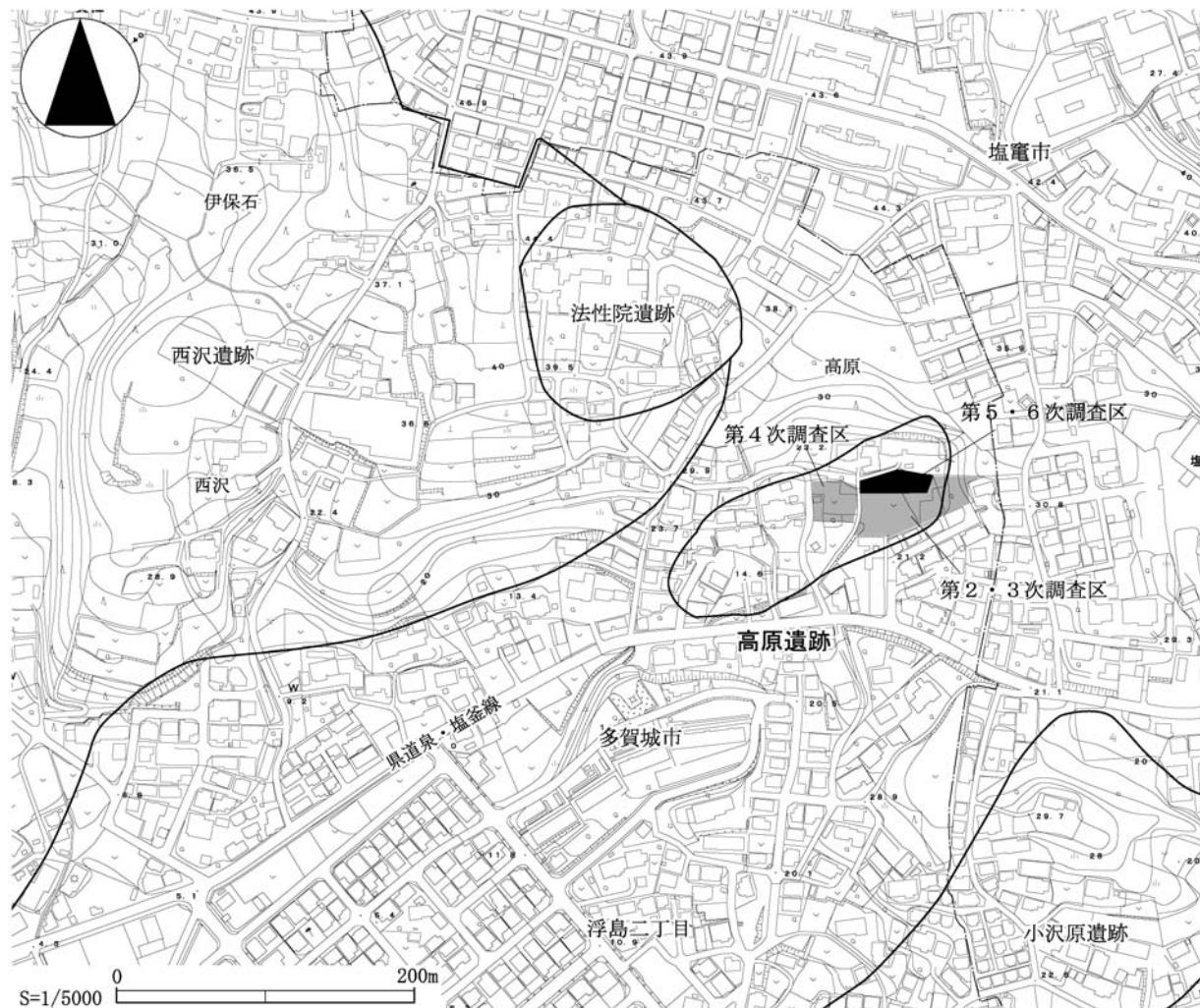
V 高原遺跡第6次調査

1 調査区の位置とこれまでの調査成果

本調査区は、高原遺跡の北東部に位置している。現況は荒蕪地であり、標高は20m前後となっている。これまで本地区周辺では南側3箇所で発掘調査を実施しており、古代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、溝跡、土壙などを確認している。このうち第4次調査で発見したSD12溝跡からは、概ね完形の10世紀以降の土器が多く出土しており、多賀城と関係のある施設の存在が推測される。一方、第2・3次調査区東半部は、古代においては東側に向かって落ち込む谷状の地形であることが明らかとなっている。

2 調査に至る経緯と経過

本調査は、共同住宅建設に伴う発掘調査である。平成19年3月、地権者より当該区における共同住宅新築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に建物部分で最深1.4mの地盤改良を施すことや、擁壁部分では約2mの深さまで基礎工事を行うことが示されていた。周辺の調査成果では、現表土から10~30cmの深さで遺構が確認されていたことから埋蔵文化財への影響が懸念される一方で、南側に近接する第2・3次調査の成果より当街区の中央及び東半部については谷状の地形である可能性が高く、その埋まり土が厚く堆積していることが推測された。そのため、事前に



第2図 調査遺跡と周辺の遺跡群

確認調査を実施し遺構の有無を確認するとともに、その成果に基づき費用の積算を行うこととした。5月14日より対象区の中央部分に試掘坑を設け調査を行ったところ、大部分が谷もしくはそれよりも新しい堆積層であることが明らかとなった（第5次調査）。しかし、西端部及び東端部で柱穴や溝跡が確認されたことから、この部分については記録保存が必要であると判断し、11月8日に地権者と委託契約を締結し本発掘調査に移行した。

11月13日、住宅部分の東端部より重機による表土除去を開始した。SD23溝跡を確認したものの、ほとんどが谷の堆積土であったことから、直ちに溝埋土を掘り下げて全景写真を撮影した。14日、西側の擁壁部分の表土除去を行い、柱穴やSD24溝跡、SK25土壌などを発見した。柱穴の半截や溝、土壌埋土の掘り下げ、全景写真の撮影を行った後、東側の調査区とともに平面・断面図の作成を開始した。15日、土層の注記及び器材の撤収を行い、本調査の一切を終了した。

3 調査成果

（1）層序（第3図）

I 層：現在の表土及び盛土層であり、4層に細分することができる（第3図3～6）。厚さは最大60cmである。

II 層：調査区中央部で確認した堆積層であり、4層に細分することができる（第3図7～10）。褐色またはオリーブ灰色粘土であり、厚さは最大90cmである。地権者の証言より当該地はかつて水田として利用されていたことや、埋土中にガラス片やビニールが認められることなどから、新しい水田耕作土であると考えられる。

III 層：調査区東部及び西端部の一部で確認した堆積層であり、10層に細分することができる（第3図11～20）。褐色またはにぶい黄褐色が主体であり、地山に近い層では礫が多く混入している。古代の土器片が僅かに混入している。

IV 層：明黄褐色または黄褐色粘質土であり、本地区の最終遺構検出面である。調査区中央部に向かって壅んでおり、最も深い箇所では現表土から2.2mに達する。

（2）発見遺構と遺物

SD23溝跡（第2図）

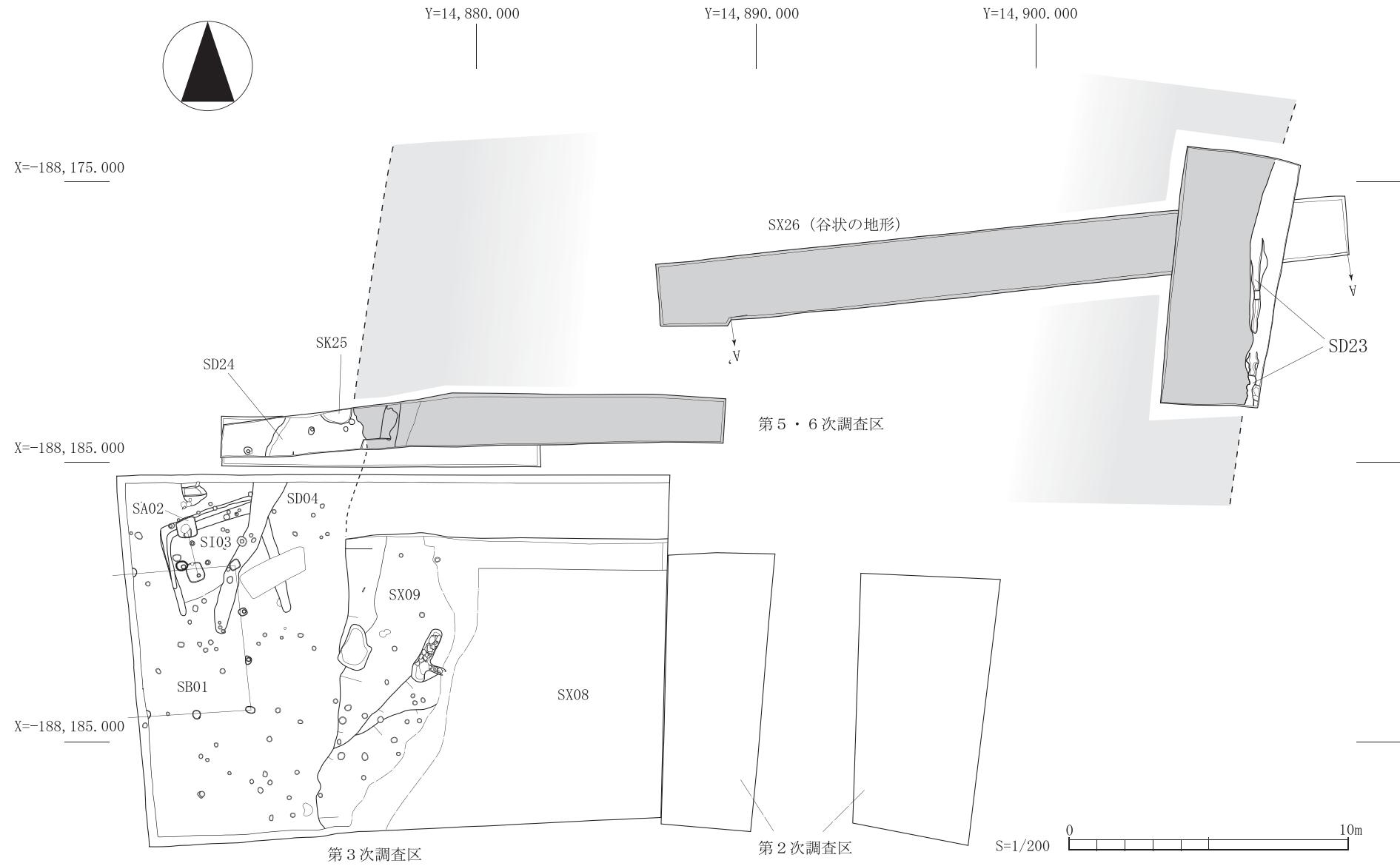
調査区東端部で発見した南北方向の溝跡であり、残存状況は非常に悪い。方向は北で約3度東に偏しており、規模は長さ6m以上、上幅20～30cm、深さ3～7cmである。壁は凹凸があるものの、概ね緩やかに立ち上がっている。底面も凹凸が多く、南側に向かって下っている。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

SD24溝跡（第4図）

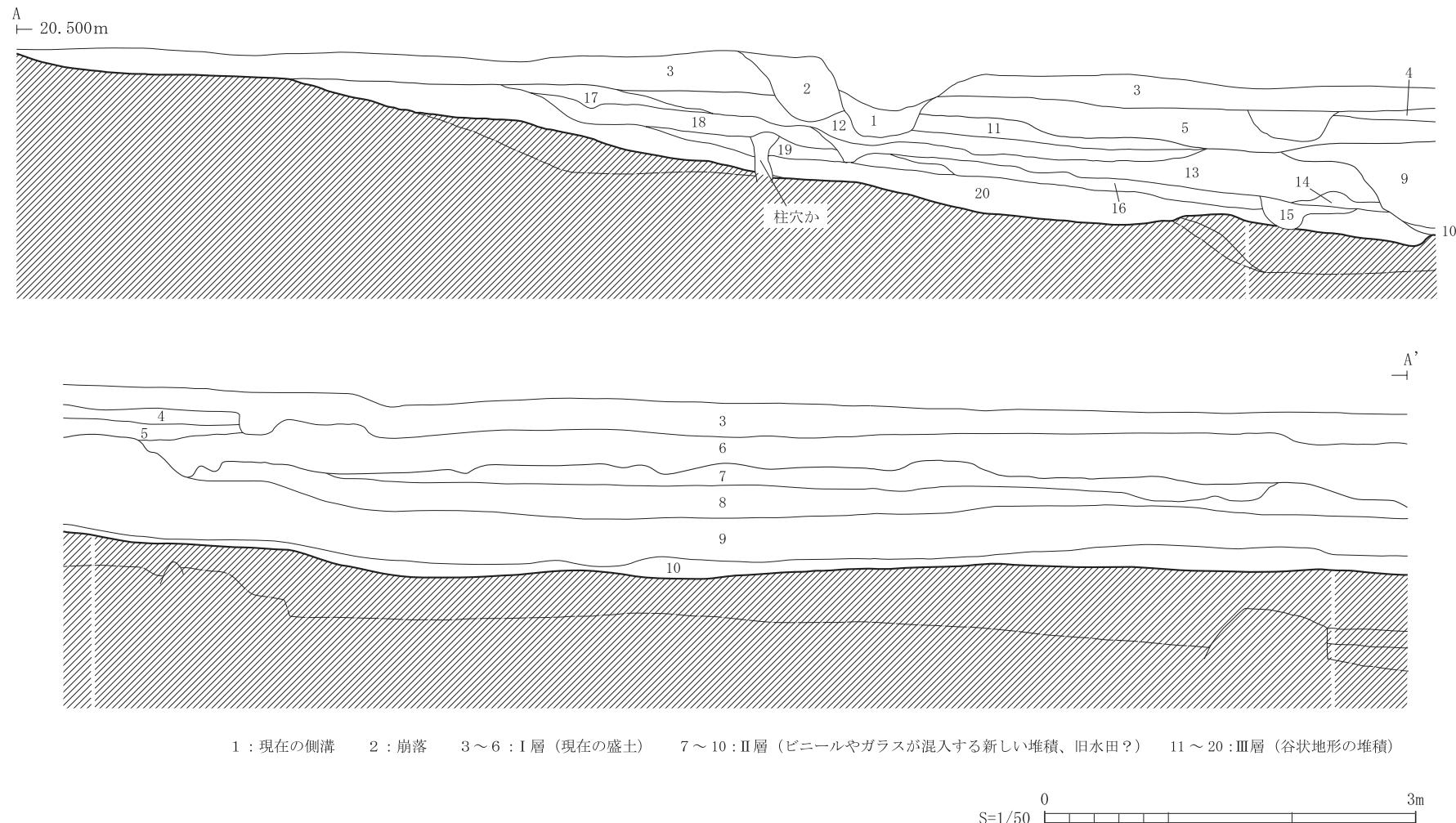
調査区西端部で発見した南北方向の溝跡であり、残存状況は非常に悪い。規模は長さ1.6m以上、上幅約1m、深さ約15cmである。壁は緩やかに立ち上がっており、底面は北側から南側に向かって緩やかに下っている。遺物は出土していない。

柱穴

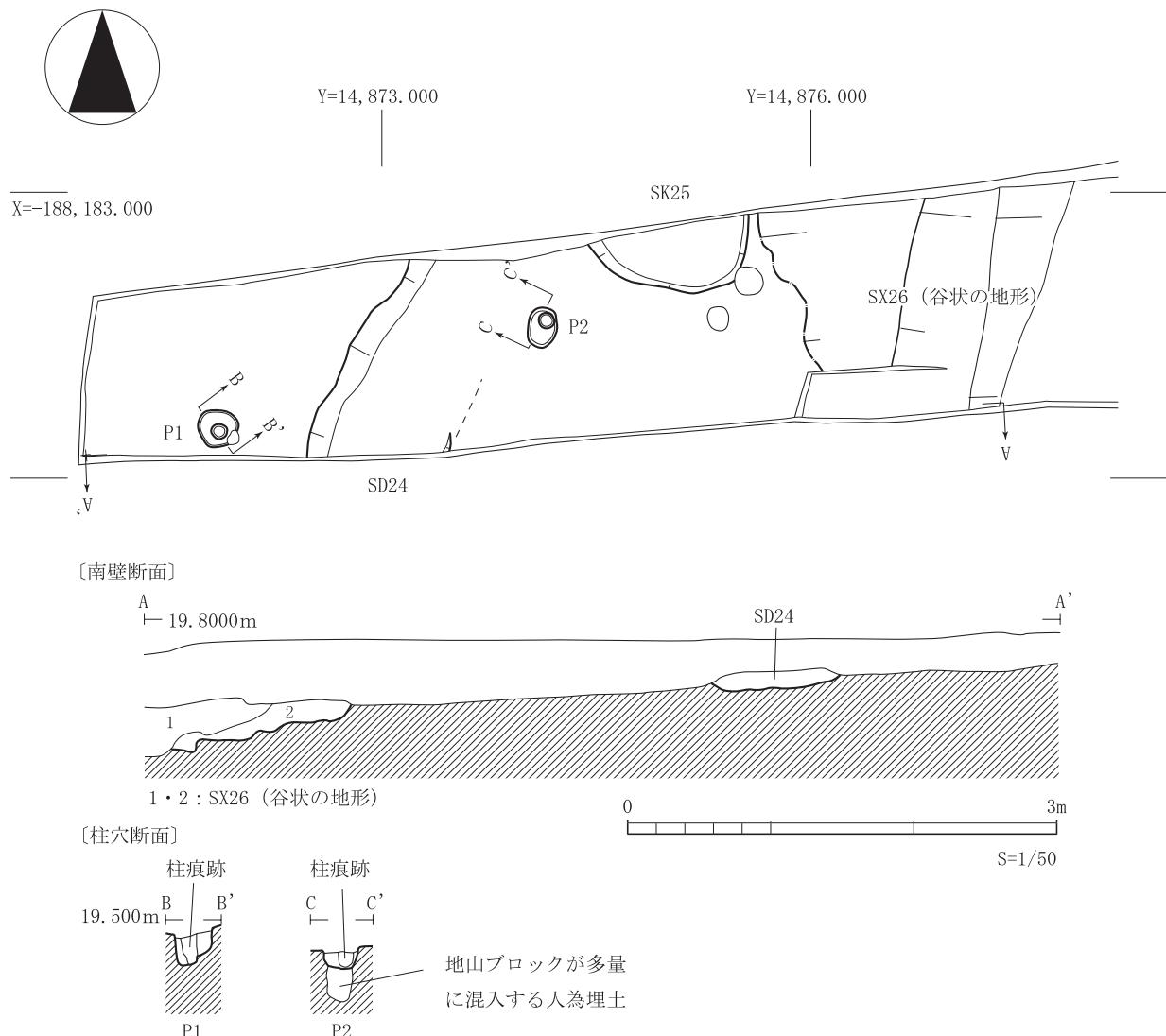
調査区西端部で柱穴2基を発見した。平面形は長軸30cmほどの橢円形であり、直径約12cmの柱痕跡を確認している。遺物は出土していない。



第2図 調査区配置図



第3図 調査区中央部断面図



第4図 調査区西端部平面図・断面図

4 まとめ

西端部で柱穴や土壙、東端部で溝跡、中央部で谷状の地形を確認した。出土遺物がないため、これらの年代については明らかでないものの、谷状の地形については上面を覆うIV層から古代の土器片が出土しており、それ以前から同様の地形であったものと考えられる。

なお、南側に隣接する第3次調査では、3時期の変遷があるSX08沢状遺構や人為的に形成されたSX09平場状遺構が報告されている（註）。位置関係をみると、前者については今回確認した谷状の地形と同一のものであり、後者についても西端部の落ち際で確認した僅かな平坦面がこれに相当するものと考えられる（第2図）。本地区の状況を見る限り人為的な掘り込みや埋め戻し等は確認できなかったことから、自然地形の一部と判断するのが妥当であろう。

註：多賀城市教育委員会『高原遺跡—第2・3・4次調査報告書一』多賀城市埋蔵文化財調査報告書第73集 2004

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おざわはらいせきほか
書名	小沢原遺跡ほか
副書名	小沢原遺跡第10次調査 留ヶ谷遺跡第5次調査 高崎遺跡第68次調査 高原遺跡第6次調査
シリーズ名	多賀城市文化財調報告書
シリーズ番号	第92集
編著者名	武田健市、村松稔
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL: 022-368-0134
発行年月日	西暦2008年3月28日

ふりがな 所収遺跡	所在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おざわはら 小沢原遺跡 (第10次)	みやきけんたがじょうし 宮城県多賀城市 うきしま 浮島二丁目97番1、97番4	042099	18043	38度 18分 14秒	140度 59分 57秒	20070406 20070510	130m ²	宅地造成
とめがや 留ヶ谷遺跡 (第5次)	みやきけんたがじょうし 宮城県多賀城市 とめがや 留ヶ谷一丁目353-1、 359-2、358-2	042099	18047	38度 18分 5秒	141度 0分 20秒	20070524 20070803	389m ²	共同住宅 建 設
たかさき 高崎遺跡 (第68次)	みやきけんたがじょうし 宮城県多賀城市 たかさき 高崎二丁目288外22筆	042099	18018	38度 17分 43秒	140度 59分 44秒	20070821 20071005	500m ²	宅地造成
たかはら 高原遺跡 (第6次)	みやきけんたがじょうし 宮城県多賀城市 うきしまあざたかはら 浮島字高原71番1	042099	18042	38度 18分 27秒	141度 0分 1秒	20071113 20071115	64m ²	共同住宅 建 設
所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
おざわはら 小沢原遺跡 (第10次)	集落	奈良 平安	掘立柱建物・ 竪穴住居・土壙		土師器・須恵器		桁行5間以上の 建物発見	
とめがや 留ヶ谷遺跡 (第5次)	城館 集落	平安	竪穴住居		土師器			
		中世	堀・井戸		無釉陶器・柄杓		幅4m以上の堀を 発見	
		近世	掘立柱建物・ 土壙		磁器・茶臼・古銭・ 下駄			
たかさき 高崎遺跡 (第68次)	集落	古代	掘立柱建物・竪穴 住居・井戸・溝		土師器・須恵器			
		中世以降	掘立柱建物・ 柱列					
たかはら 高原遺跡 (第6次)	集落		柱穴・溝					
要 約								

多賀城市文化財調査報告書第92集

小沢原遺跡ほか

小沢原遺跡第10次調査

留ヶ谷遺跡第5次調査

高崎遺跡第68次調査

高原遺跡第6次調査

平成20年3月28日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022)368-1141

印刷 株式会社渡辺印刷所

塩竈市旭町17番10号

電話 (022)364-3161
